
真・恋姫無双～第二の人生は乙女だらけの三國志～

本田・狂之助左右間・繰屑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜第二の人生は乙女だらけの三國志〜

【Nコード】

N7903U

【作者名】

本田・狂之助左右間・繰屑

【あらすじ】

病死したある男の転生先きは乙女だらけの三國志って話。
アンチなんかはない予定です。処女作なので駄文ですが生温い目で見守って下さい。

第二の人生始めました（前書き）

第一話

小説って難しい！駄文ですが生温い目で見守って下さい。

第二の人生始めました

第一話………………。………………。そこは暗闇の中、光もなければ音もない。そんな空間の中にただ一人、自分の存在すらボヤけてしまっているような感覚に襲われる。

「そういえば、死んだんだっけ。」

何を今さら。しかし我ながらに良い死に方ではなかった。別にグチャツとかバラバラだったのではない。むしろベッドの上で麻酔が効いたまま痛みも感じずに逝くことができた。

心残りは両親を残してきたことだ。親孝行もせず、なかなか就職もできなかった俺を叱りながらも最後まで見捨てずにいてくれた。就職が決まった時は泣いて喜んでくれたし、昇進した時は俺のため高い酒を買ってくれた。原因不明の病気にかかり入院したのは俺が26の時だった。ただ衰弱していく。ただそれだけの症状。どんな薬も効かなかった。原因も解らないから手術も出来ない。そんな俺を両親は毎日見舞に来てくれた。だが来る度に両親が小さくなっていくような気がした。

「ごめん、先に行ってる」

これが俺の最後の言葉だった。何ともスカシタことを言ったものだ。衰弱してまともに喋れない俺の最後の意地だったのだが（笑）

今までのことを考えると此処は地獄なのかも知れない。ファーストな機動戦士のラ〇ア（逆襲にも出た）さんも言っていたが意識だけが生きているのは中々に地獄だ。

「ッ、なんだ！」いきなり強烈な光が射し込んでくる。無理矢理此処から押し出されていく。

「……………」(声がでない)いきなり光溢れる空間に押し出され、声も出せない。ドシタモノカネ?なんて考えていると若い女性の悲鳴が聞こえる。「!!!!?????!」……………」(

何を言っているのかさっぱり解らん)言葉の発音的に中国語のような気がするが違うかもしれない。(てか死んだよね、俺?)なんて考えていると頭にバットで殴られたような鈍痛と背中から尻にかけてひっぱたかれたような痛みが同時に襲ってきた。「オギヤアオギヤアオギヤア」(痛えな!何しやがる)

あれ…………?

「オギヤ?」(あれれ?なにこれ?)「泣いた…………泣きました……………」

……………」(奥様!)「よくやりましたね香。今はゆつくッ!香、

香!しっかりとしなさい香!」(奥様、もう…………しわけありません、

どうか、この…………子を……………」(医者は何をしているか!早く呼

んでこい! 香?しっかりとしなさい香!」

いきなり理解できるようになった言葉、ここが何処なのかとか疑問はたくさんあるが解ったことが一つ。……………俺の母親

は今亡くなったということだ。赤ちゃんの心と体はストレート

に繋がっているらしい。心で第二の母親が亡くなったことを悲しんでいたら体がそれに反応して盛大に「オギヤオギヤ」と泣いている。

「泣かないで、貴女は私がしっかりと育ててあげる。香のように優しく美しい娘に。必ず。」

泣きながら俺にそう宣言するこの女性、今さらりと凄いこと言わなかったか!? 貴女?娘?俺男だよ……………。第二の母親が亡くなったのにそんなことを考えている自負が情けない。そうしている内に意識がボヤけていく。(今は少し休みたい。今の状況も俺を産んでくれた母さんのことも今は忘れたい。)(心が壊れちゃうから…………)

「眠ったのね。香の葬儀の手配をしてちょうだい。それと田豊を呼んでおい「奥様」入って」

50〜60歳位だろうか、一人の男性が部屋に入ってきた。

「奥様、その子が……」

「そうよ、我が袁家の血を受け継ぐ二人目の子よ。」

「下女は「香よ!」失礼足しました。名はつけたのですか?」

「授ける前に逝ってしまった。自分の子の名前もつけずに、バカな娘よ。」

女性の頬をまた涙が伝う。

「その子をどうなさるおつもりで、奥様。」

田豊と呼ばれた老人は静かに問い掛ける。

「私が育てるわ。それが香との約束だからね。」

俺をあやしなから女性は答える。「しかし、奥様には本初様が……」

「娘が一人増えたとして立派に育てて見せるわ。それに私が娘も満足に育てられない女だと?」

「いえ、失礼足しました。その様に取り計ります。はあ、仕事が増えましたなあ」と田豊は優しく微笑んだ。

「そうねえ、でもやらなくてわ、麗羽とこの子の為にも。」

「頑張る前に奥様、その子にお名前をつけてあげなければ。」

「そうだったわね、そうねえ……袁姫^{エンキ}真名は麗華^{レイカ}字はつけないわ。香にもなかったしね。」

「……やはり袁の名を授けますか?」

「何を今さら。この子は袁家の人間です。誰が、なんと言おうとも。」

「畏まりました。ソ授の野郎と葬儀等のことはやっておきますので今日はお休みください。」

「わかった、今日は休むとするわ。部屋には誰も近づけないで、あと袁姫は私の部屋で預かるわ。」「本初様はいかが致しますか?」

「麗羽には今日は一人で寝るようになって。」

「畏まりました。」袁家の長い1日が終わろうとしていた。

第二の人生始めました（後書き）

第一話。

話に纏まりがない（泣）

駄文だ。誰か文才を売って下さい。

こんな駄文を読んでくださりありがとうございます。

第二話（前書き）

駄文です、すみません。処女作なのでよろしくお願いいたします。

第二話

第二話……………

あれから十年の月日が流れた。俺は袁姫として第二の人生を歩んでいる。……………女として。

そこ！頭がおかしいやつを見るような目で見るな！ お前らには解るまい、今まで二十六年も共に歩んできた相棒ことマイサンがいらないというこの喪失感。精神は男なのに女口調で話さないとイケないという気持ち悪さ！

慣れたけどね。十年もやってれば。

この十年は驚かされてばかりだ。まず場所、ここは後漢という国のキ州という所らしい。後漢ですよ！後漢。しかも家族にも驚かされた。俺がこの世界に産まれた時に亡くなってしまった産みの親に代わり俺を立派に育てて見せると言っていた女性、姓を袁、名を成という。

解らない人もいるだろう。ならば俺の姉に驚いてくれ！俺の姉は姓を袁、名を紹、字を本初、真名を麗羽という。あつ、真名つてのはこの世界の人間の大切名前のことらしい。許していない相手が呼

んでしまった場合、相手は殺されても仕方がないらしい。物騒な世の中だ。

話がそれたがあの袁紹だ！曹操に勝てない名門の人。俺は好きだったよ、三國な無双では持ちキャラだったし……………そこじゃない！いやそこにもビックリだけでもっとビックリなのは袁紹が女だってこと。

まあ、慣れたけどね。十年も姉妹をやっていたらね。

姉とは三つ違いでとても可愛がってもらっている。ん？この足音は、噂をすればとやらだ。

襖が物凄いスピードで開く。

「袁姫ちゃん、ここに居ましたの！」

この何とも「オーホッホッホ」なんつう笑い方が似合いそうな金髪タテロールな女の子が袁本初その人である。

「姉上、どうしたのですか？」と、とりあえず聞いてみる。

「どうしたもこうしたありません！服屋に今年の新作が入ったそうですわ！早く買いに行かなければ！」

「アラ、それは良いわね。久しぶりに親子三人で買い物にでも行きましょうか？」

「御母様！居ましたの！」「何時のまに部屋に入ってきたんですか袁成様。」

「今よ、今。麗羽が嬉しそうに走って行くのを見てね。」

「そうでしたの！では私は私と袁姫ちゃんのお出かけ用の服を選んでいきますわ！行きますわよ袁姫ちゃん！」

「えっ！ちょッ姉上！？」

そうして姉上に引きずられながら俺こと私は自分の部屋から引きずり出されてしまった。そこ！笑ってないで助けてくださいよ袁成様！

「麗羽と袁姫を連れて買い物に行ってくるわ。仕事は田豊とソ授に割り振っておいて」

「畏まりました」下女が部屋から出ていく。

「ふう、娘達を待たすわけにはいかないわね。」今日は快晴。絶好の買い物日和である。

第二話（後書き）

まだ当分原作には入りません。てか入れません。すみません。処女作なのでよろしくお願いいたします。

第三話（前書き）

結構、てかほとんどオリジナルストーリーでいくつもりです。またオリジナル設定多いですがどうぞよろしくお願いいたします。

第三話

ここはキ州のギョウという町。キ州の政治の中心であり華北袁家（便宜上こう呼ぶ）の基盤となっている場所である。 ここで

大分遅くなったが私……俺の家族を紹介しよう。まず俺の産みの親、名を香という。袁成様付きの下女で真名を持たない部族の出身。優しい人だったそうだ。俺は目元が母にそっくりだそうだ。

次に今の私……の継母にあたる袁成様。真名を華潞カレイという。皆さんもお気づきだろう。袁家の統領や袁家の本家直系の人間が真名に入れる「羽」の文字が無いのだ。これには訳がある。元々袁成様は袁家の分家の出なのだ。その当時袁家では御家騒動真っ只中であり、この御家騒動のせいで本家を継ぐはずの人が皆殺されるという事態を招く。慌てた本家の人間は丁度年頃だった袁成様と本家の年頃の男性、要するに私と麗羽姉上の父親を結婚させて産まれた子を統領とすることにした。子ができるまでは父親を暫定的な統領とする事にしたが父親には政治力も外交能力も無く、事実上袁成様が袁家を統べることになった。そして麗羽姉上が産まれ、袁家も安泰だと思っていた矢先に事件が起こった。父親が袁成様付きの下女に乱暴を働いたのだ。挙げ句下女は子をお腹に宿した。元々冷えきっていたのに加え袁成様は私の母と身分の差があるにも関わらず親友と呼び合える仲だったためこの事件にぶちギレてしまう。そして母や自分につき従う者を引き連れて本家を飛び出したのである。袁家の影の統領だった時のコネを使い、中央政府からキ州の牧の地位をふんだくり、今にいたる。

次に麗羽姉上だ。袁家統領の継承権第一位である。性格は大雑把で名門袁家の人間であることに凄まじいプライドを持っている。人を見下したような発言もしたりするが民のことを慈しむことのできる優しい女性である。あと浪費家であるが私がお願いと我慢し

てくれる。

最後に私だが姓は袁名を姫、真名を華麗という。真名は響きを袁成様から頂き、文字は袁成様と麗羽姉上から一文字ずつ頂いた。容姿は正に傾国の美女らしい。自分で言っておいて凄く恥ずかしい。まあ、美人なのは確かだ。肌は透き通るように白く髪は銀色、目は赤い。出る場所は出てるし。麗羽姉上の方が凄いが。

さて、他にも田豊爺やソ授爺、郭図のオッサン等がいるが今度しよう。

「やっと着きましたわ!」

どうやら目的地に着いたようである。馬車で親子三人で仲良く揺られること三十分ほどである。

「麗羽、服は逃げないわ。少し落ち着きなさい。」

「逃げませんが買われてしまいますわ!」

たしかにそうである。「それにもう少しで袁姫ちゃんと離ればなれになってしまいますし。」珍しく麗羽姉上が声のトーンを落とす。しかしそうなのだ。今年の内には麗羽姉上は都の有名な学舎へ、私はケイ州だかどっかの水鏡こと司馬キが開いている塾に行くことになっているのだ。なぜ麗羽姉上と一緒にいかって?それは私が純粹な袁家の人間ではないからだ。都の学舎には有力貴族や地方豪族の子息が来る。その時、私が万が一苛められたりしないようにとの袁成様の配慮である。それに水鏡女学院……女学院!?!
まあ、気にしたら負けか。とにかく水鏡女学院は有能な人材を世に送り出していることで有名だ。うまくすれば有能な人材を袁家に引っ張れるかもしれない。

はあ、学校とか何年ぶりかな?

「袁姫ちゃん、行きますわよ!」

「はい、今行きます。」さて、麗羽姉上と袁成様の着せ替え人形になりに行きますかね(笑)

「良い買い物が出来ましたわ！」

「日がくれてしまったわ。どうせ棚に有るもの全て買ったもの、最初からそうしなさいな。」

「袁姫ちゃんを選びながら買うからこそ楽しいのですわ、棚に有るもの全て買ったのは結果に過ぎません御母様！」楽しい家族の一時、ふと外を見てみると気になるものを見つけた。

「ちよつと止めてもらってもよろしいですか？」

「どうしたの袁姫？」

「気になるものがありました」

「解ったわ、少し止めて頂戴。」「畏まりました。」

馬車を止めてもらい露店に近づく。

「ローマの方ですか？」相手はびっくりしたようだ。

「我等がローマ帝国を御存知なので!？」

「名前だけなら。少し見せてもらっても?」

「どうぞどうぞ、手に取ってみてください。」

「商いの方はどうですか？」

「この国との商いは儲かるのですが潮時かもしれません。北方の遊牧民達の活動が活発になっています。」

「そうですか。あつ、すみませんこれとこれをください。」私に取ったのは見事な金細工されたエメラルドの首飾りと銀細工されたサファイアのイヤリング。エメラルドを麗羽姉上、サファイアを袁成様が着けたら似合うと思った。

「これは良い品ですよ」と言いながら秤で量り値段を言ってくる。それを私は言い値で買う。

「値切らないので？この国の人は値切るのが上手いので覚悟していたのですが。」 「大切な人にあげる品なんです。ありがとう、いい買い物が出来ました。」 「ちょっと待ってください、これも持っていてください。」と店主はシンプルな銀の指輪を差し出してきた。「いいのですか？」 「商人が始めに出す金額は値切られることを前提にした金額です。これでは此方が貰いすぎです。」と笑いながら言ってきた。

「ありがとうございます。なら遠慮なく頂きます。」

「また商いをするためにこの国に来ようと思います。その時はまたご贖肩に。」 「はい、また漢にいらした時はキ州に来てください。奮発しますよ（ニコ）」

異国の露店商と別れて馬車に戻る。

「何をしていましたの？」

「珍しい細工が目に入ったもので。」

「西域の民、いや、更に西の民か。」

「袁成様、麗羽姉上、私からの贈り物です。」

首飾りを麗羽姉上に、イヤリングを袁成様に渡す。

「ありがとうございます！袁姫ちゃん、大切にしますわ！」

「あら、うれしわね。ありがとうございます袁姫。」

二人とも喜んでくれたようだ。いい思いで作りになった。今日も長い袁家の一日が終わる。

田豊爺とソ授爺が激務で干からびていた。

次はもう少し仕事を片付けてから出かけると袁成様が苦笑いしてた
(笑)

夜中、郭図のおっさんが部屋に來た。

このおっさん、姓を郭、名を図、字を公則という。キ州一の汚職官吏とは彼の事だ。人並み以上に仕事が出来なくせにそれを横領とかにしか使わない困った人だ。まあ、今でわ私の片腕的な人ですけどね。

「袁姫様、頼まれていた仕事終わらせてきましたよ。」このおっさん、以外に商いが上手い。政治、外交、軍略どれも田豊爺やソ授爺に勝てない人だが此だけは袁家一と言ってもいい。手元に有るものを何処にいつ売れば最大の利益が出るかを的確にやってのける。

「着服してないですよね？」

「してませんよ。少なくともあなた様が袁家に居る内はしませんよ。命がいくつあっても足りない。」

「それなら結構。私が家を離れたからって汚職しちゃ駄目ですよ。かなりの所までソ授爺に気づかれていますよですから。」

「ソ授のじいさんに流したのあなた様でしょ？勘弁してくださいよ。」

「此ぐらいやらないとあなた汚職するじゃないですか。」

ため息しながら答える。このおっさんを助けようと思ったのは何も憐れに思ったとかではない。ゆくゆくは華北袁家はキ州周辺の州も統治下に置くことを念頭に行動している。そして他州を統治下に置いたとき派遣出来るほど文官、武官に袁家は余裕がない。文官と武官がいない訳ではないが能力に難ありなのだ。現地の役人を従わせながら統治するとなれば尚更である。多分田豊爺やソ授爺を派遣することになる。その時キ州を任せられるのほど能力のある文官はこれのおっさんぐらいしか居ないのである。

「頼みますよ、これでもあなたのこと結構頼りにしてるんですから。
」ここに袁成様をして「妖艶」と言わしめた極上の笑みを付け加える。

「はいはい、解りましたよ。」適当な返事しているが顔真っ赤だぞ。

郭図のおっさんが部屋から去り、一人になる。

女学院と袁家の行く末に少し不安を感じながら長い一日が終わっていく。

私と麗羽姉上が旅立つ日。

「体には気をつけるんですわよ。辛くなったら家に文を書きなさい。ああっ、心配ですわ！やはり今からでも洛陽の塾に移つりないな！」

「麗羽姉上、今生の別れみたいな言い方しないでください。ほんの数年ですよ。私は麗羽姉上の妹として恥ずかしくない女になりますわ。」

「袁姫ちゃん！」ガシッと抱き締められる。これでもかと自己主張している双子山、女性特有の柔らかさ、私を落ち着かせてくれる麗羽姉上のかほり。私もぎゅっと麗羽姉上を抱き締める。

「姉上、私頑張る」

「ええ、頑張ってらっしゃい袁姫ちゃん。」

「あなたも頑張るのよ、麗羽。」

「もう、可愛妹との別れを邪魔しないでくださる？御母様。」

「あら、私とは離れても寂しくないの？」

「御母様は私と一緒に洛陽に行くではないですか！しかも一緒に袁家の屋敷に住むのですし。」

「それもそうね。袁姫、たくさんの事を学んできなさい。出来ればマメに文は出すように。」

「はい、分かりました。袁…継母様。」 袁成様が息を飲むのが解った。

「頑張りなさい、私の可愛いもう一人の娘。」

ひとしきり別れの挨拶を済まし、継母様と麗羽姉上は洛陽に、私はケイ州の水鏡女学院へ旅立った。

第三話（後書き）

こんな駄文見てくださりありがとうございます。今さらですが恋姫の種馬さんは劉備さんのところですよ。

まだ当分出てきませんが。

第四話（前書き）

つたない文ですがよろしくお願いします。

主人公の精神年齢間違えました。

後、張勲のしゃべり方解らんとすたい。自分の恋姫の知識はwikiと二次小説です。

第四話

ケイ州に来て三年がたった。

えっ？その三年間の話を聞かせろって？嫌だよ。考えてみな、精神年齢もうすぐ三十路が小学生の授業を受けるんだ。苦痛でしかない。

まあ、字が書けるやつ、計算（足し算、引き算レベル）が出来るやつもいたけどほとんどがまだ字を書くところからなのだ。

今思えば十歳でどす黒い政治の世界に片足を突っ込んでいたとか……反省はするが後悔はしない！

すみません、調子のりました。まあ、これからは気をつけるよ。姉より優秀な妹なんか袁家には必要ないのだ。私に求められているのは麗羽姉上を補佐できる程度の能力。

ああ、ケイ州での生活の話だっけ？何不自由無い生活を送ったりますよ。イレギュラーがいるのを除いてわね。

「はわわ、物思いに耽っている顔も絵になるね雛里ちゃん。」

「あわわ、そうだね朱里ちゃん。何を考えてるのかな？」

「あの顔だけでご飯三杯とピーを四回は出来るわね。ジュルリッ。」

「はわわっ！すごすぎだよ雷雛ちゃん！^{ライヒ}」

「あわわっ！顔で四回はすごすぎだよ雷雛お姉ちゃん！……………」
私は一回ぐらいかな。」

「はわわっ！雛里ちゃん！」

そろそろ突っ込みを入れるか。イレギュラーさん達に。

「私に何か御用かしら？諸葛亮さん、鳳統さん、徐庶さん。」

そう、此所には劉備軍の三大軍師と言ってもいい三人が居るのだ。

徐庶は劉備軍の一番初めの軍師と言ってもいい。詳しくは覚えていないが諸葛亮を劉備に推挙した人じゃなかったかな？母親を曹操に人質にとられて曹操に降ったりしたよね。かなり有能な人だったはず。

諸葛亮は皆さんもご存知だろ。凄すぎる劉備軍の大軍師だ。臥竜

なんて言われたりもしてたよね。

鳳統も鳳雛なんて言われてた凄腕軍師だ。弓矢で針ネズミにされて死んだが。気難しい性格の関羽と気があったらしい。

「はい、袁姫のあられない姿を想像してピーしようとしてました。」

「はわわ、雷雛ちゃん直球すぎだよ。あつ、私は袁姫さんと像棋を指しに。」

「あわわ、雷雛お姉ちゃん、それはないよ。私も朱里ちゃんと一緒です。」

「徐庶さんはそれ以上近づかないで。諸葛亮さん、鳳統さん此方にいらっしゃい。そろそろ来る頃だと思って用意しておきました。」

最近この三人と像棋を指すのが日課になっている。像棋とは中国の将棋のようなものだ。ルールは割愛させてもらう。

「袁姫のそういうところが…ハアハア。」

「はあ、部屋の前で悶絶しないでくださらない？早く入って、変

な噂がたってしまうわ。朱里、私は重装歩兵で砦を攻めるわ。」

「雷雛ちゃんと袁姫さんの絡み……、じゃない！やはりそこを攻めますか。」

「対策ぐらい立てているでしょう？」

因みに徐庶はうって変わって真剣な表情で私と諸葛亮の勝負を見つめている。鳳統は私の膝の上だ。

「あわわ、袁姫お姉ちゃんの膝の上、落ち着きます。」

「結局勝てなかったわね。」

「はわわ、かなり苦しい勝負でした。」

「何で短期決戦に拘ったの？他にやりようもあったでしょう？袁姫。」

「長期戦にすると諸葛亮に何されるか解らないからね。一気に畳み掛けようと思ったの。」

「はわわっ！その言い方が嫌ですう。」

「スヤスヤ。」

「雛里寝ちゃったじゃない。」

「雛里ちゃん気持ち良さそう。」

「もう少しこのままで居ましょうか。徐庶さん、お茶をお願いします。」

「今夜最高の快楽を下さるなら。」

「諸葛亮さん、お茶お願い。」

「冗談よ、全く。」

「眼が本気だったわよ。」

「雷雛ちゃんがつつきすぎたよ！」

こんなバカなことをしながらまた一日が過ぎていく。

徐庶サイド…

あれはこの女学院に入学してから少したってからのことだ。元々ぐるみの付き合いの諸葛亮と鳳統以外私は余り友人を作らなかった。付き合うだけの価値のある人物が居なかったから。

えっ？そんなキャラだっけて？あれは友人に見せる私。付き合う価値の無い人達に何で本当の私を見せなきゃいけないの？

その価値の無い人達に初めは袁姫も入っていた。

私は嫌いな人が沢山いる。

人の才能を妬む人、自分より才のある人を受け入れられない人、権力に媚びる人、他にも沢山。

袁姫はその中の才が有るのに使わない人に該当した。

気づいていないならまだましだ。だが彼女は使わないのだ。使えないと使わないは天と地ほどの差がある。彼女は自分の才を完璧に理解した上でそれを使わないのだ。

怒りで震えた。皆少しでも自分の才を伸ばして世のため、人のために役に立てる人になるために努力している。私や諸葛亮、鳳統だっ

てそうだ。

しかし、袁姫は違う。才を伸ばそうとはしているが使う気は無い。

一体何人の人が袁姫程の才に到達出来ずに涙を流したのか。

そしてその思いを爆発させる事件が起こった。

その日、私達は机上で駒と地図を使って擬似的な戦をした。袁姫の才に気づいている水鏡先生は何とか袁姫にその才に気づいて貰おうと（先生は気づいて無いと思ったようだ。）軍略、中でも戦術に関してなら私や諸葛亮の上に行く鳳統に相手をさせた。

初めは両者とも膠着状態に陥った。

何とか相手より有利な位置に移動しようとする雛里、（何時もの呼び方に戻すわね）其を妨害しながら隙を狙う袁姫。

その中で先に隙ができたのわ雛里の方だった。

袁姫の執拗な妨害と机上とはいえ見事な陣への指揮に雛里の陣に少しの歪みが出たのだ。

そこからの進みは早かった。

その隙を全軍で突いてくる袁姫に対して雛里は防戦一方になった。

しかし事件はこの時起こった。雛里が陣を立て直して反撃に出たのである。凡才達は雛里の全体を見る力と溢れ出る軍略に拍手を贈った。

私や諸葛亮、水鏡先生は違った。実際に勝負をしている雛里は気づかなかったようだが私達は気づいた。

おかしいのだ。あの戦況では雛里がどんなに足掻いても手遅れ。そんな詰んだ状態だったのだ。

袁姫がわざとそんな状況に持ち込んだのだ。私は怒りで目の前が真っ赤になった。それもそうだろう。友人が全力で挑んでいるのに相手は其を馬鹿にしたような対応をしている。

結局勝負は引き分けだった。雛里の反撃で袁姫は大将を取られ、雛里は損害を鑑みて全滅の判定を受けたのだ。

皆が土壇場で引き分けにまで持ち込んだ雛里を誉め称えた。引き分けとはいえ袁姫は大将を取られたのだ。

そんな場から袁姫が静に教室から出ていった。

後を追跡しようとしたら朱里も付いてきた。やはり今の事で聞きた
いことが有るそうだ。

袁姫はそのまま自室に向かい外へ出ていった。追跡が以外と面白く
部屋を出てきたところで声をかけ忘れた。

そこは小さな広場だった。袁姫はそこで猫にえさをあげているよう
だ。袁姫の周りは猫だらけ。

そんな中の毛並みの良い一匹を抱き上げ話始めた。

「ばれちゃったかな？ううん、ばれたよね。徐庶さんすごい目で睨
んでたもの。」

「ニャーン。」

「ふふっ、慰めてくれるの？優しい子だね君。でも大丈夫。キ州
にいる皆が私の全て、だから私は頑張れる。皆のために頑張れる。
姉より優れた妹なんか誰も望んでいないのだから。」

「ニャーン」

「早く皆の所に帰りたい。人を騙すのはとても辛い……こんな所に来なければ良かった。」

最後の方は嗚咽が混じってた。

家族の為にわざと凡庸なふりをしてたのね。何処までも優しいから、姉のことが本当に大切だから、自分が退くことを選んだ。

周りを欺きながら、その事に心を痛めながら影で努力していたんでしょね。いつか、最愛の姉の力になれるように。

私って最低。相手の事を何にも知らないのに、こうだと決めつけて、勝手に怒って。短絡的な自負が嫌になる。朱里も衝撃を受けているようだ。

体が勝手に動いた。袁姫の周りの猫が一斉に警戒体制をとるが気にしない。構ってられない。

「っ！徐庶さん？」

「ごめんなさい！」

「え？」

「私何にも解ってなかった。少し人より知識があるから。少し人を見る目があるからってあなたの事を解ったよな気になって……。ごめんなさい、こんな短絡的な私を許して。」

「私もですう。雛里ちゃんが馬鹿にされたと思って、理由を聞かなくちゃって思ってた。少し袁姫さんのお家の事を考えれば解る事なのに。」

そんな私達を袁姫は笑顔で許してくれた。「自分を色眼鏡で見ず、名家ということ抜きにして付き合ってくれる人があるのは幸せなことだ。」と。

年甲斐もなく泣いてしまった私達を袁姫は優しく抱き締めてくれた。

その後、袁姫は雛里に謝りに行った。雛里も何となく解っていたそうだ。

この一日で袁姫という人間に惚れてしまった。惚れてしまったんだよ、ふふっ。そして袁姫との関係は今に至る。

友人として、勉学で切磋琢磨する相手として、最高の関係を気づいている。

そう、私と袁姫はこの女学院を卒業する。それまで、この楽しい時間は続くと思っていた。そう続くと思っていた……。

卒業が近づき、私達は今後の進路の話で盛り上がっていた。

「袁姫は中央に行かないでキ州に戻るの？」

「そうね、元々袁成様と麗羽姉上以外の人間に下げる頭なんか持っていないし（笑）。」

「私はこの女学院に残ってもう少し水鏡先生の教えを請いたいと思っっています。ね、雛里ちゃん。」

「そうだね、朱里ちゃん。まだお勉強したいことたくさんあるし。」

「

「私は仕官するわ。家貧乏だし。」

「皆纏めて袁家で雇ってあげるわ。」

「私はいいわ。袁姫になら仕えてもいいけど袁家に仕える気はないわ。」

「はわわ、私は誰かに仕えるというのがまだいまいち想像出来なくて。しっかりと自分が仕えるべき方を見極めていきたいと思っています。」

「あわわ、私も朱里ちゃんと一緒にです。……でも、袁姫お姉ちゃんと別れるのは寂しいです。」

「鳳統ちゃん、嬉しい事言ってくれますね。諸葛亮さん、しっかりと相手を見極めなさい。貴方の力はそこら辺のぼんくらを一軍の将にすることぐらい容易いのだから。馬鹿な奴に捕まらないようにね。後、徐庶さん、貴方は袁家の規律を乱しそうなのでやっぱり結構です。」 「その少し拗ねた顔…ありがと。此で今夜のおかずには困らないわ。」

「はわわっ！この雰囲気ですっちに持っていくの？雷雛ちゃん！」

「あわわ、でも私もあの顔は卑怯だと思う。今夜……。」

「はわわっ！朱里ちゃん。」

「はあ、何やってるの。」

と、こんな馬鹿な話をしていると門番が血相を変えて教室に飛び込んできた。

「袁姫殿は何処に！」

「はい、どうしましたか？」

「今この学院を袁家の兵が取囲み、袁姫を連れてこいと。」

外を見ると所々に袁の旗がある。くそっ！油断してたか。しかし本家が私に何のようだ？

「汝南の袁本家の旗ね。心当たりある？」

「いいえ、何も。徐庶、諸葛亮と鳳統を書庫に連れて行ってちょうだい。」

「あいつらの狙いがこの二人だと？」

「無いと言い切れないわ。」

「はわわ、袁姫さん……。」「

「あわわ、袁姫お姉ちゃん…。」

二人をそっと抱き締める。

「ごめんね、私の家の問題に巻き込んで。徐庶、二人をお願い。」

「袁姫も無茶するんじゃないわよ。」

そうして私は問題に連れられて門へ向かった。

門では水鏡先生が懸命に本家の人に抗議しているようだった。

「神聖な学舎に兵を向けるなど、袁家は人の道に反する行いをするのですか！」

「貴方と話をしに来たんじゃないんですよねー。早く袁姫さんを読んでくれない？」

「私に本家が何用ですか？」

「貴方が袁姫さんですか？うわー、噂道理の超絶美人ですね。あつ私は張勳と言いますー。よろしくお願いしますね。」

「質問の答えになってないわ。本家が妾腹の子である私に何用ですかと聞いているの。」

「まあ、積る話もありますし、とりあえず汝南に御越しいただいてもよろしいですか？」

「それはお願い？」

「本家の総意ですねー、袁姫様。」

「はあ、分かりました。準備してきますから少しお待ちください。」

こうして私の水鏡女学院生活は突然終わりを告げた。

第四話（後書き）

まだ黄布の乱にも入れない。

そんな私を許して下さい。

第五話（前書き）

アドバイスが有りましたら頂けると嬉しいです。

第五話

あれから徐庶や諸葛亮、鳳統に別れを告げ、荷物を纏めた。勿論水鏡先生に袁成様に連絡してくれるように頼むのを忘れたりはない。

水鏡女学院から汝南への旅路、私は殆ど張勳と会話をしなかった。何を聞いても

「本家に着きましたらお話しますねー」の一点張りだ。

今更ながら汝南の袁本家の状況を整理しよう。

今の袁本家の頂点には袁逢^{エンホウ}を頂いている。

袁成様が我々の父親と結婚した時、次代の袁家頭領の座は産まれた麗羽姉上（袁紹）が継ぐことになり、現袁家頭領の座は袁成様が返還したという形をとって、本家の方に配慮した形をとった。

そこで登場するのが袁逢さんだ。妹に中央で司徒の要職を勤めている袁カイがいる。旦那さんは皇族の出であり、袁成様とは従姉妹で

ある。

では、何故この袁逢さんが本家を継がなかったのか？別に何か問題を抱えていた訳ではない。単に能力的な問題である。

彼女自身、自分の事を良く理解しているため頭領になることを固辞し続けた。妹の袁カイも姉が継がないのに何故自分が継ぐ事が出来るのかと固辞した。

此が御家騒動の原因の一つなのだが。まあ、こんな事も有り袁成様が事実上の頭領になった。

其から袁逢さんは旦那さんと中慎ましく暮らしていたそうだ。しかし、その旦那が急逝してしまう。それと時を同じくしてお腹に子が居ることが解る。

そしてその子は無事に生まれ「袁術」と名付けられた。真名を「美羽」という。

此処に皇位継承権を持つ袁家の子が誕生した。

これらの事を踏まえて考えるに私は人質なのだろう。

しかし袁成様や麗羽姉上が黙っているはずがない。早くからキ州で

地盤固めをしてきた我ら華北袁家と違い、本家は豊かな汝南の地に胡座をかきまともな統治をしてこなかった。

兵の質も良いとは聞かない。何を取っても今の本家是我々には勝てないのだ……ああ、血筋があつたか。

さて、そんなことを考えて至ら着きました！汝南！

はい、調子に乗りました。

そこから無駄にでかい本家の屋敷に通され、今私は会議を開く時に使う大きな部屋にいる。

私の後ろには本家の人なのだろうか？わらわらと人がいる。

そこに二人の女性が入ってきた。後ろにいる奴等が一斉に頭を下げる。そうか、この二人が……。

「何をしている！さっさと頭を下げぬか！礼儀知らずが！」

「いきなり理由も話さずに人を扱う人達に下げる頭を私は持つて

おりません。」

言ってやったぞ。馬鹿め、顔を真っ赤にして「貴様」とか言ってる。

「お止めなさい！袁姫さん、私の家臣が無礼を働きました。御詫
びしますわ。」

「いえ、此方こそつい頭に血が登ってしまつて…。」

「怒るのも無理はないわ、まったく。」

彼女が指示したのではないのか。まあ、そうだろう。おおかた周りの馬鹿どもが勝手にやったことなのだろう。これなら無事に帰れそうだ。

「袁姫？」

「ああ、そうだったわ。美羽ちゃん、あの娘が袁姫ちゃんよ！御
挨拶して！」

「おおっ！ではあの者が妾腹の！」
場の空気が変わった。袁逢さんは表情が凍り、後ろの馬鹿どもは嘲笑している。

「そうであろう、七乃？顔を合わせる度にあの者達に言われるからしっかりと覚えたぞ！偉いであろう？誉めてたも。」

「よっ、お嬢様！その空気の読めなさは天下一です！」

「わははははっ、もつと誉めてたも！」

何て言うか、苦勞しそうだな本家。麗羽姉上がこのくらいの年に少なくとも言われていることが悪口なのか、違うのか位解っていたぞ。

そんな袁術と張勳の漫才を少し困った顔で見えていたらフリーズしてた袁逢さんが再起動した。

その白く、細い腕がすうっと伸び、細く美しい指が袁術の頬をつねった。

「妾腹なんて言葉を使う悪い口はここかしら？」

「い、いひゃいれすひゃひゃふへ。」

袁術が涙目で抗議している。
つねった指を放し語気を少し強くした。

「あなたにそんな悪い言葉を教えたのはだかしら？」

袁術も母親が纏う空気が変わったことに気がついたようだ。

「は、母上様？」

「言われたことに答えなさい！美羽！」

「ひゃう、あ、彼処にいる者達です。」

「彼処にいる誰？」

「ぜ、全員です。」

袁逢さんが卓におもいつき手を叩きつけた。

「この馬鹿者どもが！美羽にあらうことか一族を罵る言葉を教えるとわ！」

「え、袁逢様……。」

「だまらっしゃい！しかも相手はこの袁家繁栄のために尽力した袁成御姉様の娘とは！」

「紀霊！」

「はっ！此処に！」

「此処にいる者達を皆牢に入れなさい！」

後ろから抗議の声が上がるが紀霊將軍の命で乗り込んできた兵により連れていかれた。

部屋がすっきりしてしまった。今部屋にいるのは紀霊將軍と張勳、ガタガタ震えている袁術さんと袁逢さんと私だけだ。

「美羽。」

「ひゃう！」

「袁姫ちゃんに謝りなさい。」

「うう……」

「美羽。」

そろそろ止めてあげないとかわいそうかね。私も丸くなったものだ。

「袁術さん」

「ううう、ご、グス、ごめぐじゅ」

「袁術さん、泣かないでください。」

涙を服の袖で拭いてやる。

「ふみゅ？」

何、この生物。めちゃくちゃ可愛んですけど。

「知らなかったんですよね。妾腹って言葉が人を傷付ける言葉だなんて。次からは使わないで頂けると嬉しいですね。」

「わかったのじゃ！もう言わないのじゃ！」

小さい子特有の柔らかさが抱きしめていて心地好い。

「^{ウラア}そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は袁逢、真名を氷^{ヒョ}羽^{ウラア}。ほら、美羽、自己紹介なさい。」

「は、はい、妾は袁術、字を黄路。真名は美羽じゃ！袁姫御姉様
！」

ヤバ、凄く可愛！

「はい、美羽さん。私は袁姫、真名を麗華と言います。」

「次は私か。私の名は紀霊、真名は陣刃^{ジンバ}この袁家で軍を預かっている。宜しく頼むぞ、袁姫殿！」

「私が最後ですか。何か空気でしたよね私！。私は張勳、真名を七乃ですー。」

「ええ、貴女とは色々と話さなければいけない事が有りそうだしね。宜しく。」

「そうですか？私には余りないですねー。」

「こらこら、二人とも。仲良くしてちょうだい。家は風通しが良くなったけど此れからが大変ね。」

「あの、袁逢様？」

「なに、麗華？」

「あ、姓名の方でお願いします。そちらの方が袁家の一員と自分でも感じられるので。」

「そう、わかったは袁姫ちゃん。それで？」

「はい、結局私は何のために呼ばれたのですか？」

「そうだったわね。」

袁逢様の表情が真剣になる。袁術さん以外の二人も同じだ。

「袁姫ちゃん、この汝南の地を救って欲しいの。」

袁本家での生活は初めから波瀾に満ちていた。

袁逢様の汝南の地を救って欲しい発言から二年がたった。麗羽姉上や袁成様、キ州の皆に五年近く会っていない。そして二年の間に世の中は大分荒廃した。賊や地方領主の反乱が頻発している。

袁家の治めるキ州とこの汝南の地は他の州に比べて格段に繁栄している。税も高すぎず、低すぎず、（他の州に比べれば格段に安い。）治安もいい。

漢の繁栄している街を挙げると言われれば洛陽、キ州のギョウ、汝南の寿春と言われる程だ。

その代わり、私や袁逢様、七乃の仕事量が爆発的に増えた。

先も言ったがこの汝南の地は非常に豊かな土地だ。水源には困らず、その水路を活かした船による運搬も陸路よりかなり早い。海賊もどきが出るがそれは紀霊將軍に任せてある。

土地が水路で分断され、豪族の力が強い土地だったが、七乃と私、紀霊將軍で一つずつ焦らずに根絶やしにし、今では税をすっかり納めさせている。私腹を肥やそうと高い税を取り立てているようならそれを理由に攻め込んでいるので人心もかなり落ち着いてきた。

それと私のなんちゃって知識、家畜のフン等を肥料にする計画をたてこの汝南の地で実験してみたところ意外にもかなり良い成果を出した。肥料やけなど問題が無いわけではないが資料を田豊爺とソ授爺に送ったらあつという間に民間に広めても問題の無いレベルに仕上げてくれた。竹間に収穫高が昨年の倍近くになったと書いてあった。

他にも大きな街で定期的に市場を開き、その時の場代は取らないというなんちゃって楽市開いたりしたがそれらも其那りの成功を納めている。

何だって？チート乙だって？

チートは私じゃないやい！適当な案を出したのに其を纏めて実行可能な状態にしてくる周りの連中がチートなんだい！

ということで私お暇を頂きました！

話が飛びすぎだって？

寂しいんだよ！麗羽姉上や袁成様達に会いたいの！

七乃や袁術さんには大反対されたが何とか説得した。

実は此にはタネが有りまして。

そのタネとは！

歌です！

おい、なんだよその反応。某東の方の弾幕ゲームの能力的な言い方をすれば歌を上手く歌える程度の能力、それと楽器を上手く弾く程度の能力だね。

これがなかなか凄いなだよ。二胡っていう楽器を七乃に教えてもらい、試しに弾いてみたらあら不思議。聞いてた人全員が泣きながら拍手している。

まあ、歌もそんな感じでして。袁術さんが満足するまで歌を歌ってあげたら、しぶしぶ洛陽行きを認めてくれました。

七乃は最後まで反対していたがシカトした。まあ、洛陽からキ州に帰るときは遠回りになるが汝南に立ち寄るやらなんやらと約束をさせられて今私は馬車の中である。

洛陽が待ち遠しい。

第五話（後書き）

次で覇王さんを出す予定です。

第六話（前書き）

拙い駄文ですが宜しくお願いします。

第六話

霸王サイド…

「麗羽、緩みきったその顔は何なの？」

今日の麗羽は朝からおかしい。これでも麗羽との付き合いは長い。洛陽一と言われるこの塾に同期として入門していろいろの仲だ。

会えば悪態をつき合う腐れ縁、髪型をどちらが真似たと口論し、服のセンスを馬鹿にし合う。それなのに何となく行動を共にする……そんな不思議な関係よ。

私と麗羽との付き合いは先にも述べたが塾に入門した所に遡る。

私は入門当初友人が一人もいなかった。まあ、私が作る気なかったのもあるだろうが家柄が大きかったのでしょう。

私の祖父は宮中で絶大な権勢を誇った大カン官曹トウだ。その為曹家には敵が多い。

何故カン官が子孫を残しているのかですって？祖父は親戚の夏侯家から母を養子に貰い、曹家の男と結婚させたの。

ここまで言えば馬鹿でも解るわね。祖父が大カン官であり、腐れ者

の家系と言われる曹家の人間が清流派を自称する者達の拠点の一つの私塾に行く。

どんな対応をされるかなんて火を見るより明らかじゃない。

まあ、予想通りの対応をされたけど、予想外のこともあったわ。

その一つは私塾の講師の盧植だ。

入門の挨拶に行ったら笑いながら

「私を越えてみせなさい、それが貴女の力を皆に認めさせるただ一つの方法なのだから。」

なんて言うのよ。笑っちゃったわよ。

清流派の中の巨頭、劉表、劉虞、皇甫嵩と並立つ漢の忠臣。

そんな彼が自分を越えてみせろと言うのよ、やらない訳にはいかないじゃない。

五月蠅い周りの連中を無視して学問に励んでいた私はもう一つの予想外に出会ったの。其が麗羽よ。

麗羽、代々漢の要職を歴任してきた名門袁家の次期頭領。彼女との出会いは正直最悪だったわね。

「おい、腐れ者が何故此処にいる！」

いつも通りの嫌がらせ。他にやることは無いのかしら？自分の足りない頭を少しでも良くする努力とか。

「おい！何とか言ったらどうなんだ！」

「……………」

「ふん！腐れ者は口も聞けないのか！さすが腐れ者の養子になり贅沢の限りを尽くそうなどと考える遊女の子だな！」

私の中の何かが切れる音がした。普段の私に対する罵倒なら聞き流せる。でも、今この醜男は母を罵倒した。

学問が人並み以上に出来る私がより良い環境で学べるように手をつくし、カン官共に要らない怨みを買わないように財を切り崩して対応してくれた。

その母が遊女？いいわ、そこまで死にたいなら殺してあげる！

その時だったわ。

「大の男がよってたかって何をしていますの！」

「え、袁紹殿」

「腐っているとか何だとか、優雅でないですわよ！」

「しかし！」

「しかしもおかしありません！まあ髪型についてはお話し合いがいりそうですけど。一体貴方は曹操さんの何が気に入りませんか？」

何を言っているのか初めは解らなかった。情けないけど呆けてしまったわ。名門袁家、袁カイが司徒を勤めてからは清流派の筆頭を務め、カン官に大弾圧された清流派官吏を多数匿ったりして勢力を伸ばしている。

そんな清流派筆頭の袁家の次期頭領の袁紹が私を擁護している？何故？

「え、袁家は腐れ者を擁護するのですか！」

その時、私は確かに王者の威厳を彼女に見た。

「貴様は何をもって袁家を語るのか！何故私が曹操さんを擁護するかですって？擁護何かしてませんわ！面と向かってカン官共に悪態もつけない腰抜けが清流派の品格を落とすのを止めたいだけですよ！」

勢い良く、王者が臣下を叱責するように言い切った袁紹は不愉快ですと言いついて教室から出ていった。

数日間、袁紹は塾に来なかったわ。なかなか踏ん切りがつかず、従姉妹の夏侯惇、夏侯淵に心配させてしまったがやっと決心がついた。

貸しを作ったままにしとくなんて私らしくない。

夏侯惇を……、面倒ね。春蘭を家に留守番させて秋蘭を連れて洛陽の袁家の邸に向かったわ。

「袁紹殿は御在宅か？」

秋蘭が門番に訪ねる、どうやら居るらしい。そのまま面会を求める。とすんなり広間に通された。

「何か用かしら？」

人を散々待たせておいてこの態度だ。しかし突然押し掛けたのは私

の方だ。ここは耐える。

「先日の例をしようと思ってね。」

「先日？…ああ、あの時の。まさか貴女、そんなことの為に私を呼び出したんですの？」

いい加減嫌味の一つでも返してやろうかしら。

「ええ、貸しはすぐに返す主義なの」

そして今日の手土産を袁紹に放ってやる。

「何ですのこれわ？」

「良いから読んでみなさい。」

そう、これが手土産よ。祖父に言って少し奮発しちゃったわ。

「曹操さん、これは……。」

袁紹の手と声が震えている。

「言っとくけど、その情報の信憑性は高いわよ。私の家がどういう家か、貴女も知ってるでしょ？」

「くっ、大カン官の人脈、ですか。」

「祖父が宮中、帝の出席する宴で聞いてきた事だから確かよ。」

「あのカン官共、畏れ多くも帝が新しく作る直轄軍でこの袁家を滅ぼそうとするわ…。」

袁紹が怒りで震えている。無理もないわね。

内容は簡単だ、カン官共が何時もは政敵である大將軍何進を上手く唆し、帝の直轄軍を作るように進言させたのが始まりよ。

何進もゆくゆくは自分の妹の何皇后が産んだ太子を帝に就かせるつもりなのだ。実働戦力が多いにこしたことはない。

しかしカン官共の考えは違う。帝に取り入り、直轄軍の要職を自分達で押さえてしまい、何進を牽制すると共に都にいる袁カイ、袁成、袁紹を飼い殺しもしくは殺す事が目的だ。

何故、カン官共はそこまで袁家を恐れるのか？

簡単だ、袁成が莫大な財を帝に寄進した札に帝が袁成に司州の牧の地位を与えたからだ。

司州はこの都、洛陽を含む漢帝国の中心。そこを政敵である清流派の筆頭、袁家が押さえる。カン官共はさぞ焦ったでしょうね。

だから都の要職に就いている袁カイ、河北袁家の頭領の袁成、河北汝南両家の次期頭領袁紹が都にいる今、カン官共は好機と見たのだろうが……。

「情報有り難うございますわ。あの腐れ者共、袁家を本気にさせた報いを受けさせてあげますわ！」

「此でお互い貸し借りはなしね。用もすんだし、私は失礼するわ。」

「御待ちなさい。」

「あら、何か？」

「麗羽ですわ。」

「？」

「私の真名ですわ。光栄に思いなさいな！名門袁家の次期頭領、袁本初の名を預けられたのですよ！オーホッホッホ！」

これが必要もつとましになるだろうに。でも…、何故だろう。麗羽のこんな馬鹿な対応を何処か、心地よく、受け入れている自分がいるの。

「華琳、私の真名は華琳よ。」

「ええ、宜しく。さて本題に入りましょうか。」

「本題？」

「髪型についてですわ！」

「髪型？」

「ええ、喫せずして髪型が似てしまった訳ですし、どちらがより

この髪型に相応しいか決めなくてわ！」

本当にこれさえなければ……。でも…。

「べつに構わないわよ。だって私の方が似合ってるもの。」

「キーツ、チビツ子が生意気を！」

「厚化粧のおばさんに何を言われたって痛くも痒くもないわよ。」

この日から数日後、皇帝からの命で皇帝直轄軍の編成が始められた。

名を西園八校尉と名付けられ、これを統括する上軍校尉にカン官が就いたがその下の中軍校尉に麗羽が就いたわ。それ以外の役所にも殆ど清流派の人間が就いた。

まあ、要するにこの直轄軍は清流派に握られたってこと。

この八校尉の典軍校尉に私は就いたわ。

何でもカン官共と清流派の繋ぎ役をしろと言うことらしい。

二人して塾を中退し官職に就いて今に至るわ。

冒頭に戻る。

此処は西園八校尉の屯所。その執務室で麗羽がアホ面を晒している。

私達の仕事は以外と多い。八校尉の軍師的な立場にいる私の仕事が多いのは当たり前。八校尉の統括者たる上軍校尉は皇帝に付きつきりだから事実上八校尉の最高権力者たる中軍校尉の麗羽も仕事は多い。

まあ、大抵部下の文醜、顔良に任せっきりだけど。

しかも文醜は机仕事に向いていない。事実上顔良一人で仕事していることになるわね。

「あつ、曹操さん、どうしたんですか？」

顔良が話しかけてくる。目に隈が出来ているけど、気を利かしてくれる辺りこの子は苦勞人なのだろう。

「大した用ではないの、ただ貴女の主人がアホ面を晒している理由が気になってね。」

顔良が苦笑している。

「姫は今朝からこんな感じだぜ。」

と文醜が代わりに答える。筆を手で遊びながらの様子を見る限り、仕事は進んでいないようである。

「今朝から？」

「本家から何か手紙が来て、それ読んでからあんな感じですよ。」

「誰かが本家から来るらしいんですけど。」

本家から？基本河北と汝南の袁家は仲が悪い。その汝南から誰かが来て麗羽があそこまで喜ぶ人物。誰……？

バァン！といきなり麗羽が机を叩いた。

「猪々子さん！斗詩さん！出かけますわよ！」

「姫？」

「麗羽様？」

「ちょっと麗羽、出ていく理由は何て報告するの？」

「生理痛とでも言っというて下さいな！」

はあ、この馬鹿は。

部屋を飛び出していった麗羽を追って私も部屋を出る。理由は……私も生理痛でいわ。

第六話（後書き）

曹操さんが丸い。全然ツンらしく書けない。

そこもオリジナルってことで勘弁して下さい。

第七話（前書き）

稚拙な駄文ですが宜しくお願いいたします。

第七話

ども、お久しぶりですね。最近完全に女になっている袁姬です。

洛陽が見えてまいりました。麗羽姉上は何でも皇帝直轄軍、西園八校尉の中軍校尉を拝命したとか。

あれ？西園八校尉が組織されるのって確か黄布の乱の辺りではなかったでしょうか？

まあ、良いでしょう。

後、やっと袁家の二枚看板、顔良と文醜のお二人を仲間にしたそうです。顔良さは酒屋で働いていたところを「気に入った」という理由で拐い、文醜さんは賭場でイカサマされたと言って暴れているところを偶々通りかかった麗羽姉上が武官として雇ったそうだ。

こっちの世界でも関羽に一撃で殺られちゃったりしないよね！

まあとにかく都、洛陽に着いてしまった。最近このパターン多いな。

洛陽の城門をくぐったら頭を抱えなくなった。

だって！城門をくぐったらいきなり

「護衛致します。」

とか言って袁家の私兵がわらわらと出てきて、今私は汝南からの護衛等も含めて総勢百人程の兵士に護衛されている。

「まったく、麗羽姉上ったら。」

自然と笑みが溢れる。馬車が止まる。どうやら向こうから迎えに来てくれたようだ。

馬車を降りると其処には。

「麗羽姉上！」

「袁姫ちゃん！」

感動の再会を果す。

お互い、これでもかと抱き締めあう。五年間の年月は長い。麗羽姉上は背も伸びたし、胸も大きくなった。私は知っている、麗羽姉上は結構着痩せするタイプだ。特に胸が。服の上からこの大きさだか

ら……ゲッフン、ゲッフン。馬鹿なことを考えた。さて、名残惜しがり一旦離れよう。

「麗羽姉上、わざわざお迎えありがとうございます。」

「貴女がいきなり汝南に連れていかれたと聞いた時はとても心配しましたのよ。」

「それで袁家の私兵を動かそうとして袁カイおば様に怒られたんですよね。」

「まったくですわ。御母様もおば様も心配するなとしかおっしゃらないんですもの。余計に心配になりましたわ！」

「麗羽姉上は袁逢様に会った事はおありで？」

「一度だけ。その時はあんな馬鹿なことをするようには見えなかったの。だから余計にね。」

「心配をかけました麗羽姉上。また会えてとても嬉しい！」

そこからかなりの時間を二人だけの空間で過ごした。その時は気がつかなかったんだ。獲物を狙う猛禽類のような眼で私を見ている存

在に。

霸王サイド

私は目を奪われた。そこには確かに天女がいた。

「汝南袁家に天女が舞い降りた。」

一時期都で流行った噂だ。

天女はその歌声で民の苦しみを癒し、その舞で荒れた土地をもとど
うりにしたという。

私はそういう噂の類いが嫌いだ。

カン官がこの噂を聞きつけて袁カイに天女を差し出すように言った。
しかし袁カイは

「天女が舞い降りるのは皇帝がいる洛陽のはず。洛陽に舞い降りていないということはその者は天女ではないのだろう。」

自分は汝南からそんな報告を受けていないと断った上でこう返した。

天は漢を見放し、袁家に味方している、そう聞こえるとカン官共を牽制したのだ。

これにはカン官共も黙らざるえなかったわ。

そこで終わった噂話、民の現状への不満が生んだのだろうと思っていたわ。

でも天女はいた。歌声で民を癒せないかもしれない、舞で荒れた土地を癒せないかもしれない。それでも確かに、其処に天女はいた。

銀色の髪を風で靡かせ、赤い瞳は見詰めるだけで吸い込まれそう。

道行く民の視線を独占していた彼女がふと此方を見ている。

鼓動が早くなるのを感じる。

「麗羽姉上、あちらの方は？」

「ああ、紹介が遅れましたわね。この方は曹操さんですわ！」

彼女が一瞬、身を強ばらせた。周りの誰も気が付いていないようだが私は見逃さなかった。いや、見逃せなかった。彼女の行動の一つ、一つが私の記憶に鮮明に刻まれていく。

「御挨拶が遅れ、申し訳ございません。私は袁姫と申します。麗羽姉上が何時も御世話になっております。」

どうやら警戒されているようね。あからさまな他人行儀な対応をされたわ。でもそれでもいい。それでもかまわない。必ず身も心も私だけのものにしてみせる。

「丁寧な挨拶痛み入るわね。私は曹操、字は…、華琳でいいわ。」

袁姫がかなり驚いているようだ。フッフッ驚く顔も可愛わね。

「ッ！いきなり真名ですか？」

「私の真名は叩き売り出来るほど安くはないわ。光栄に思いなさい。」

サイドエンド

当たりまえだ。劉備、孫権が手ækくんでも倒しきれず、魏帝国を事實上、建国した人物。正確に言うならば彼（彼女）の息子が漢帝国最後の皇帝、献帝から禅譲させて建国したのだが。

今はいい。だが黄布の乱が治まり、反董卓連合解散の後、官渡の戦いで袁家に終止符をつける人。警戒してしすぎるこゝとなてない。

見るからに自信の塊のような人。オーラが違うよ、オーラが。

どう転んだって麗羽姉上と上手くやっていける人じゃない。友人としてならいいだろう。だが、為政者としては二人とも真逆のベクトルを持っている。

曹操は正に覇王。正直なところ魏で最強の武将は曹操だと私は思う。武将として、文官として曹操がトップに居たからこそ魏の武将たちはあそこまで輝いたのだ。

逆に麗羽姉上こと袁紹は武将としても文官としてもそこそこだったのではないだろうか。

だから自分より上手く出来る部下に仕事を任せ、自分は大將らしくドンと構える。

部下は大将の信頼に答えるべく努力する。

自分で全てをやってしまう王と部下に任せる王。これは人の好みだろうねぶっちゃけ。

まあ、いいさ。この歴史が私の知っている歴史道理に動くとは限らない。今は出来ることをやるしかない！

「立ち話も何ですから、邸に向かいませんか？」

「あら、それもそうですわね。華琳さんはどうしますの？」

「姉妹水入らずをこれ以上邪魔するほど野暮な真似はしないわ。此で失礼するわね。」

「麗華ですわ。」

「！」

「私の真名は麗華です。でも出来れば姓名の方で呼んでください。実は、真名より気に入っているんです。」

「わかったわ袁姫。それじゃ、ごきげんよう。」

私の真名を聞いたときの曹操さんの顔は年相応の少女の笑顔だった……。

長い洛陽の一日が終わる。

数日後、私は麗羽姉上の仕事を手伝っている。麗羽姉上は仕事をしていないし、文醜は役に立たないので顔良さんと二人で仕事をしている。

「袁姫さん、こっちの仕事は片付きました。」

「ありがとうございます、斗詩さん。こっちもすぐ終わります。」

「何とか間に合いましたね。」

そう、時代は一気に進み始めた。帝国各地で黄色い布を頭に巻いた賊が出るようになったのだ。

中央のカン官共は初め、地方の太守達に鎮圧させようとした。

しかし、それに反対する者がいた。大將軍何進である。今こそ皇帝直轄軍の西園八校尉の出番だと言い初めたのだ。

さすがに皇帝を守る常備軍が都を離れるのは不味いとして袁カイおば様達に止められたが、上軍校尉以外の八校尉を各地に派遣して鎮圧にあたることになった。

その時八校尉には兵士の徴兵や軍事物資の現地調達が認められるなどかなりの権限が与えられた。

都の上軍校尉は戦で役に立たないので皇甫嵩が軍を統轄するそうだ。

さて、麗羽姉上が派遣されるのはキ州だ。何でも黄布賊がケイ州から侵入してきたが田豊爺やソ授爺に撃退され、黒山に立て籠ったらしい。それに他州からの流民が加わってしまい数が一気に増えた。

今では四十万ほどに膨れ上がったらしい。それを田豊爺やソ授爺が半分以上の十五万の兵で上手く包囲しているらしい。しかし四十万の賊が腹を満たすために片っ端から略奪を働く為、周辺の町や村は地獄のような有り様らしい。私達は今から黒山の賊を鎮圧する為にキ州に行く。その前に仕事を後任に受け継がせる為に纏めていたのだ。

「兵士の数は揃いそうですか？」

「はい、四万程になるかと。質については今文ちゃんがきたえ「終わったぞー斗詩ー、アネキ！」だそうです。」

文醜が顔良さんに抱きついている。本当に仲のいい二人だ。

「あと、田豊さんから頼まれていた物は揃えた。だそうですよ？」

顔良さんの頭に？が浮かんでいる。

そうだろう、あれは私と田豊爺の二人で組織していたもの。袁成様と麗羽姉上、袁カイおば様にしか報告していない。

「分かりました。出陣の準備をしましょうか。」

曹操さんは三日程前に陳留の賊を討伐しに出た。袁カイおば様の話ではそのまま陳留太守に任命されて、其処を拠点に黄布賊討伐を行うようだ。

それからさらに五日後我々は袁家の私兵を中心に義勇兵や司州の州兵を加わえた四万の兵を率いてキ州に向かった。

田豊サイド

黒山の賊が活発に動き始めおった。初め、侵入してきた時の数は二十万ほど。各地に守備隊を残して相手に出来る範囲の数じゃった。

だから袁成様達にも我々で何とかすると書状に書いた。

しかし現場は予想以上に厳しいものだった。

街を護るために玉碎覚悟の凄惨な防衛戦に挑み壊滅した守備隊を編成し直し、略奪され死体しかない状態の村の、死体进行处理する。それらに時間がかかってしまった為に賊共は流民を抱え込み、さらに数を増やした。

一度撃ち破り、黒山に追い詰めたがそこで攻めきれず。結局麗羽様達に援軍に来てもらうはめになった。

わしも老いたものじゃわい。そんな時、郭図に預けておった袁姫様直轄の部隊が仕上がったと報告が入った。

……昔から目を見張るところのある方じゃった。文官として、本家の紀霊殿の話では武官としても才能がある方だが、決して麗羽様の上に立とうとする素振りを見せない、歌と楽器を演奏するのが好きな普通のお嬢様だったあの袁姫様がまさかあの様に人を残虐な殺し方をする部隊を作るとわ……。サイドエンド

行軍は中々進まなかった。途中何度も小規模の賊とぶつかり、その都度賊を殲滅した。

賊に情けなどかけなかった。

麗羽姉上の率いる本隊三万に文醜や顔良さんをつけて進軍させ、私は残りの一万を率いて先行し賊を惹き付ける囮役をした。

麗羽姉上はいい顔をしなかった。何度も他の者に任せろと言われたが譲らなかった。

最後には麗羽姉上が折れた。本来は三千程の兵で先行するはずが一万になった。ここだけは麗羽姉上も譲らなかったなので私が折れた。

紀霊將軍の軍事訓練に何度か参加しておいて良かった。指揮者としては三流だろうが何とか軍を纏めることができる。

おい！誰だチート乙とか言ったのわ！私だって努力してるんだぞ！

まあ、それはさておきやつとこせ黒山を包囲している本隊に合流することが出来た。

強行軍してきた兵士達に一日の休息をとらせる。その間に我々は作戦会議だ。

「さあ！華麗に軍議を始めますわよ！」

麗羽姉上の一言で軍議が始まる。

議論は白熱した。持久戦を主張する田豊爺やソ授爺、短期決戦を主張する審配さんと郭図のおっさん。

田豊爺やソ授爺の言い分は「敵は兵糧に不安がある。飢えて何も出来なくなるまで締め上げるべき。」というものだ。確かに一理ある。この案を採れば兵士の損失を最小限に抑えることが出来る。欠点は時間が掛かることだ。我々は黒山の賊を鎮圧したあと、他の州の賊の鎮圧に協力するように命令されている。此処だけに時間をかけていられないのだ。賊ごときに手間取ったと思われるのも癪だしね。

次は短期決戦を主張する審配さんの言い分。

その前に審配さんの紹介をしよう。審配さん、彼女は一言で言うな

ら麗羽姉上大好きっ子だ。大好き過ぎて麗羽姉上の髪の毛を集めるという変態趣味をもつ困ったさんだ！

馬鹿ではないんだよね。むしろ有能な方だ。ただ、その能力は麗羽姉上の為にしか働かず、麗羽姉上が言ったことしかやらない。あと少しでも麗羽姉上に気に入られようと麗羽姉上が好きそうな事しか言わない。

今回の短期決戦を主張するのも華麗な袁家の軍が賊ごときに負ける筈がないと思っっている麗羽姉上の心理を読んで言っているに過ぎない。

要するにもっともらしい事を言っではいるが無策なのだ。

さあ、麗羽姉上はどちらの案を採るのだろうか……………。

第七話（後書き）

やっと黄布の乱に入れた。先は長いですが宜しくお願いいたします。

第八話（前書き）

戦の描写が下手くそだ…。

第八話

「袁姫ちゃんはどう思います?」

両方の意見を聞いた上で麗羽姉上が私に問いかけてきた。

ちなみに郭図のおっさんの主張は「兵糧代も馬鹿にならないからとつとと終らせよう」というものだった。そして私は…。

「私もここは短期決戦でいくべきだと思います。」

田豊爺やソ授爺が此方を見る。審配さんはびっくりしているようだ。

基本的に審配さんと私は仲が悪い。審配さんは麗羽姉上に可愛がられている私がウザイし、私は麗羽姉上に気に入られようと適当な事しか言わないこの人が嫌いだ。

でも今回はこちらにの意見に賛成だ。

「策がおありで?」

ソ授爺が聞いてくる。

もちろん、ちゃんと策はあるぞ！爺。

「はい、聞いていただけますか？」

此処で挙げたのは武田軍が川中島の合戦で使ったきつつき戦法だ。川中島の合戦では上杉軍に逆手に取られ、各個撃破されそうになったが今回は上杉謙信ほど頭のいいやつはいないだろう。

「まず軍を二つに分けます。」

周りの武将達からヤジが飛ぶ。確かに大軍相手に軍を二つに分けるのは下策に見える。

「お黙りなさい！袁姫ちゃん、進めて。」

「はい、一方の部隊を司州と黒山の間に展開させ、もう一方の部隊を敵の後方に回り込ませます。」

「司州との間に展開させる理由は何ですかの？」

ソ授爺が食い付く。

「黒山に間者を入れます。そこで洛陽付近まで攻め込んでいる味方がいる、そこに合流するべきと流言を流します。」

「賊共はその策にかかりますか?」

「賊は包囲されてから兵糧に困っているはず、しかも味方が洛陽付近まで来ている。黒山自体が洛陽に近いので何がなんでも合流しようとするでしょう。しかも賊の行動は行き当たりばったり、高度な作戦行動はとれないものと考えます。」

と言って麗羽姉上に頭を下げる。

「田豊さん、ソ授さん、どう思いました?」

「穴が無いわけではありませんが、良いのではないのでしょうか。」

「私も田豊の野郎と同じです。」

「あら? あっさり策を受け入れるんですね?」

「我々が持久戦を提案したのは黒山を攻め落とす策が無かったためです。」

「審配さんも攻めるべきと仰っていたではありませんか?」

「あれはただ攻めれば良いと言っていただけです。無策な提案にだれが賛成しましょうか。」

後ろで審配さんが声をあげようとするが爺ズが睨み付け黙らせた。

「なら袁姫ちゃんの策に決まりですわね！袁姫ちゃん、詳しく話して頂戴。」

「はい、姉上。まず後方に回り込ませる部隊の数は五万、文醜さんと顔良さんに率いて貰います。軍師には郭図さんを付けます。」

三人が頷く。

「この部隊は黒山を攻め上り、賊共を平野に押し出してください。その後はそのまま追撃戦に移り、平野に降りたら鶴翼の陣をひいて敵を包囲してください。」

「次に街道を塞ぐ部隊十四万ですが、三隊に分けます。今私が率いている一万五千を前衛に、ソ授さんに二万五千を率いて中衛をお願いします。役割は弓で相手の前衛の動きを牽制してください。最後に残りの十万ですが別動隊が平野に降りるまで後方で待機します。」

「たった一万五千の兵で四十万の賊を止めるのですかな？」

「田豊さん、それは違います。ソ授さんの二万五千の兵を入れた四万の兵で賊を止めるのです。」

「敵は顔良さん達の別動隊により敗走状態で平野に降りてきます。あるのは勢いだけ。その勢いを二万五千の弓で止めます。満身創痍の賊を止めるのなど一万五千の兵で十分です。」

「本隊は別動隊が平野に展開しだい部隊を二つに分け、前衛と別動隊の間を埋めます。一隊は麗羽姉上と審配さん、もう一方は田豊さんに率いて貰います。」

これで賊を包囲殲滅する。これが私の策だ。

「御待ちなさい！」

「姉上？」

「包囲したら投降を呼び掛けてくださいな。」

「何故です姉上！キ州を汚した賊共に情けをかけるなど！」

「袁姬ちゃんの気持ちも分かりますわ。でもどこかで許し、更正の機会を与えるのも名門たる袁家の役目だとは思いませんこと？」

正直驚いた。麗羽姉上には王者の度量がつき始めている。田豊爺やソ授爺が嬉しそうに麗羽姉上を見ている。

「感情的になりすぎましたわ、御許してください姉上。」

「オーホッホッホ、妹に道を諭すのは姉の役目ですわよ！」

そして顔を本気モードに切り替えて号令を発した。

「さあ、戦を始めますわよ！名門の名に恥じない華麗な戦をしてらっしゃい！」

別動隊の顔良さんと文醜さんが出発してから麗羽姉上に呼び出された。

「姉上？」

「何故一番危険な場所に貴女が行かなくてははいけませんの！」

あつ、涙目だ。

「姉上、私名門の者は後方に隠れているなんて思われたくありませんの。」

「言いたい輩には言わせておけばいいんですわ！」

「はい、でもそんなことを言われるのが我慢出来ないんです。麗羽姉上には大将としての戦が待っています。だから私が兵のもとにいきますわ。袁家は皆と共に居るとこの身をもって示して来ます。」

涙がこぼれた。

「絶対に帰ってらっしゃい。じゃないと許しませんから！」

抱きついてくる麗羽姉上を優しく受け止める。

「はい、姉上。」

地獄に足を踏み入れるのだ、もう少し姉上の温もりをかんじていたかった。

別動隊が夜の闇に紛れて出発してから二日がたった。

相手にきずかれなないのが最低条件のこの作戦、別動隊がきずかれなように私達は黒山に散発的な攻撃を行った。

味方の損害はゼロ。軽症を負った者が数人出たぐらいだ。史実だとどうだか知らないが、この袁家の軍は精鋭揃いだ。

司州の州兵と義勇兵の質がかなり悪いので郭図のおっさんに修練させている。

因みに、黒山への攻撃参加の割合は袁家軍が3で司州兵と義勇兵の連合軍が7だ。

この連合軍は人数が二万五千と援軍の半数以上を占めている為、質の向上は必須だ。

「なかなか、いい具合になってきましたね、ソ授爺。」

「そうですね、ここ数日で大分様になってきましたの。」

「そろそろ引き上げさせましょう、そして明日まで休息。明日には別動隊の攻撃が始まるでしょう。」

ソ授爺が頷き、連合軍に命令を出す。

そう、明日にはこの戦は終わっている。

翌日、天気は晴れ。よく狼煙が上がりそうだ。私は自分の部隊、一万五千を前に訓示をしている。

「我が袁家の精鋭達よ！袁家は汝らに前進する事を望む、賊共を風呂敷う事を望む！ただ前進し、敵を撃破せよ！賊共を倒し、漢の世を再び泰平にするのだ！皇帝陛下万歳！大漢帝国万歳！」

少し間を置き、兵士達の喚声で地鳴りが起こった。

「皇帝陛下万歳！大漢帝国万歳！」

後方からも喚声が起こっている。ソ授爺や麗羽姉上も訓示を終えたようだ。

「各隊に伝達。予定通り、横隊を組んでください。」

伝令が各部隊に走って行く。陣に展開している部隊は十六人単位で密集隊形をとっている。

約九百四十の密集隊形が出来る。その様はさながら古代ギリシャのファランクスである。

この密集隊形、最前列が盾と槍を構え、二列目は弓矢に備えて盾を頭上にかざし、槍を一列目の盾の間からつき出す。後ろも同じように展開する。この密集隊形の弱点は機動力の無さと側面からの攻撃に対しての弱さ。機動力は今回の戦には必要ない。側面からの攻撃は街道を横隊で塞ぐことでカバーする。もしもの為に両端には柵を作っておいた。

私の部隊の甲冑は独特だ。本隊が金色なのに対してこちらは銀色。フォルムはどっかで見たことのある形だ。

ほら、風で谷のガウシカさんで出てきた「凧ぎ払え！」の人のところの装甲兵の格好だ。……解らない人はスタジオブリを見直そう。

まあ、その格好からして異質の部隊は装備も異質だ。一列目の武器が棍棒なのだ。刺々のある。

これは敵に心理的ダメージを与える為のものだ。何でも人は一度強烈な恐怖心を植え付けられると反乱など起こそうと思わなくなるらしい。

これもどっかのアニメの受け売りだけだね。まあ、そういう訳で一列目には棍棒で敵を惨殺させ、心理的に追い詰めようというのだ。

もちろん皆に反対された。でも私がそれを押し通した。もうすぐ来るであろう戦乱の世で、必ず正規軍では対応を躊躇する事だってあるはずだ。その時、袁家の為に泥を被る部隊と人が必要だ。

だから私が泥を被ると決めた。私に居場所をくれた袁成様や麗羽姉上達に少しでも恩を返すために。

これを袁成様や麗羽姉上、袁カイおば様に伝えたら袁成様にビンタされた。

「何を言っているの袁姫！袁家は貴女に泥を被せなければ潰れてしまうほど、弱くはないわ！」

「そうですわ！袁姫ちゃんがそんな事をする必要ありませんわ！」

袁成様は泣いていた。後で私がそこまで考えていた事に気付けなくて悪かったと泣きながら謝ってくれた。

違うんだ。私なんかの事をこんなに考えてくれる貴女達の為に働きたいと思ったんだ。

「袁姫。」

ここで、今まで沈黙を貫いていた袁カイお婆様が初めて口を開いた。

「貴女は貴女のやるべき事を見付けたのですね。」

「はい、袁カイお婆様。」

「麗羽と麗華姉上が牡丹と蘭なら私と貴女は蓮の花。きれいな水、きれいな土は姉上達に使わなければいけない。」

袁カイお婆様はじっと私の目を見ながら話す。

「そして残ったのは汚泥と泥水。私達はその汚泥に根を張り泥水を吸いながら花を咲かす蓮の花。」

決して自分の運命を悲観したりしていない。むしろ誇りを持っている。そう、思わせる声で……。

「でも蓮の花は牡丹と蘭を怨んだりはいしないわ。だって汚泥と泥水を残してくれたから蓮は花を咲かす事が出来たのですからね。」

一呼吸おき。

「よくぞ、袁家の次女の仕事に気が付きましたね。そう、私達が袁家の盾なのです。麗羽を際立たせ、袁家の汚れた部分をその葉とその慎ましい花で覆い隠しなさい。」

「はい、袁カイおば様。」

「陽羽^{ヨウフア}よ。氷羽姉さんが世話になったわね。」

「いいえ、こちらこそ袁逢様には大変御世話になりました。」

「陽羽！袁姫がそんな…「袁成姉上」ッ。」

「袁姫も袁家の一員です。袁家の一員としての仕事があります。袁家が今まで潰れずに来たのは何故ですか？一人一人が己の役割をこなしてきたからでしょう？」

「そうだけど……。親として自分の娘が！袁家の闇に吞まれていくのに耐えられないの！」

「袁成様、私は大丈夫ですよ。必ず麗羽姉上をお助けできる女になってみせますから！」

「袁姫…。」

「袁姫ちゃん…。」

ふと、そんな事を思い出した。いけないな、目の前の事に集中しなくちゃ。

「袁姫様！」

伝令が走って来る。

「狼煙が！」

黒山の裏側から煙が一筋上がっている。

「全隊！直に戦闘準備！」

黒山から悲鳴が聞こえる。「キャー」とか可愛いものではない。人
が出せるのかと思ってしまうような悲鳴だ。

「全隊配置に就きました。」

そういえばこの副官の名前を聞いていなかった。

「ねえ、貴女の御名前わ？」

「高覧です。」

簡潔に、素っ気ない返事をしてきだが、可愛い奴。鉄兜の上からで
も顔が赤いのが分かるぞ（笑）

「高覧さん、貴女の働きに期待していますよ。」

「ッ、はい！」

声音が凄く嬉しそうだ。さて、そろそろ真剣にやりますか。

山が溢れた。

正にそんな表現がピッタリだ。山が溢れた。

平野を人が埋め尽くしている。さあ、戦が始まる。

「一列目、盾構えー！」

金属が擦れる音がする。それと同時に一列目が盾に少し角度をつけて構える。

敵の槍や矛を受け流すためだ。

敵の顔が肉眼でハッキリと見える。

「全隊、盾構えー！」

密集隊形が盾で覆われる。

「槍構えー！」

二列目、三列目が長槍を前に突き出す。

「放つのじゃー！」

後方からソ授爺の号令が聞こえる。

弓矢で空が覆われた。

賊がバタバタと倒れていく。それでも走るのを止めない。

ああ、そんなに死にたいのなら殺してやる。私は麗羽姉上程優しくない。

賊との距離はもう目と鼻の先。

「敵を蹂躪せよ！」

「「応！」」

「ぐじゃ！」

突き出した槍に賊が貫かれる。

「ゴギヤ！」

其を何とか避けた賊が棍棒で撲殺される。あちこちで悲鳴が上がる。矢が刺さって死に、何とか矢を避けても槍で突き殺され、運良くそれすらも避けても棍棒で撲殺される。

絶望の悲鳴があちこちらで上がる。

絶望の不協和音。

「袁姫様、別動隊が…。」

高覧が報告してくれる。

別動隊が山を駆け降りているのが見える。

さあ、敵に更なる絶望を…。

「全隊、前進！」

「「応！」」

「「応！」」

「「「応！」」」

一歩ずつ、前進する。

槍を突き出す。棍棒で撲殺する。この二つの行為をしながら一歩ずつ、前に進んでいく。

一歩進む度に敵の悲鳴が上がる。

「そろそろかな？」

「そうですね。」

後方から地鳴りが聞こえてくる。麗羽姉上の本隊が動き出したようだ。

程なくして賊は包囲された。

「武器を捨てよ！さすれば命だけは助ける！」

前線に出てそう叫ぶだけで、敵は武器を捨てた。

「高覧、武器と鎧を集めて。人は一ヶ所に集めないで千人単位でまとめておいてちょうだい。」

「ふざけるな！」

高覧の返事を遮ってダミ声が響く。

「てめえみたいなガキに降るなんて出来るか！」

ヒュン。

グサ！

「え？」

がたいの良い賊に薙刀が刺さる。

「袁姫様…。」

つかつかと私は賊に近付く。

「て、てめえ…。」

薙刀に手をかけ、賊を蹴り倒して薙刀を引き抜く。手間取らせやがって…。

「誰です、次にこうなりたいのわ？」

返り血を浴びた。生暖かくて気持ち悪いな。

「黙って袁家に降りなさい。それが嫌なら死ね。私は袁紹様程貴様らに優しくなどしないぞ！」

賊が皆平伏した。キ州を騒がせた黒山の賊は鎮圧された。

「オーホッホッホ、我が袁家にかかれば賊の鎮圧など、こんなものですわ！」

麗羽姉上は御機嫌だな。まあ、初陣でこの大戦果だ。仕方ないか。因みに戦果は十万程を倒し、二十万人を捕虜にした。この二十万人は殆どが流民だった。残りの十万は散り散りになって逃げた。以外に逃げられてしまった。それには田豊爺が一万を率いて残党狩りを行っている。

さて、私にはやらなければいけない事がある。

「麗羽姉上。」

「あら、何かしら袁姫ちゃん？」

「我が部隊に大きな戦果を上げた者がいます。」

「おっ、奇遇だねアネキ。アタイらの部隊にもいるんだよ。なっ、斗詩。」

「はい、あの子の働きにはとても助けられました。」

「あら、面倒なので二人とも連れてきなさいな。」

「入って来なさい高覧。」

「入りな、張コウ。」

「はっ！」

「はいなのです！」

二人の少女が宴の席に入って来る。

「高覧、只今参上しました。」

高覧の容姿を紹介しよう。髪は濃い紺色。目は青く、出るところは出ている。性格は寡黙だが感情が直ぐに顔に出るのが可愛い。

次に張コウだ。髪は紅。目も燃えるような赤。残念ながら胸は無い。性格はまだ分らないが強気そうだ。

「御二人は今回の戦で目覚ましい働きをしたとか。次からは高覧さんが袁姫ちゃんの、張コウさんが猪々子さんと斗詩さんの副官を務めなさいな。」

一部隊長から將軍の副官は大出世だが、この二人はそれだけの働きをした。

「謹んで、お受けいたします。」

「必ずや御期待に答えてみせますです！」

「名門、袁家の名に恥じない働きを期待していますわ！オーホッホッホ。」

勝利の宴は過ぎていく。私は二胡を引きながら今日の事を振り返った。

人を殺したのだ。それなのに心が異常なまでに静かだ。人殺しとはこんなものか。そんなふうに考えている自分がいること

に少し、恐怖した。

止めよう。賊退治は始まったばかり。郭図のおっさんが一万五千を率いて田豊爺の残党狩りに合流し、ソ授爺が五千の兵で捕虜の対応にあたる。捕虜はキ州の各地に配属し、労役にあたらせる。

私は旗下の一万五千を率いて汝南の袁本家に援軍に向かう。思いの外賊に手こずっているらしく、援軍の要請が来た。

残りの部隊を麗羽姉上と顔良さん、文醜さん、張コウさんが率いて幽州に向かう事になった。賊に加えて異民族の活動が活発になり、劉虞殿からの援軍要請に答える為だ。

そして、初めての戦は終わり、勝利の宴は明け方まで続いたのだが。翌日、皆二日酔い気味だったのは…気にしない事にしよう。だって袁家らしいじゃないか。

第八話（後書き）

駄文を読んいただきましたありがとうございます。

第九話（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

少しぐだってしまいました。

第九話

はい、只今汝南に向かって進軍中です。だったら良いんですがね。

何でか私は陳留に向けて進軍しております。誰かいなかったかって？ お馬鹿さんが！ 曹操さんが居ますよ曹操さんが。

そもそも何でこんな事になったか。………曹操さんが仕組んだんですよ！ キ州を郭図のおっさん達に任せて麗羽姉上と私がそれぞれの場所に行こうとした矢先に、洛陽から使者が来た。

要約してしまえば、汝南には別の者を向かわせるから誰か陳留に行つてこいというものだ。

麗羽姉上と私はやりやがったと思った。

明らかに曹操さんが手を回したに違いない。

「あのチビッ子は何を考えていますの！」

「まあ姉上、命令された以上行かなくてわ。一応正式な命令ですし、袁カイ叔母様も何も言つてこないですし。」

「袁姫ちゃん、チビツ子に何かされたら直ぐに帰って来なさい！
高覧さん！」

「はっ。」

「袁姫ちゃんを頼みましたよ！」

「この身に変えましても。」

そんなやり取りを経て、今に至る。

今はまだ陳留への道中。へ？何時もみたいに「ハイ！陳留。」
みたいにならないのかって？

ならないよお馬鹿さんが！
キ州出たとたんに賊たらけ。一つ一つ潰しているから時間がかかるの！

「袁姫様」

高覧に呼ばれる。君だけだよ、荒んだ私の心を癒してくれるのわ。

「なあに？高覧。私と一緒に昼寝でもしたいの？いいわよ、膝枕してあげる。」

「はっはい！…じゃない！前方から軍勢が接近中と報告が入りました。」

堂々と前から。ああ、迎えが来たのか。

「兵達に休息を取らせて。前からの軍勢は敵じゃないわ。多分御迎えよ。」

「些か陳留から距離がありませんか？」

「大方何時まで経っても来ないから催促しに来たのよ。早く来いってね。」

「なるほど、哨戒当番以外に休息を取らせます。」

「ええ、お願い。命令が済んだら貴女も休みなさいな。」

「はい！」

本当、感情が直ぐに顔に出る。凄く嬉しそうだ。

程なくして曹の旗が確認出来る距離まで近づいてきた。一緒に夏侯の旗と淵の旗が見える。御迎えは夏侯淵さんのようだね。あつ、夏侯淵さんが此方にやって来る。お出迎えしなくてわ。

「夏侯淵さん、遠いところ御苦労様です。」

夏侯淵さんが苦笑している。

「それはこちらの台詞だろうに、改めてキ州から遠路遙々ご足労頂き痛み入る。主、華琳様にな変わって礼を言う。」

「いえいえ、朝廷からの正式な命令ですもの。しかし、夏侯淵さんを迎えに寄越すとは、曹操さんは余裕ですね。」

また苦笑する。

「いや、そうでもないな。青州の賊の数は百万とも言われている。華琳様は一人でも多くの有能な兵を集めようとなさっている。」

「まあ、曹操さんに精鋭と言ってもらえるなんて光栄だわ。」

「ふっ、殲鬼の言葉とは思えないな。」

「嫌ですよその二つ名。せめて殲姫って言ってください。」

「言葉では分かるまい。」

「気持ちの問題です！」

そう、賊に会うたびに殲滅していたらこんな病気みたいな名前を頂いた。

やれ、会うだけで首が飛ぶとか、女子供関係無く皆殺しだとか、返り血を浴びた姿が美しいとかe t c……。

迷惑です！

「そう拗ねないでくれ。」

「私は夏侯淵さんの言葉で傷付きました。」

「それは済まない、御詫びに私が出来ることなら何でもしよう。」

来た！何時も冷静な夏侯淵さん。だが、私と話をする時は少しだけ（この変化に気付くのは姉の夏侯惇さんか曹操さんだけだ）甘くなる。

今だってそうだ。普通なら「済まないな。」で終わる会話が何でもしろうがでてきた。妹が欲しかったと酒の席で言っていたので、

「貴女の姉が妹のようなものだ」

と言ったら苦笑していた。まんざらでもないようだが。

さて、この好機逃す手はない！たとえばわわ軍師の罠だったとしても私は突貫するよ！

袁姫！突貫します！

「ぎゅっして。」

「?」

腕を広げる。

「ぎゅーして。」

夏侯淵さんの顔が仄かに赤くなる。

「いや、しかし…。」

「やつ、何でもするって言った!ぎゅーして。」

フツッさあ来い!今回は子供っぽくしてみました。

あつ、高覧が鼻血出して他の兵に介抱されてる。

「…うむ、では。」

ぎゅっ！

うおおっ！何だこの巨大な双子山！麗羽姉上と同等かそれ以上だと！

でも……。

それ以上に、何でこんなに落ち着くのだろうか？

ああ、そうか。これは……………。

「お母さん……。」

「えっ？」

「何でもないです。」

それからもう少しぎゅっとしてもらった。

もう少しそうしていたかったが部下から泣きそうな声で

「高覧様が…。」

とか言われたので仕方がなく止めた。

高覧……、凄く幸せそうな顔してた。

「さて、そろそろ出発しましょうか。」

「ああ、そうだな。ところで…。」

「何か？」

「その、なぜ袁姫は私達のことを真名で読んでくれないんだ？」

「ああ、其れですか。まあ、読んでもいいんですけど…。」

「いいんですけど？」

「私が真名より姓名で呼ばれる方が好きなんです。だからつい真名で呼んでいいって言われても姓名で呼んでしまうんです。」

「そうか、真名は預けるもので強制するものではないから大丈夫だとは思うが……理由を聞いてもいいか？」

「あれ？夏……秋蘭さんには私の身の上話してませんでしたっけ？」

「ああ、私が聞いてもいいのなら頼む。」

「私、袁成様の本当の子供じゃないんです。麗羽姉上とは異母姉妹ってやつです。」

夏侯淵さんが息を飲む音が聞こえたが続ける。

「私の産みの親は身分が低かったんですが袁成様はとても良くしてくださったそうです。で、まあ酒の勢いで父に抱かれてしまい、私が産まれました。」

「母君は？」

「私を産んで直ぐになくなったそうです。袁成様は本来捨てられいたであろう私をここまで育ててくださいました。麗羽姉上も可愛がってくださいます。だから真名より麗羽姉上達と同じ一族である事が相手にも伝わるし私も確認出来る姓名の方で呼ばれたいんです。」

「そうか、言いづらい事を言わせてしまったな。」

「いいえ、お気になさらず。」

そして私達は陳留に向けて出発した。

高覧が復活したのは其れからもう少しだってからだった。

ハイ！皆さんお待たせしました。陳留です☆

はい、すみませんでした。

まあ、陳留です。凄く賑わってます。人の顔には笑顔が溢れているし、商店は商品で満ちている。曹操さんの行政手腕の凄さが分かりますね。

「凄い賑わいですね夏侯淵さん。」

「ああ、陳留は河北の業と汝南の中間にあるからな。それが大きいだろう。」

「でも曹操さんの手腕も凄いと思いますよ。戦をしながら街をここまで整えるなんて。」

「あら、嬉しい事を言ってくれるはね、袁姫。」

えっ！早くない？

夏侯淵さんが頭を下げる、ちよっ、まだ心の準備が…。

「遠路遙々御苦労様袁姫。立ち話も何だから城に向かいましょう。」

そして有無を言わず城に連行された。

「さて、改めて遠路遙々御苦勞様。援軍感謝するわ。」

「いえ、朝廷からの正式な命令ですからね。」

「フフツ、つれないわね。まあいいわ、袁姫、貴女には私と共に青州の賊討伐に加わって貰うわ。」

「賊の規模は？」

「約八十万。」

「此方の戦力は？」

「私の手勢が五万、それに貴女の一万五千が加わるわ。」

「他の援軍は？」

「エン州を平定し、八校尉の権限で兵を徴兵するわ。」

「まずは約六万の兵でエン州平定ですか。骨が折れそうですね。しかし、たった一群で五万の兵とはどんな奇術を使ったんですか？」

「義勇兵を募ったのよ。其を使い物になるように春蘭が調練しているわ。それと曹家の縁者に召集をかけ、暴利を貪っていた豪族を討伐したら集まったわ。」

「簡単に言いますね。さすが天才が言うことは違います。賊一つ討伐するのにあんなに時間がかかった私とは見ている世界が違いますよ。」

曹操さんが不適に笑う。こっ、怖！何か墓穴を掘ったか？

「あら？可笑しな事を言うのね。幽州、并州、青州、エン州の四方の州境に守備兵を残した状態で討伐するなんて、なかなか出来る事ではないわよ。」

夏侯淵さんが驚いた顔をした。

「各地に充分な余力を残した状態で四十万の賊を討伐したのか…。」

「そう、賊の半数の兵力で賊を討伐した袁家の兵法家と彼女の命令ならどんなことでも遂行する銀装隊が援軍に来てくれたの、とても心強いわ。」

「いえいえ、そんなことないですよ。それにあの策は私が一人で考えたものではありませんし。」

「クス、そういう事にしておきましようか。さて、遠路疲れたでしょう。部屋に案内させるわ。貴女が来てくれたのだから宴を言いたいけど其れは青州鎮圧の後にね。」

うう。蛇に睨まれている気分。

「はい、是非勝利の美酒を曹操さんと一緒に飲みたいです。」

そして私は部屋に案内された。少々ベッドが大きい部屋に入るなり私は寝てしまった。疲れが溜まっていたようだ。

翌日、少々問題が起こった。行軍に必要な兵糧が半分程しか無いらしい。

曹操さんは戦に臨む時、兵糧をある程度余裕を持たせて集めさせる。補給は戦にとってとても重要な物だ。かつて補給を蔑ろにして勝ったものはいない。

まあ、うんな訳で曹操さんの機嫌はMAXで悪い。

因みに私、只今鉄兜を被っています。それは夏侯淵さんや高覧に「貴女の顔を晒し続けるのは曹操軍の軍規に関わる」

なんて言われたからです。拗ねました。後、曹操さんが非常に残念がってました。

今はそれは置いといて、夏侯惇さんは今すぐ責任者を処罰するべきと言っていましたがりあえず軍法会議に召集することになりました。

私は今、その軍法会議が開かれる部屋にいます。

何故かって？兵糧は曹操さんが出すって約束だったので私達は必要最低限の兵糧しか持ってきてないんです。だから死活問題なんです。

よって軍法会議への出席が許されました。

「つれて参りました、曹操様。」

幾分声音を固くした夏侯淵さんの声が響く。

「入りなさい。」

夏侯淵さんと猫耳フードを被った少女が入って来た。

「とりあえず、名前を聞いておこうかしら。」

声が据わってる。こ、怖い。

「荀イクと申します。」

肝が据わってるなあ。よくあんなに平然としていられる。まあ、それと彼女の策なんだろうけど（笑）
え？自分だけで納得するなって？見てれば分かるよ。

「さて、呼ばれた理由は解ってるわね。」

「兵糧に何か問題がありましたでしょうか？」

「貴様！華琳様が命令された半分しか兵糧を集めずに問題があったかだと！」

「待ちなさい、春蘭。私は理由を聞いているの。何故兵糧が指定された半分の量しか無いのかのね。」

「必要無いからです、曹操様。」

「兵を餓えさせろと？」

「私は今曹操様と話しているの！変人は黙ってなさい！」

変人言われたれた！

「止めなさい荀イク。その者は袁家からの援軍の指揮官よ。袁家軍の兵糧も私が出す事になっていたのに貴女が兵糧を半分しか集めてくれないから今、私の手元には青州への行きの分の兵糧しか無いわ。」

「その事も策の中に含まれています。」

「フウン、ならその策を説明してみなさい。」

まあその後、荀イクさんの策の説明を受けた。

要約すると、兵糧を半分しか持たないから行軍がスムーズになる↓曹操さんの指揮する軍ならパッと賊を鎮圧出来る↓青州平定、賊の残党狩りは私達にやってもらおう（押し付け）↓その時に兵糧を出してやればいい。

といったところだ。まあ確かに曹操さんの軍ならこれが可能だろう。今朝調練を覗いたがよく統率のとれた質のいい兵達だった。それを見て私の部下達が自主トレをしていたのを見た時は涙が出そうになった。

まあ其処は置いといて。彼女は少し名門の力を舐めている。ちょっと懲らしめてあげましょう。

「そこまで言うのならやってみなさい。今回の策が上手くいったら私の陣営に加えてあげる。」

「ハッハイ！全身全霊を掛けまして！」

「内部の問題に巻き込んで申し訳なかったわ。」

「いえいえ、今の話では私達は待機ですか？」

「貴女なんか居なくたって曹操様は青州位鎮圧出来るんだから！」

「止めなさい荀イク。青州の賊の数が百万と言われている以上、

キ州袁家からの支援が必要なのは貴女も解っているでしょう？」

「はい…申し訳ありません。」

すごく不満そうだ。そして凄い形相で睨んでくる。

「私に貴女達程の部隊を遊ばせている程の余裕は無いわ。貴女にはキ州でやっていた事をやって欲しいの。」

「荀イクさんの策の流れがおかしくってしまいませんか？」

「そこはその子に変更させるわ。それぐらい出来るでしょう？」

「屯田をやるには兵の数が少なすぎます。州境から守備隊を一部呼ぶ許可を下さい。」

「いいわ、貴女の好きなようにやってちょうだい。」

さて、好きにやらせてもらいますかね。

五日後、曹操さん達は青州に進撃した。キ州から屯田の為に来た四万の兵の受け入れに五日かかったがこの早さは異常だ。さすが天才達。

しかし、この五日のおかげで私の策はいや、策という程のものではないが。悪戯は完成した。

荀イクさん、名門の力をとくとその目に焼き付けることですね。

という私は今土を耕しています。行軍に耐えられなくなった軍馬を耕作に使い作業効率を上げ、兵を大量に投入して荒れ地を開墾する。その時に家畜のフンや腐葉土、灰等を肥料にしているので荒れ地も少しずつ元に戻っていくことだろう。

素晴らしいですね。何かいいことをしている気分です。なのでついでに街道も整備しています。ついでにですよ、ついで！

ネコ耳サイド

私は今自分の見通しの甘さに呆れかえってる。

賊の討伐は想像以上に上手くいったわ。あの猪（夏侯惇）の突破力は異常だったし秋蘭（夏侯淵）はそれを的確に援護してた。何より華琳様の将としての器の大きさに改めて惚れ惚れしてしまった。

後、夜の方も…。

全てが上手くいっていたわ。途中で賊に襲われている村を助けて許緒とかいう怪力のお子ちゃま、誰よ！今お前もだろとか言ったの！

ふん！男なんて皆死ねばいいんだわ！

まあ、そのお子ちゃまが華琳様の配下になったのだって想定外だったけど、それでも私の策は上手く進んでいた。そう、あいつらに会うまでわ。

「報告いたします！」

斥候が軍議を開いている天幕に走りこんできた。

「何事か！曹操様の前だぞ！」

そう叱責したが様子がおかしい。

「あの丘を越えた先で大規模な戦闘が行われています！双方数は十万を越えているかと！」

馬鹿な！今の青州州牧に十万ものの兵を揃える力はないはず。

「旗印わ？」

「袁です！」

「馬鹿な事を言わないで！袁家からの援軍は陳留にいるはず！」

何故袁家が此処に！

「落ち着きなさい、荀イク。キ州の青州方面軍が動いたんでしよう。」

「しかし！」

「まずは此処で待機よ、あの袁家軍が負けるとは思わないけどもしものに備えて何時でも動けるようにしておきなさい！」

「「「ハッ!」「」」」

何がどうなっているのよ!

ネコ耳サイドエンド

「あのう、春蘭様。その袁家軍の人達がこの青州に來ると何が華琳様にとって不都合なんですか？」

「どういう事なんだ秋蘭？」

「あんたそんな事も解らないの!」

「何だと! だったら説明してみろ! 策は順調だと言っていたではないか!」

「姉者、荀イクも落ち着け。季衣が困っているぞ。」

「おお、すまなかった、季衣。」

「い、いえ大丈夫です、春蘭様！で、軍師様？」

「私に様はいらないわよ！まだ正式な軍師じゃないんだから。」

軍師様呼ばれてまんざらじゃないくせに。

「まあいいわ、説明してあげるから其処の猪もしっかりと聞いておきなさい！」

「貴様！」

「姉者、落ち着け。」

「ふん！いい、今曹操様は何処の太守？」

「はい！陳留です！」

「偉いぞ季衣！もう覚えたのか！」

「春蘭様に教えてもらったので頑張りました！」

「ハア、先に進めるわよ。そう、曹操様程の方が陳留という群の太守でしかないの！それほどこの世の中は腐っているのよ！」

「腐っているとは大きく出たな。」

「と、とにかく今回の賊の討伐は曹操様の飛躍の刻だったのよ！」

「どうして今回の賊の討伐が飛躍の刻なんですか？」

「まず鎮圧した地域の支配権が手に入る可能性が高いからよ。」

「？×2」

「ハア〜。」

「アア！可愛いなあ姉者わ。」

「いい、賊がこんなに発生しているのも今の皇帝とカン官が売官…役職を金で売ることよ。それをやったせいでろくな奴が高い地位

に居なくなったの。でも逆に金さえ出せば高い地位が買える。私はこの青州を制定した後にカン官共に金を渡して曹操様が青州の州牧になれるように手を廻しておいたのに！袁家が動いたせいで全てが水の泡よ！」

「そんな事まで考えているなんて軍師様は凄いですね！春蘭様！」

「ああ、見直したぞ荀イク。華琳様の為にそこまでしていたとわ。私の真名は春蘭だ！受け取ってくれ！」

「姉者が許したのなら私も許さない訳にはいかないな。秋蘭だ受け取ってくれ、荀イク。」

「僕の真名は季衣です！軍師様！」

「なっ！別にあんた達の真名なんてゴニョゴニョ。」

「うん？何か言ったか荀イク？」

「桂花よ！二度は言わないからね！」

「あら、真名の交換は終わったかしら？」

「華琳様！」

「曹操様！」

「袁家が賊を敗走させたわ。」

「早いですね、華琳様。」

「ええ、でも待ちぼうけにならずに済みそうだし、春蘭、荀イク、付いてきなさい。袁家の本営に行くわよ。」

「御待ちを！曹操様！私は策をしくじりました。お約束通り命を！」

「そうね、貴女の策は失敗したわ。ならばその失敗から学び二度と同じ失敗しないよいになさい！簡単に命乞いをする奴が私は嫌いな。そして簡単に死に逃げる者も！私に付いてきなさい！荀イク、私には貴女が必要よ！」

「う、有り難うございませゆ曹操しゃま！」

「華琳よ、荀イク。」

「桂花でございます、華琳様！」

この後、曹操一行が袁家の本営に行くのはネコ耳軍師の泣いて赤くなつた目が治るまで待たれる事になる。

「初めましてかね、私は袁家でしが無い軍師をやってます郭図と申します。」

「ええ、私は曹操、後ろに居るのは軍師の荀イクと武官の夏侯惇よ。」

「で、本日は何用でこちらに？」

「それはこっちの台詞よ！袁家からの援軍は陳留の郊外で土いじりをしてるはず！何で袁家の青州方面軍が動いてるのかって聞いているの！」

「落ち着きなさい、桂花。」

「しかし…」

「別に何かしようって分けじゃないの、ただ何故袁家の軍が此処に居るのが聞きたいの。」

「はあ、いやですね、うちの姫、ああ袁姫様から早馬で青州で動きがあるから気を付けるようになって来ましてね。国境の防備を強化してたら来るは来るは、賊をなんとか撃退して追撃に移ったところなんですよ。」

「動員した兵数は幾らかしら？」

「防衛戦に動員した兵数が十五万、今は十万で追撃に当たっています。」

「私達は必要かしら？」

「それはもちろんですとも！私達は事後処理なんかがあるので是非お願いしたい！何ならこちらの兵を連れていきますか？」

「ええ、お願いするわ。敵の兵力はどれくらいかしら？」

「そうですねえ、敵の殆んどが流民でまともな武器も持ってませんし、数は少なく見積もっても八十万は居ますが事実上まともに戦える兵数は十万いるかいなかな。青州は百万も兵を養える土地じゃないですからな。」

「ありがとう、すぐに援軍を編成してちょうだい。出来るだけ早く出たいの。」

「畏まりました。ああそういえば、家の大將…すみません、袁紹様が貴女をエン州の州牧に押すらしいですよ。」

「そう、失礼するわね。」

「ええ、御武運を、曹操殿。」

「ふう〜。天才を相手にするのは疲れるねえ。勘弁してくださいよ袁姫様。しかし想像以上に早いな。これは青州の半分どころか一群ぐらいしか取れないことを覚悟しないとな。」

まもなく、曹操さんは青州の賊を鎮圧した。

その功績によってエン州の州牧に任命され、徐州の一部をエン州に組み込ませることを許された。

「申し訳ございません、華琳様。私の見積が外れなければ。」

「そうね、確かに麗羽しかないない袁家ならここまでは動けないでしょうね。でも袁家には彼女がいる。」

華琳様の眼が遠くを見ている。私達なんか眼中に無い。それしか目に入っていないような表情をなさる。

華琳様にこんな顔をさせるなんて憎い！

春蘭は華琳様の表情に気付いて「華琳様」なんて情けない声を出している。

秋蘭はやれやれって顔をしているがどこか嬉しそうね？

季衣はさっぱりって顔をしてる。

「彼女とわ？」

「袁姫よ！」

「袁家の戦女神！」

袁姫、彼女が戦に出れば平野が敵の屍で覆われ、血の川が流れる。その歌声で兵士の魂を鎮め、舞で魂を家族の元に還すなんて噂されている袁家の最終兵器。彼女の美しすぎる容貌は敵ですら見とれるという。

「あの袁姫が動いたと言うのですか！華琳様！」

季衣以外の皆が「え？」て顔をした。

「？」

「何を言っているの桂花。あの一万五千を率いて今陳留で屯田しているのが袁姫よ。」

曹操軍の天幕に桂花の悲鳴が響いた。

第九話（後書き）

これからも駄文ですがよろしくお願いいたします。

第十話（前書き）

時間がかかってしまい、すみませんでした。ちょっと中途半端にな
ってしまいました。

第十話

「あら、言ってなかったかしら？」

「はい！聞いていません！ああ、何て事をしてしまったの私わ！」

余りの変わりように曹操以外がぼかんとしてしまった。

「お、おい、どうしたんだ桂花？」

「どうしたんだじゃないわよ！あの袁姫よ！キ州で様々な改革を行い、兵法を自在に操り敵を殲滅し、御互いにいがみ合っていた河北袁家と汝南の袁本家の仲を取り持った、あの袁姫！」

「あ、ああ。」

桂花の剣幕に春蘭が押されている。

「これから曹操様が上をいいえ、霸道歩んでいかれる限り必ず立ち塞がる相手よ。曹操様がそう考えておられる程の相手と話す機会を自ら潰してしまうなんて！」

「なあ秋蘭、あいつってそんなに凄い奴だったのか？」

「ああ、敵になると決まった訳ではないがな。」

「さあ、陳留に帰るわよ。各自準備しなさい！」

「」「はっ！」「」

曹操軍は陳留へ帰還の道を歩み始めた。

「クチュン！」

「袁姫様！風邪でございますか！」

「違うわ、大丈夫よ高覧。誰かが噂しているのよ。」

「きつと袁紹様ですね。」

「そうかもね。」

今私は土いじりをしています。屯田は順調に進み、秋にはきつと豊作でしょう。

ついでにやっておいた街道の整備も順調です。正直お金には困らないので貧困層や流民、浮浪者の働けそうな者達を集めて工事を行わせています。

街道を整備したおかげでキ州とエン州の交通の便はかなり良くなった。

そう、エン州に進攻しやすくなった。勿論キ州側には小さな要塞のような物を作らせている。全ては曹操さんと戦争になった時の為です。

しかし、なんかこう、歌いたくなってきました。しかし農作業をするのに合う歌なんか私知りません。

「広いの数あるひとつ、青いの。」

高覧サイド

歌が聞こえる。所々途切れるが確かに聞こえる！

さっ！

近くの兵に手で合図を送る。声が出せない時に意思を相手に伝えるために袁姫様が考えた方法だ。

兵が静に集まってきた。

（高覧様……。）

（袁姫様が歌っていらっしやる。音を出したら殺す！）

（了解×多数）

袁姫様の歌を邪魔する奴は殺す！

高覧サイドエンド

「ほおら貴方にとって大事な人ほどすぐ側にいるよ」

はっ！私ったら大きな声でなにやってるのかしら！いけない、いけない。

「ああ×多数＋高覧。」

「っう！聞いてました？」

「本当に美しすぎる歌声でございます。袁姫様！」

高覧、鼻血。

「うう、帰って母ちゃんに会いたい。」

「業に帰ったら居酒屋のあの娘に告白するんだ！」

等々、屯田に参加していた兵達でこったがいしライブのようになってしまった。

「さあ、十分休憩は取ったでしょう。作業に戻りなさい。」

「おおー！×多数」

全く、こいつらときたら。

「袁姫様！」

「何事ですか？」

「曹操殿が帰還されたそうです。」

「報告ありがとうございます。高覧、一度戻りますよ！」

「はっ！」

今私は陳留の城で曹操さんに屯田の成果を報告している。

「そう、助かったわ袁姫。それと青州でも世話になったわ。」

「いえいえ、困った時は御互い様ですよ。ところで、知らない方が何人かいらっしゃるんですが？」

「ああ、そうね。四人とも挨拶しなさい。」

「ハイ！華琳様！ボクの名前は許猪、字は仲康っていいですよ！」

「元気でいいですね。花丸あげちゃいます！私の名前は袁姫とい
います。気軽に袁姫お姉ちゃんって呼んでください（笑）」

「ハイ！袁姫お姉ちゃん！」

お姉ちゃん、いい響きだ。

「つ、次は私かな？私は張…コホン、コホン。天和って言うの。
宜しくね、袁姫ちゃん！」

「次はちいかしら、ちいの名前は地和。ていうかあんたその不気
味な仮面外しなさいよね！気味が悪いんだけど！」

「私は人和です。姉さん達、この人にそんな口の聞き方したら駄
目だよ！この人は殲姫だよ！」

ビクッ！

三人が寄り添い、ガタガタ震えだした。

「ち、因みにどのような噂をお聞きで？」

「殲姫が歩いた後には何も残らないとか。」

「血の河ができるとか。」

「刀を一振りすれば首が百飛ぶとか？」

がく！なんだそれ！

「うう、高覧。この娘達が虐める。」

カチャ。

「ちょ！高覧。冗談よ冗談。」

「チッ！」

高覧が何だか壊れてきたような気がします。

「コホン、それで曹操さんこの娘達はどのような娘達なんですか？」

「ええ、この娘達は歌の才があるの。だから拾ってきたのよ。」

「はあ、そうなんですか。」

「そこで貴女に歌を歌ってほしいの。」

「歌は…。」

「分かっているわ。貴女が自分の家族以外に歌を歌わない事わ。そこをなんとか御願いたいなの。」

目が言っている。

「これで青州の件はチャラにしてあげる。」てさ。

はあ、気が進まないがしょうがないか。

「ちよっと準備に時間がいりますが、よろしいですか？」

「ええ、いいわ！」

声が弾んどりますよ曹操さん。

少し時間が進み只今、日暮れ。何か特設会場みたいなのが作られていました。労力の無駄遣いですよね。

「すごいですね、袁姫様。」

「労力の無駄遣いですよ。」

「さあ、準備が出来たわ。今夜はお願いね。」

「余り人前で歌うの好きじゃないんですよね、って高覧？何をしているのかしら？」

「袁姫様の歌声を聞き逃さないように……。」

「もういいわ。」

「しかし、着飾ると本当に美しすぎるわね。女として嫉妬してしまうわ。」

「もう行きますね。」

「その鉄兜は外していきなさい。」

ガチャン。

壇上に上がると席の最前列に曹操さん、天和さん、地和さん、人和さん、何でか高覧が座っている。

「もう、一曲だけですよ。」

曹操さんには届いていないようだ。

どこかとても欲しかったオモチヤを見詰める子供のような目で。

獲物を見つけた猛禽類のような目で私を見ている。

スー。

息を吸う。

どれくらい時間があれば

心は繋がるかな

会場が静まり返る。

少し寂しげな笑顔

癒せたらいいのに

「ふう、ありがとうございました。」

頭を下げると溢れんばかりの拍手が迎えてくれた。

「凄い！凄すぎです袁姫さん！」

天和さんが飛び付いてくる。

うお！双子山が凄い！

「まあ、認めてあげないこともないわ。も、勿論ちいの方が上手いんだから！」

目を赤くしながら地和さんが叫ぶ。

「本当に凄かったです。今度私達と一曲歌って貰えませんか？」

余り表情を動かさない人和さんが驚いたような顔をしながら言ってきた。

「別に今でも構いませんよ？」

「ううん、今は駄目です。もっと三人で歌が上手くなって貴女の隣で歌うことが許される所に行くまで、貴女とは歌えない。ね、天和姉さん。」

「そうだね！三人でもっと練習してもっと上手くなろうね！」

「ちい達、負けないんだから！」

いい意味で彼女達に火がついたようだ。

「これで良かったんですね、曹操さん？」

「ええ、ありがとう袁姫。とてもすばらしい歌だったわ。」
そこからは夜通しの宴会だった。

「ううゝ。頭痛い。」

「飲み過ぎです袁姫様。」

その後、曹操さん達に別れを告げて私達はキ州に帰還する筈だった。

「ねえ、七乃？」

「はいー。何ですか？袁姫様。」

「何で私はキ州ではなく汝南に向かっているのかしら？」

「聞いてくださいよ袁姫様ー。朝廷から派遣されてきた人、本当に使えないんですよ。だからポイってしちゃいました。」

「当たり前じゃないですか。今更河北と揉めようとは思いませんよ」（笑）」

この腹黒女！

「現状わ？」

「淮南辺りまでは何とかしたんですけど、ちょっと問題が出てきまして。」

「？」

こんなやり取りをしながら汝蔭までやって参りました。何で汝蔭かと言いますと汝南から淮南までの三群を統治することになり、横に長くなり真ん中の汝蔭まで移動してきたのだ。

ゆくゆくは淮南の寿春に本拠地を移すらしい。

「で、私に何をしろと？」

「揚州で孫堅って人が力をつけてきているみたいで、牽制出来る人が欲しいなって思いました」

「とか言って三群の統治がめんどくさいからじゃないでしょうね。」

なんて話をしながら仮の本家の邸に入ると……………。

「袁姫御姉様ー。」

「お久しぶりですね。袁術さん！」

袁術さんが抱き付いてくる。頭をお腹にグリグリされて少し息苦しいが、それ以上に袁術さんのだきごこちが良すぎる！

頭を撫で撫でしちゃいます！

「フミユ、今回はどのくらい一緒に居てくれるのじゃ？」

「そうですねえ、七乃に聞いてみてください。私には決定権がありませんから（笑）」

「えー、いいんですか！じゃあずっと……。」

「それを麗羽姉上に言ってきたくださいね。」

「三月程になりそうですー、美羽様！」

「これ！七乃！しっかりせんか！」

「よっ！小さいのにその無駄に溢れ出る威勢！そこに痺れる、憧れます御嬢様！」

「ワハハハッ！もっと誉めてたも！誉めてたも！」

このやり取りはこのままか（笑）

「あらあら、袁姫ちゃん久しぶりね。またお願いね。」

「はい、袁逢様。」

こうして数日後、私達は寿春に向かった。

はあ、曹操さんの次は孫堅さんですか。歴史の中の英雄にもう二人

も会っちゃいましたよ。

えっ？袁紹と袁術はって？この人達は家族です！

まあ、名門らしく上から目線で孫堅さん呼びつけました。

もう開き直ってやります！

ううゝお腹痛い。

おっ、見えてきましたね。孫の旗が。

はてさて、どんな人なんでしょうか？

でも、どんな人でも袁術さん達は殺せません！

たとえば英雄が何人敵になって私の家族は守ってみせる……。。

第十話（後書き）

駄文ですね。

でも頑張ります。

てか孫堅さんどんな人にしましょう。

第十一話（前書き）

すみません、かなり中途半端です。

第十一話

寿春の邸。

謁見の間には袁逢様、賊の討伐から急遽帰ってきた紀霊將軍、七乃に袁術さん、そして私がいる。

今、従者から孫堅が邸に着いたと知らせが入った。もうじき此処に来るだろう。

「袁姫ちゃん、交渉役を頼んでも良いかしら？」

「私がですか？」

「私と美羽ちゃんは交渉なんて出来ないし、紀霊なんかもちろんね。」「水羽様!？」七乃に任せると腹黒さを発揮しすぎて交渉が失敗しそうだし。」

「水羽様。それはあんまりですね。」

その輝かんばかりの笑顔で言われてもね。

「畏まりました。誠心誠意やらせていただきます。」
「そんなに固くならないで。お互いに歩み寄れば交渉は成功するわ。」

歩み寄ればねえ。

正直小説とかのイメージだと孫堅って結構したたかな男ってイメージなんだよね。

さて、袁術さん達の為にも頑張らなければ！

「奥様、孫堅様が参りました。」

「通してちょうだい。」

「失礼するわね。」

入って来たのは身長が百八十程はありそうな長身で、艶やかに光る褐色の肌とピンク色の長い髪が特徴の女性だった。

「名門袁家が呉群のしがない江賊あがりになにの用かしら？」

開口一番でそれですか。まあ、やってやりますよ。

「江東でいくら暴れようと袁家は感知しない。でも河北に上がるうとするのならそれなりの対応をとらせてもらおう。ということです。」

少し驚いた顔をしている。

「ほう、揚州をくださると？」

「感知しないだけです。揚州制圧に乗り出そうが呉群だけで満足しようが我々の知ったことではありません。」

後ろに控えていた孫堅さんと同じ褐色肌とピンク色の長い髪の少女の顔が少しひきつる。

これぐらいで顔に出してるようでは駄目ですよ、小霸王。

「最近勢いがあるからって調子にのっている奴がいるというので釘を刺す為に呼んだんです。江東の虎さん。」

孫堅さんが目を細めている。

「虎を飼い慣らすつもり？」

「飼ってしまえば虎も体の大きい猫ですわ。」

おっ、孫策さんから怒気が洩れてる。

てか殺気だね。紀霊さんが剣を手繰り寄せたし、七乃が袁術を背に庇った。

救いは袁術さんの空気の流れが国宝級だったこと。きょとんと首を傾げてます。

ヤバッ、めっちゃくちゃ可愛。

袁逢様はのほほんとしている。尊敬しました。

部屋の緊張感が頂点に達した時、不意に孫堅さんが苦笑した。

「余り娘を虐めないでくれる。こういう駆け引きにとことん弱い
のよ。」

「そのわりにはノリノリでしたよね？」

クスッ！

おお！極上の笑顔ですね。子供っぽいことするくせに行動の一つ一つに余裕がある。

まさに大人の女性だよ。

「だっていきなり初対面の私に揚州をくれてやるって言うのよ、あの名門袁家が！それに貴女、豊穰姫が悪戯をするから手伝えなんて言ってくるのよ。手伝わないなんて有り得ないわ！」

「豊穰姫？」

「あら？自分がなんて呼ばれているのか知らないの？」

「河北では穢姫なんて呼ばれてましたけど。」

孫策さんの隣にいた黒髪の眼鏡を掛けた美人さん（孫策さんと同年代だと思われる。）がピクツと表情を動かした。

「ほう、貴女が袁家の秘蔵っ子か」

「さあ？袁家には私より優れた人なんて沢山いますよ、美周郎さん。」

「私の事を知っていましたか。」

「慣れない敬語なんて使わなくていいわよ。無礼なら御互いに十分はたらいたでしょう。ねえ、孫堅さん。」

「そのとおりね。しかし私の器を量ると同時に娘まで見られるとは思っても見なかったわ。」

「それが分かっている孫策さんを連れてきたんじゃないんですか？」

「さあ？どうかしらね。それで、我が孫家は袁家のお眼鏡にかなったかしら？」

「ええ、同盟を結ぶに値する方達だと思います。しかし、最後にこれだけは聴かせてください。」

「何かしら？」

「貴女は漢の臣ですか？」

「初めに言ったように私は江賊上がりよ。それを恥じた事はないわ。そんな事をしなければ生きていけない程、呉群は貧しい所だった。」

孫堅さんが遠くを見るような目をする。

孫策さんも周瑜さんも静に話を聞いている。

「でもね、夫と出会い、仲間が増え、子供達が生まれて、今の私がいるのはこの国のおかげだって思いが湧き出てきた。」

「だってこの国がなければ私は生まれてすらいなかったかもしれない。そう考えればこの国はもう一人の母親のようなものよ。例えばどんなに衰えようと母親を見捨てるほど私は落ちてはいない。だから江賊家業から足を洗って国の役人になろうと思った。」

少し寂しそうな笑みを作った。

「でもね、江東の役人達はグズばかりだった。だから私は揚州を

制圧しようと思ったの。それが江東の民の為にも、ひいてはこの国の為になると思って。この国の臣かと聞いたわね。私はこの国の臣よ！これからも、この先も！」

こんな人と同盟を組める。素晴らしいじゃないか！

「孫堅殿の思い、確かに届きました。是非、袁家と同盟を組んで頂けないでしょうか？」

「袁家が後ろ楯になってくれるなんて頼もしい限りだわ。」

「では、同盟の内容を摘めましょうか。」

「冥琳、お願い。雪蓮、いじけてないでこっち来なさい。」

「いやよ、器を量られているとも知らずに勝手に勝手に怒ったりして、私お子ちゃまみたいじゃない！」

「違うの？」

「違うのか雪蓮？」

「二人ともひど！」

「まあそれは置いておき、かの豊穰姫と話が出来るとは光栄だな。」

「あの、本当にその豊穰姫ってなんなんですか？」

「本当に知らないのか？」

「コクコク。」

「お前、江東の地で有効な農業のやり方をまとめた本を書いただろう。」

「はい、河北とはやり方が違いますからね。本家が南下した時の為に書いたやつです。」

「それをその袁逢殿がお前の名で江東の各地に出版したのだ。しかも庶民でも手が届く程の値段でな。」

「ええっ！あれ売っちゃったんですか袁逢様！」

「貴女の本を書いた本の素晴らしさを皆に知って欲しかったのよ（笑）」

(笑) じゃないっすよ。あれはまだ実験段階のものが沢山あったのに！

「袁逢様！あれにはまだ実験段階で効果が実証されて無い農耕技術が……。」

「えーそうなの！でもよく売れてるから大丈夫よ！」

いやいや、まずいでしょ。

「実験段階なのか？あれが！」

おや？周瑜さんがびっくりしてますね。

「あの農耕書に江東の民がどれ程救われたか！水害に対する対策の治水工事から始まり、三圃制という耕作方法のおかげで土地が痩せなくなった。キ州や汝南で成功を納めている肥料の作り方。このおかげで去年の収穫高が倍にはなった。役人や豪族が搾取して余り民には行き届いていないがな。それでも民はお前に感謝している。豊穰姫は民がお前に着けた尊称だ。」

なんていうか、頑張ってきて良かった。涙が出ちゃうよ。

「グスッ、袁逢しゃま、わだし、頑張ってきてよがったです。」

「ほらほら、そんな兜とりなさいな。涙が拭けないわ。」

カシャン。

兜をとる。

孫堅さん達が息を呑む。

「何あれ、反則でしょ。」

「確かに、あれは想像以上だな。」

「北と南で違う名を持つ武将、おもしろいわね。」

「袁姫御姉様、どうしたのじゃ?」

袁術さんが心配そうにしている。

「嬉しい事があったのでつい。」

「袁姫御姉様に良いことがあったのか！それは良かったのじゃ！」

飛び付いてきた袁術さんを抱き締める。本当に優しい子だ。

「お見苦しい所を御見せしました。」

「いえ、なかなか良いものを見せてもらったわ。」

うう。めっちゃくちゃ恥ずかしい。

「コホン、同盟の内容を詰めたいのですが。」

「クスクス、なら冥琳、お願いね。」

「はっ。」

「そうですね、まず袁家としては不可侵条約は確実に欲しいですね。」

「そうだな、こちらとしても不可侵条約は結んでおきたい。あと……」

「水路の使用についてですか？」

「ああ、使用の許可さえあればお互いに連絡などがしやすくなるだろう。」

「それは構いません、ならこちらも一つよろしいですか？」

「なんだ？」

「袁家の兵を水兵として鍛えてほしいのです。」

「ほう、それはなぜだ？」

周瑜さんの目が少し険しくなる。

「孫家と同盟を結ぶということは揚州の他の太守達の水軍を敵にまわすということです。それに揚州に強い影響力を持つさる御方を牽制しなければいけませんし。」

ここまで言えば貴女なら分かるでしょ？周瑜さん。

「さる御方か。そういうことなら了解した。しかし孫家の水軍の調練は厳しいぞ？」

「ついていけないような奴は河に蹴り落としてきてくださいな。」

正直、あの人を敵にまわすならそれぐらいの覚悟はしておかないと。」

「ほう、お前にそこまで言わしめるか。」

「伊達に年は重ねていないだろうって事ですよ。」

「あと戦艦の建造技術も欲しいですね。」

「おいおい、ずいぶんと欲張りだな（笑）」

「何とでも言うてください。代わりと言ってはなんです。が官位と小麦なんかを融通しますよ。」

「それと軍馬だ。」

「そちらも抜け目がないですね。」

「お互いに様だろうに。」

いつの間にか孫策さんと袁術さんが仲良くなっていた。何でも一番下の妹が袁術さんと年が近いのだそうだ。

「美羽ちゃん、またね。」

「うむ、また遊びに来るのじゃぞ！雪蓮！」

「正式な同盟の銘文は後日ということで。」

「ああよろしく頼む。」

「次は一緒に酒でも飲もう、袁逢殿！」

「ええ、また遊びに来てください。」

それぞれ別れの挨拶を済まし、孫堅一行は呉群へ帰っていった。

「雪蓮、今日は随分大人しかったわね。」

「少々私を除け者にして話を進めておいてそんなことを言うの？」

「そう言うな、雪蓮。袁家の意図が読めなかった以上迂闊な事は言えなかったのだ。」

「雪蓮、貴女袁姫をどう見た？」

「気に入らないわね。」

「なぜ？」

「だって私達は寿春を押さえられてるし、青州だって事実上袁家が治めているようなものじゃない。北上は出来ない。江東に押し込められたようなものだわ！」

「よく見えているじゃない。でも私はそうは思わない。」

「どういうこと？」

「天下二分…ですか？」

「そう、江東を我が孫家が、河北を袁家が治めて漢王朝を再建する。夢があるじゃない。」

「へえー、そんな大きな事考えてたんだ。」

「それなら早く揚州を制圧しなければ、大蓮様。」

「そうね、冥琳。で雪蓮、個人的には袁姫をどう見た？」

「友達になれそうよ、しかも親友に。美羽ちゃんも褒めちぎってたし。」

「そう、それは良かった。」

呉群に着くにはまだ時間がかかりそうだった。

「それでは私はこれで失礼しますね。」

「フミユ。もう行ってしまうのかえ？もうちょっといたっても！」

袁術さんに泣き付かれてしまった。

「美羽ちゃん、余り袁姫ちゃんを困らせては駄目よ。」

「うう。御母様。」

「七乃、後は頼みましたよ。」

「あの、ちょっといいですか？」

「何かしら？」

「何で私だけ真名で呼ぶんですか？」

「それはね、貴女が私と一緒にだから。」

「？」

「貴女は袁術さんの盾、袁術さんの剣。私も同じ、だから貴女は真名で呼ぶの。別に他の方が特別じゃない訳ではないのだけど。貴女は私の半身みたいなものだからね。」

「いや、袁姫様にそこまで言っただけとは光栄ですね。」

「もう少し嬉しそうにしないよ。」

「ええゝ。嬉しいですよ。」

「これ、七乃！何を二人だけで話しておるのだ！」

なんて話をして私はキ州への帰路についた。

第十一話（後書き）

恋姫を中古で買いました。勉強したいと思います。

更新が遅くなると思いますがこの駄文を宜しくお願いいたします。

第十二話（前書き）

やっと董卓出せました。

第十二話

はい、帰って来たら何か大変な事になりそうです。

事の発端は大將軍からの召集命令が麗羽姉上に届いた事だ。

「召集命令？」

「そうですじゃ、大將軍から至急都に来るようにとの命令です。」

「肉屋がいったい何の用ですの！田豊さん！」

「カン官の肅清…。」

「袁姫ちゃん？」

「あのヘタレ大將軍が八校尉を呼び寄せるなんてきつと大事です。そして大將軍絡みの大事なんてカン官との政争ぐらいしかありません。」

「確かにそうですの。」

田豊爺やソ授爺がうなずいている。

「やっとカン官を肅清する気になって都で禁軍以外で唯一駐屯する事ができる八校尉を集めようとしているのでわ？」

「それでしたら麗羽様、都に至急行くべきです。」

「ソ授さん？」

「カン官と大將軍の政争に首を突っ込む突っ込まないは都で考えてもよろしいが都の袁家の縁のある者達を保護しなければ。」

「そうですね。兵はどのくらい連れて行けばいいかしら？」

「二千か三千ぐらいで十分だと思います。とにかく今は急いで都に行かなくてわ。」

「なら袁姫ちゃん、兵の用意をしてちょうだい。猪々子さん！斗詩さん！御供なさい！」

「はい！」

「あいよ！姫！」

「姉上、私も御供します。」

「分かりましたわ。さあ、急ぎますわよ。」

そうして私達は兵を率いて都に向かった。

「おお、本紹。よく来てくれた！お前が来てくれれば恐いもの無しだ！」

都に着いて姉上を出迎えたのはがたいの良い気の良さそうなおっさんだった。

「大將軍もお変わりなさそうで。」

「おう！曹操が来たらカン官共を根絶やしにしてやる予定だ。期待しているぞ！」

「カン官共の動きわ？」

「皇甫嵩をけしかけようとしているが奴の事は俺よりお前の方がよく知っているだろ？」

「分かりましたわ。兵は何時でも動かせるようにしますから。」

「世話をかけるな、宜しく頼む。」

程なくして曹操さんが都に着いたがそこから事態が一気に動いた。

「大將軍が暗殺されたですって！」

そう、皇帝に何でも朝の挨拶に行く途中に暗殺されたと言うのだ。

「姉上、今すぐ軍を宮中に突入させましょう。」

「で、でも…。」

「今行かなければ他の者に先を越されます！」

「ッ、軍を動かしますわよ！斗詩さん！猪々子さん！ついてらっしゃい」

はい、只今宮中でカン官の粛清中です。

別に史実のように見た奴全員殺しているわけではないですよ。ちゃ

んと捕まえてから調べて殺しています。

ここでめんどくさい事になりました。

皇帝が死んでいたのです。

この事実はカン官共に隠蔽されていた。

大將軍を殺した後に自分達の傀儡になる皇太子をたてようとしていたみたいです。

ちなみに、今皇位継承権を持っているのは大將軍の妹が産んだ弁と妾が産んだ協である。

しかし弁と協がカン官の一部によって誘拐されたのだ。

それを今、私達は探している。

「キー、腐れカン官共！皇子達を何処に連れて行きましたの！」

「姫！、アネキー！」

「何ですか猪々子さん！騒がしいですわよ！」

「それどころかじゃないって。西の方からかなりの数の軍勢が近づいてきてるって！」

「何処のどなたですか？」

「姉上、今すぐ軍を纏めてその軍勢を迎撃に出しましょう！」

「袁姫ちゃん？」

「都の騒動にかこつけて自分の勢力を伸ばそうとしている輩に違いありません！都の安泰は我々袁家が守らなければ！」

「でもアネキ、数が違いすぎますよ。」

「きっと皇甫嵩さんが禁軍を召集しているはずです。まずはその時間を稼ぐ、それに袁成様が動いているはずです。」

「分かりましたわ。猪々子さん、行きますわよ！」

「あいあいさー！」

「ついでに華琳さんにも教えてあげなさい。」

「曹操さんならもう軍を纏めて出ていきましたよ。」

「キー、あのちびっこたら！急ぎますわよ！」

洛陽こうがい。

「あれね。」

隣の曹操さんが呟く、てか何か当たり前のように隣に居ますよね。

「あら、共闘するんだから隣に居たって良いじゃない。」

読まれた！

「報告します！前方の軍の旗印は董！数はおよそ二万！」

曹操さんの二千と私達の三千、合計五千の四倍。厳しいですね。

「曹操さん、右翼をお願いします。我々で中、左翼をやります。」

「任せて大丈夫なの？」

「都の一族に召集をかけました。そろそろ…。」

「麗羽様、袁姫様。」

「ほらね。」

「斗詩さん、何人程集まりました？」

「一族の皆さんの私兵が一千、義勇兵の皆さんが千五百、傭兵が五百ですね。」

「あら、以外に少ないですね。」

「一族の皆さんはともかく義勇兵、傭兵は統制が難しいですから。」

「一族の皆さんは麗羽姉上の親衛隊として斗詩さんが率いてください。私と猪々子さんでそれ以外の兵を率います。」

「それで？」

「中央で麗羽姉上が魚鱗の陣をひいてください。」

「私と曹操さんは麗羽姉上を軸に鶴翼の陣をひきます。」

「横陣で受け止められる程兵は居ませんし、絶えず敵の先鋒がこちらの鶴翼の中に入るように移動して…。」

「報告いたします！」

「何事か！」

「董卓が話し合いの場を設けたい。との事です。」

「場所は両陣宮の中間点。護衛は二人まで、軍師も二人までだそうです。」

「分かりました、下がりなさい。」

「はっ！」

「どう思いますか、華琳さん？」

「良いと思うわ。時間稼ぎにもなるでしょうし。麗羽、貴方わ？」

「西域から兵を都に連れてくるような野蛮人の顔を拝んでやりますわ！」

「なあ、斗詩？」

「なに、文ちゃん？」

「アタイらも兵を率いて都に来たよな。」

「そうだよ、どうしたの？」

「いや、姫の理屈じゃさ、アタイ達も野蛮…。」

「何かおっしゃいまして？猪々子さん。」

「いいえ。なにも。」

「桂花！」

「はっ！」

わざわざ陣幕の外で待たせてたんだ。

「この子は苛められて感じるような変態だもの。これぐらいがち
ようどいいのよ。」

また読まれた！てかめっちゃ睨まれます。

「ちょっとキレイで胸が大きくて才能があるからって調子にのらないでよね！あんたなんか華琳様に比べたら…。」

「止めなさい桂花。」

「華琳様〜。」

「荀イクさん、後で少しお話をしましょうか。」

「な、何よ！何する気よ！」

「いえ、まだ荀イクさんとしっかりお話をした事がないな〜と思っています。」

「あら良かったじゃない、桂花。」

「か、華琳様！」

「袁姫と話す事ができたらきっと多くの事を学ぶ事が出来るって言っていたものね。」

「まあ、私も荀イクさんに多くの事を教えてほしいと思っていたんです。」

「か、華琳様がおっしゃるから話してあげてもいいわ。華琳様が言ったからよ!」

「クスクス、ありがとうございます。」

「春蘭、秋蘭。」

「はっ!ここに!」

あっ!秋蘭さん。手振っところ。

こっちに気づいて笑顔を返してくれた。

「…秋蘭、残って軍の統括をお願い。」

「畏まりました。」

「華琳様。」

「何?春蘭。」

「秋蘭も護衛についた方がよろしくはありませんか？敵陣に行くのですから？」

「あら、春蘭が秋蘭の分も私を守ってくれるのではないね？」

「はっ！この身に変えましても！」

「桂花もついてらっしゃい。」

「はっ、華琳様！」

「秋蘭、兵を任せたわ。」

「御気をつけて、華琳様。」

「どうやら華琳さんにヤキモチを焼かせてしまったようだ。秋蘭さんも苦笑している。」

「顔良さん、軍をお願いします。」

「分かりました、袁姫さん。」

「文醜さん、護衛をお願いします。」

「任しときな！」

「さあ、行きましょうか、麗羽姉上。」

「オーホッホッホ。野蛮人さん達に袁家がいかに華麗で優雅であるかを見せつけやりますわ！」

はい、只今董卓に指定された場所にあります。

向こうからも人が出てきた。

麗羽姉上が用意させた豪華な机を挟んで向かい合う。

先に口を開いたのは向こうだった。

「私達は皇太子様達を護衛して来たのよ。その軍に刃を向けると
いう事は漢帝国に反逆するということかしら？」

このつり目のお姉さんやりますねえ。

「皇太子様達を護衛している？子供でももう少しまともな嘘をつ
きますよ。私達はカン官共の政争に便乗し、都に押し入ろうとして
いる輩から都を守るためにここに居るんです。」

「何ですとー！」

今度はお子ちゃまかいな。

今更ながら相手の陣容は眼鏡でつり目のお姉さん。お子ちゃま。胸
にさらしを巻いているお姉さん。私と同じ銀髪のお姉さんだ。

「だいたい、貴女方は何故二万もの軍勢を率いて都に来たのです
か。そこに反意を見るなというのがおかしな話ではないでしょうか
？」

「ねね達は肉屋の命令に従っただけなのです！」

「せやで、でもうちらはゴタゴタに巻き込まれるんが嫌やから州境で様子見しとったんや。」

「そしたらカン官が二人の子供を連れて逃げてきたの。その子供がこれを持っていたわ。」

「そ、それは…。」

「何なんですか華琳様？」

「…………。」

「…………。」

「…。」

「はあ、これはね伝国の玉爾。皇帝のみが使うことを赦される物なの。」

「何故華琳様はそんな物をご存知なので？」

「あんたって本当に馬鹿ね。華琳様の役職を忘れた？ 皇帝直轄軍、西園八校尉よ。華琳様やその袁紹への命令書には必ずあの玉爾が

押されているの。だから相手もわざわざ判のところをこっちに見せてるの！」

「なんや、華雄みたいな奴が向こうにもおるやん。」

「何だと！」

「止めなさい、でどうなのよ？」

「確かに伝国の玉爾だわ。それで貴女達はとうするつもりなの？」

「両皇太子様を都にお連れするわ。」

「それで、都を制圧し、この国を牛耳るのですか？」

「ッ、カン官何かよりよっぽど上手く治めてみせる！」

「それを私達が許すとしても？ いえ、私達が黙認しても回りがそれを許すとしても？」

「それだけの力が私達董卓軍にはあるわ。」

「そうですか、でも…。」

「ほ、報告致します!」

「なんや! 会談中やで!」

「一万程の軍勢がこちらに接近中とのことです!」

「旗印はどこ!」

「旗印は袁! 規模は一万程です!」

「くっ! 時間を稼がれたってわけね。」

「どうします? 今頃都の皇甫嵩さんが禁軍の編成を終わらせている頃でしょうね。」

「こちらに皇太子様達が居るのにそのような暴挙を働いてただですむと思ってるのですか!」

「おちびちゃん、貴女こそ皇太子様達を盾にするような事をしてみなさい。後で生きてきたことを後悔させてあげますよ。」

「ううゝ。」

あ、半泣きだ。

「え、袁姫ちゃん、そんなこと……。」

「黙ってなさい麗羽。こういう交渉はこちらが妥協したら終わりのよ。」

「そ、双方止めよ。」

場違いな子供の声。

「わ、我が名は劉協である。そしてこちらにおわすは我が兄にして皇位継承権第一位、劉弁様なるぞ。」

協に比べて弁は暗愚そうだ。協の服を掴んでガタガタ震えているだけである。

「両皇太子様、御無事で何よりです。」

この中で一番官位が高い麗羽姉上が声をかける。

「うむ、カン官に拐われた妾達を必死に探してくれたとか。大義であるぞ。」

「ははっ。」

「しかし、カ馱の言うように董卓が妾達を保護してくれたの事実なのだ。」

「左様でございましたか。カ馱殿、混乱していたとはいえ、この無礼、許してくださいな。」

麗羽姉上と一緒に一同で頭を下げる。

「わ、解ってくれたならいいのよ!」

照れてる。可愛人だな。

「その鉄兜! 皇太子様の前ですぞ! その鉄兜をはずすのです!」

お子ちゃまが吠えた。さっきの仕返しか？

「これは失礼しました。」

鉄兜を外す。

「袁、袁姫ちゃん！駄目ですわ！」

「袁姫！待ちなさい、まだ心の準備が！」

「何ですか？心の準備をしないと見れ………」

「なっ！」

「こっ、これは反則やろ。」

「月！見ちゃダメ！」

眼鏡さんが皇太子様と一緒に入って来た少女のめを隠す。

酷い扱いだなあ。

「皇太子様、失礼いたしました。お子ちゃま、これで良いですか？」

「……………」

「おい、陳宮。しっかりしろ！」

「これはめったに拝めへんべっぴんさんやな。」

「詠ちゃん、何にも見えないよ。」

「見ちゃダメ！あんなの見ちゃダメ月！」

「そう言わんと見せてやりいな。これは見ものやで。」

「ううー、あんなの月の目に毒よ！」

「それはあんまりな扱いやないか？」

やっとカ駆が月と言われていた少女から手を引く。

「……………」

少女も固まる。そして…。

「へう。」

グハッ！何、「へう。」 って！ヤバイ、ヤバすぎる。

そっちこそ反則でしょ。

か、体が勝手に動く。

「ゆらゆら。」

「ちよっ！あんた！」

「あ、あのう。」

ギュー。

「え？」

ギュー

「え、えっと…」

ギュー

「え、袁姫ちゃん！どうしましたの！」

「ハッ！私はいったい……。じゃなくて麗羽姉上！」

「な、何ですか？」

「この娘可愛すぎです！持って帰りましょう！今こそ袁家の力を使う時です！キ州にお持ち帰りしましょう。」

ギュー

「へうへう。」

「ちよつ、ちよつとあんた月を離さないよ！」

「嫌！こんな可愛い娘離したくない！ねえ、お姉さんと一緒にキ州に行きましょ、ね。」

「へうへう。こ、困りますう。」

「こほん、失礼しました。」

「まったくよ！二度と月に触らないで！」

「詠ちゃん、それは言い過ぎだよ。」

「で、でも。」

「詠ちゃん。」

「わ、わかったよ。」

「御挨拶が遅れました。私が董卓です。」

「そうですね、貴女が董卓さん。皇太子様達を保護して頂き感謝しますわ。」

「はい、では皇太子様達をお願いいたします。」

ぺこりとお辞儀をしてくれたが話はそう単純には進まないよ、董卓さん。

「それは出来ません、董卓殿。」

「えっ、何ですか？」

「申し遅れました、私の名は袁姫です。今我々が董卓殿から皇太子様達をお預かりすると我々が董卓殿から手柄を横取りしたように見られてしまいます。ですから都まで董卓殿に護衛してもらわなければいけません。」

「へうへう。気づきませんでした。ごめんなさい。」

「なら私は先に都に戻り皇甫嵩に話を通してくるわ。」

「お願いします、華琳さん。」

そして私達は都に引き返した。

数日後、皇太子弁が正式に皇帝になった。しかし弁は生まれつき体が弱く、幼いこともあり後見人が必要になったが母親の何皇后がなめることは袁家が全力で阻止した。外戚の専横に耐えられるほどのこの国には余裕は無い。なので袁カイ様達に動いてもらった。何皇后はいま療養を理由に離宮に隔離している。

さて、ここで問題が出てきた。皇帝が後見人に董卓を指名、もとい任命したのだ。

まあ、反対意見も出たが拐われた皇太子様達を救ったおお手柄をあげたこともあり、渋々受け入れられた。

しかし問題はここからだった。

「なっ！なんなんですよこの命令わ！」

「確かにこりゃ少し酷いんじゃないかアネキ。」

「私に言わないでよ文醜さん。命令を出したのは皇帝陛下ですよ。」

「でもさ、袁成様の司州州牧の地位を取り上げて姫と一緒にキ州に帰れないだろ。」

「何故名門袁家の私達がこのような扱いを受けなければいけませんの！」

「大方袁家が勢力を伸ばすのが気に入らない奴らが陛下に要らない事を吹き込んだのでしょう。」

「キーツ！それはいったい誰ですの、袁姫ちゃん！」

「そこまでわ。まあ帰れと言うのですから帰りましょう、姉上。」

「袁姫ちゃん。」

「その前に董卓さん達に挨拶していきましょう。」

「董卓様、相国就任心より御祝い申し上げます。」

麗羽姉上はむすつとしたままなので私が挨拶している。

「：ありがとうございます。袁紹さん、袁姫さん。」

「あんた達にあんな命令出したのは私達じゃないわよ。」

「それは分かっていますとも。」

「すみません、陛下には何度も再考をお願いしたのですが。」

「董卓様。」

「はい。」

「御用心なさりませ。私達はまだいいのです。袁成様の待遇にはカチンとききましたが袁カイ様を始め一族の殆どの者がそのままの地位で落ち着きましたから。しかし董卓様を良く思わない連中の攻撃はこれからもっと酷くなるでしょう。……………はつきり申しまして袁家は貴女を援護出来ません。良くも悪くも袁家は強大ですから。」

「袁家の皆さんが敵になるかもしれない？」

「手っ取り早く担ぎやすいのは地方の皇族の方達か袁家でしょう。特に今回の件がありましたから。」

「…御忠告ありがとうございます。そうならないように詠ちゃんと一緒に頑張ります。」

董卓さん、もう泣きそうだな。

「はい、董卓様。御元気で。」

そして私達は都を經ち、袁成様と合流してキ州に帰還した。

それから少したったある日、董卓を撃てとの檄文が各地に飛んだ。

第十二話（後書き）

駄文を読んいただきましたありがとうございます

第十三話（前書き）

駄文ですがよろしくお願いいたします。

第十三話

「これはいいように書かれていますね。」

檄文の内容は都で董卓が暴虐の限りをつくし、都は阿鼻叫喚である。

袁紹、曹操は董卓を止めようとしたが多勢に無勢で一時都から離れ、領地で再起を図っている。

漢の忠臣達は袁紹と曹操と共に董卓を撃ち、漢に平和をもたらせ。ってところだ。

「まあ！董卓さんはこんな悪い人でしたの！」

「はあ、麗羽少しは考えなさい。」

「？」

「これは董卓さんを良く思わない連中の策略よ。しかも私達袁家と曹操さんが既に挙兵の準備をしているような書き方。私達の逃げ道を塞いできたはね。」

「逃げ道とはなんですか？」

「こんな書き方をされなければ檄文を黙殺することもできたでしょうが、この檄文のせいで黙殺なんかしたら袁家の信用は地に落ちる。これを書いたのは何処のどいつ！」

袁成様が怒ってるところ久しぶりに見たな。

「皇太子様達を誘拐したカン官達だそうです。今は何皇后の離宮に匿われているとか。」

「はあ、田豊、ソ授兵を召集して。麗羽と袁姫は召集した兵を率いて都に行きなさい。」

「宜しいのですの、御母様？」

「宜しいも宜しくないも袁家の為には此しかないの。袁家を守る為にはね……。もう死んでいるとは思っけどもし、こんなふざけた檄文を書いた奴が生きてたら袁家をなめた報いを受けさせてきなさい。」

「分かりましたわ！」

「畏まりました、継母様。」

こうなってしまった以上大々的にやるしかなく、キ州から治安維持に必要な兵以外の殆どを動員し、義勇兵の募集もかけた。

その日の飯食いたさに義勇兵に参加してきた奴が多かったが今は文醜さんに血を吐く程調練させているのでなんぼかましになってきた。

今回の反董卓連合に参加する有名所はまず曹操さん、幽州州牧劉虞、劉虞さんは異民族の対応が忙しいらしく、名代が来るそうだ。

南からは揚州を実行支配している孫堅さん。ケイ州州牧劉俵さん。袁術さん。

西から西涼部族連合盟主馬トウだ。

その他諸々の小勢力が参加するのでかなりの大所帯になる。

「袁姫様、準備が出来ましたよ。」

「ありがとうございます、顔良さん。義勇兵の方は何とかかなりそうですね。」

「はい、文ちゃんの話だと其なりに使えるって言ってましたよ。」

「麗羽姉上は何処に？」

「もう軍団の方に向かったみたいですよ。」

「じゃあ私達も行きましょうか。」

まあ私達もかなりの大所帯なんですけどね。

総大将に麗羽姉上、その補佐に私、軍師はソ授爺さんをお願いした。ソ授爺さんはこっち専門ですからね。

文醜さん、顔良さんは親衛隊として麗羽姉上に付いてもらい、張コウさんと高覽も将として一軍を率いてもらう。

将校はそんな感じ。動員兵力はキ州だけで集めるつもりがエン州や青州方面に展開している部隊まで動員され、三十万にまで膨れ上がった。汝南の本家ですら十万いくかないかだからこの兵力の異常さが分かるだろう。

「麗羽姉上。」

「あら、袁姫ちゃんに斗詩さん、やっと来ましたの!」

「はい、ですので出立の号令をお願い致します。」

「オーホッホッホ、袁家の精鋭の皆さん!華麗に!雄々しく進撃開始ですわ!」

兵達の雄叫びと共に遙か彼方の前衛が連合軍の集合地点に向けて動き始めた。

連合軍集合地点、

「袁紹殿はいったい何を為さっているのか！」

今日何回めか数えるのもうんざりする声が上がった。

「キ州を出たって知らせも来ましたし、もう何日かしたら来るんじゃないですかね。」

そして今日何回めかの張勳の回答が天幕の中に響く。

袁術はこのやり取りに飽きてしまい外で雪蓮と遊んでいる。

曹操は腕を組、黙ってこの無意味なやり取りを聞いている。

さつきから騒いでいるのは名も聞いたことの無い弱小勢力の奴等よ。不安であることを隠そうともしない雑魚が騒いでいる。どれ、少し黙らせましょうか。

「張勳殿、宜しいか？」

「ハイ、何ですか孫堅さん？」

凄じい嬉しいそうな顔をされた。張勳もいい加減このやり取りにうんざりしていたようだ。

「袁紹殿が来る前に出来ることがあるはずだ。取り敢えずこの軍議の進行役を決めたい。私は曹操殿か張勳殿が良いと思うのだが？」

「今のところこの中で一番兵を連れてきているのは袁術よ。ならその軍師の張勳がやるべきではなくて？」

メンドクサイ事を張勳に押し付けたな。張勳も苦笑している。

「私は構わない。各々方は？」

取り敢えず皆それで良いようだ。

「それではまず兵力の確認をしちやいましょうか。孫堅さんからお願いします。」

「呉群太守の孫堅だ。兵力は四万。兵糧も自分達の分は持つてきている。」

ざわめきが始まる。それもそうだろう、四万の兵力は一群の太守が持つには多すぎる。何故なら呉群にも治安維持等のために兵が残っているはずだからだ。

「順番からいったら次は儂じゃな。儂は劉俵、兵は二万じゃな。」

多分此処にいる全員が思った事だろう。

狸爺！

ケイ州は劉俵がその半生を捧げて治めてきた土地である。これといって取り上げるところもないが、只愚直に治めてきたケイ州は黄布の乱等でも大して荒れていない。

要するに十万の兵は出せるのだ。それをたった二万。やる気無いだろこの爺。

「次は私達ですかね。袁術軍です。兵力は七万ですねー。」

やはり名門の力は侮れない。兵の質で負けているとは思ってないけど、相手の兵も質が悪い訳ではない。

本当、頼りになる同盟相手だわ。

「次は私だな。幽州州牧劉虞の名代公孫贊、兵力は二万だ。あと義勇兵と一緒に来ているんだがこの軍議に出してやってももらえないか？」

「規模はどれくらいですか？」

「千五百だ。」

「千五百ですか…。」

「いいんじゃない、出してあげなさいよ。」

「孫堅さん？」

「それなりの人物なら軍議にいて困ることはないし、馬鹿なら叩き出せばいい。勿論、そんな奴を推挙した人も一緒にね。」

「わかった。それでもいいから軍議に出してやってくれ。」

「まあ、そこまで仰るなら構いませんよ。」

そして私達は義勇兵の隊長、劉備を軍議に加えて袁紹の到着を待つ事になった。

「報告致します！」

最早お茶会になっている軍議に慌ただしく袁術のところの兵が転がり込んできた。

「何事じゃ！騒がしいじよ…ウミユ、噛んだのじゃ。」

「袁紹様の軍が到着しました。」

「やっと着いたか。」

「規模はどの程度なんじゃ、伝令さん。」

「そ、それが。」

「どうかしたのか？」

「規模は十万を軽く超えています。」

「十万を軽く！」

「袁家の底力か…。」

「失礼する。こちらは檄文に応じた同志達の陣か！」

「そうだ、貴様わ」

「はっ、袁紹が妹君、袁姫が将、高覧！袁紹様の到着を報告に参った。」

「ご苦労様ですねー。高覧さん、本初様は何処ですか？」

「はっ、袁紹様は中軍に居られます。」

「軍の規模はどれくらいだ？」

「三十万です！」

軍議に参加した全ての将が度肝を抜かれた。

「オーホッホッホ、参陣が遅れてごめんあそばせ、しかし真打ちとは最後に登場するもの。そうは思いません、曹操さん？」

「どうせ髪型が纏まらなかったとかで出立が遅れたんじゃないの？」

「……………何のことですの。」

「はあ、貴女がないせいで軍議が全然進まないの。とっとと軍議に出なさい。」

「全く、忙しい人ですわね！」

「オーホッホッホ、それで軍議の議題は何ですか？」

「まあ、大まかに纏めるとこの連合軍の総大将を誰にするのか、各軍の配置といったところね。」

「たったそれだけですの？」

「貴女が来る前に大体のことは決めておいたの。」

「まあ！私を差し置いて…」

「それは違いますよ姉上。」

「袁姫ちゃん？」

「「何なんだあの鉄兜？」」

「今までに決まった議題は誰でも決められる議題。今の二つは姉上が居なければ決められない議題です！」

「そうですわね！」

「「単純だな！」」

「まあ、このような大規模な連合軍を華麗に指揮できる人物はそうそういません……。」

「貴女でいいわよ。」

「へ？」

満場一致で麗羽姉上が連合軍の盟主になった。

「さて、麗羽姉上に変わり軍議を仕切らせて頂きます袁姫ですよろしく。」

そして軍議が始まる。

「まず兵糧の管理は一括して我々袁紹軍で仕切らせて頂きたいのですが？」

「「異議なし。」」

「はい、続いて軍の配置ですが…。」

「是非我が軍に先鋒の栄誉を！」

「何を言う。我が軍にこそ先鋒を！」

雑魚共がまた騒ぎ出す。でも先鋒は貴様らなんかには渡さない！

「袁姫殿！」

「はい、孫堅さん。何でしょうか？」

「我が精鋭に先鋒を申し付けください！」

少し考えるふりをしている。演技が上手くなったわね。

「分かりました、先鋒は孫堅さんをお願いします。先鋒の援護部隊兼遊撃隊を劉備殿の義勇軍にお願いしたいのですが…出来ますか？」

「はっ、はい。朱里ちゃん、大丈夫だね。」

「はい、我が義勇軍は士気も高く黄布の乱から共に戦ってきた歴戦の猛者でしゅ…援護部隊の任必ずこなしてみせましゅ…はわわっ、に、二回も噛んじやいました！」

「しゅ、朱里ちゃん、落ち着いて！」

「はあ、分かりましたお願いします。」

「次に袁術さん。」

「何なのじゃ、袁姫姉上！」

「袁術さんの軍を中軍にします。よろしいですか？」

「どんとまかせてくりゃれ！」

「よっ、無駄に溢れるその自信、あと嚙んじやうところ！素敵です御嬢様！」

「わはははは、もっと誉めてたも七乃！」

「この大軍で都に向かうにはどうしてもシ水関や虎牢関などのある街道を進まなければなりません。しかし都への道はそれだけではありません。よって劉俵殿、公孫賛殿！」

「はっ。」

「なにかのう？」

「それぞれに他の小勢力を任せます。それを率いて他の関所を落としてほしいのです。地味な仕事ではありますが受けてもらえますか？」

「その任務必ずや成功させてみせましょう！」

「年寄には此くらいの仕事が丁度ええ。」

「それではこれにて軍議は……。」

「貴方わ？」

「劉備の所で天の御使いをやっている本郷一刀だ。」

ざわめきが起こる。董卓の悪い噂がたち始めた頃、それと一緒に流れた変な噂。

天の御使いが現れこの世を正してくれるって内容の噂だ。なんでも都の占い師が広めたらしい。

「おや、お会いできて光栄ですね。自称天の御使いさん。」

「貴様！ご主人様に…。」

「いいんだ、愛沙。別に俺がどうだって言いに来たんじゃない。兵糧を分けて欲しいんだ。」

「兵糧を？」

「ああ、今までは寄付で何とかしてきたんだがこの先街なんて殆どないだろ。だから少しでいいから兵糧を…。」

「無理ですわ。」

「姉上？」

「私たちにたかり屋に差し上げるほど兵糧に余裕はありませんの。それでは軍議を解散しますわ。」

他の将達も自分の陣に戻っていく。

「だ、そうです。我が軍からは提供出来ません。他を当たって下さい。」

後ろで私と同じイレギュラーさんが騒いでいるがそれを見無視して私は自分の天幕に戻る。

私と同じイレギュラーが現れたのだ。どうしたものか…。

劉備軍サイド

「そっちはどうだった、桃花？」

「ごめんなさい、ご主人様。駄目だった。」

「あ、愛沙。」

「申し訳ありません、ご主人様。こちらでも駄目でした。」

「そうか、困ったな。」

「あの袁紹の態度は何なのですか！我々をたかり屋等と！」

「お、落ち着いて、愛沙ちゃん。」

「しかし！」

「お、朱里達も帰っ

「どうだったのだ朱里！」

「すみません、駄目でした。」

「困ったな…。」

「袁紹に手痛くやられたんだって、○○コご主人様。」

「雷雛貴様なんだその口の聞き方わ！」

「落ち着いてって愛沙。」

「しかしご主人様！」

「雷雛は今まで何をしてたんだ？」

「私達と同じ弱小勢力への挨拶回り。無くて良い縁なんかないで
しよ。」

「そうだな。それで成果は？」

「まあまああってところね。私達の噂聞いたり袁紹とのやり取りを
聞いて同情的な所も多くて兵糧の提供も受けれたわ。」

「それじゃ…。」

「でも量にすれば劉備軍の一日分位。とてもじゃないけど都まで
もたないわ。」

嫌な沈黙が流れる。クソ、どうすればいいんだ！

「…あのう。」

「ん、どうした雛里？」

「袁姫お姉ちゃんを頼って見たらどうかな朱里ちゃん。」

「二人ともあの袁姫と知り合いなのか！」

「は、はひ。一緒に水鏡先生の元で勉強してました！」

「愛沙、雛里が驚いちゃってるぞ。」

「む、すまん。」

「じゃあ皆で袁姫さんをお願いしに行こうか！」

「ですが桃花様…。」

「どうしたの、朱里ちゃん？」

「袁姫さんは袁紹さんの意思を第一に考えます。袁紹さんが兵糧の提供を拒んだ以上…。」

「大丈夫、真剣にお話すればきつとわかってくれるよ！」

そして俺達は袁姫の天幕に向かった。

「袁姫殿はいるか。」

「どちら様でしょうか。」

「我が主、劉備が面会を求めている、取り次ぎを頼む。」

「少々お待ち下さい。」

それから少したち、俺達は袁姫の天幕に通された。

そして出て来たのはさっきの鉄兜を被った人ではなく、まさに傾国の美女がいた。

桃花と愛沙も確かに美人だけど袁姫は何かが違う。見とれてしまう。

「こほん、ご主人様。」

「ああすまん。袁姫、うちの軍師が話があるらしいんだ。」

「はあ、私も暇ではないんですが。」

「すまん。」

「あのう袁姫さん。」

「久しぶりね、諸葛亮さん。鳳統さん。」

「あれ！雷雛は？」

「バツ！雷雛やめろ！」

あろうことか雷雛は袁姫の後ろに回り込み、いきなり抱きつこうとしたが：避けられて顔面から床に突っ込んだ。

「ブフツ！」

「相変わらずですな徐庶さん。」

「ハアハア、コの対応も久しぶりね。袁姫。」
「それで、お話とわ？」

「兵糧の事なのですが。」

「無理です。」

「な、何故！」

「貴女わ？」

「関羽、劉備玄德の一の家臣にして劉備玄德の大望を支える者。」

「それで関羽さん、人の話を遮って何ですか？」

「何故無理なのか理由をお聞かせ願いたい。」

「理由は麗羽姉上がお話ししたと思いますが。」

「貴様もご主人様と桃花様をたかり屋と愚弄するか！」

「やめろ、愛沙！」

「そうだよ、落ち着いて愛沙ちゃん。」

「しかし！」

「我が袁紹軍は三十万、三十万の兵糧を用意することがどれ程大変か、お分かりになりませんか？」

「しかし、名門袁家の力をもってすれば！」

不味い、愛沙が空回りしている。朱里も雛里もハワ、アワしてるし、あれ？雷雛の目が陰しくなって…。

「名門の力を使って罪のない民から兵糧を搾り取れと。」

「そ、そんな事わ…。」

「そのような事を我が姉上にしろと！名門の名に泥を塗れとおっしゃるのか！」

「ッ。」

「この兵を養うためにキ州、ヘイ州の税は倍にしました。それでも民は我慢して税を納めてくれます。我々にそれ以上に税を取り立てろと！」

「ご、ごめんなさい袁姫さん。愛沙ちゃんもそんなつもりじゃなかったの。」

「何故他の人の軍下に入らなかったのですか？」

「え？」

「そうですね、例えば貴女のお知り合いの公村賛、あの人の客将として参加していればこんな事にはならなかったのでは？」

「そ、それわ…。」

「考えていなかったと？軍略、自軍の大まかな動きを決めるのは軍師の仕事ですが、それを採用するしないは貴女の仕事です。要するに今の事態を招いたのは貴女のせい。」

「貴様…！」

「黙れ！」

「ッ！」

「貴様が劉備の将だと言うなら口を出すな。私は今一軍を率いる将として劉備と話している。お前が口を挟んでいい時ではない。」

「くっ！」

「わ、私は…。」

「自分の志に共感してくれた者達の為には貴女の安い自尊心など其処らの野良犬に食わしてでも兵達を養うべきだったのでわ？」

「ち、違う。そんなんじゃない！白蓮ちゃんに迷惑をかけたくなかったから独立を考えたの。食糧は黄布賊の残党や山賊を倒したお礼とかで何とかしてたけど、どんどん数が増えて…。」

「その数を増やすのも計画の内だったのではないの、諸葛亮さん。」

「はい…。武功を重て少しずつ兵や武器を増やしていく予定だったんですが…。天の御使いの噂が想像以上に凄くて、兵もどんどん

集まっちゃって…。」

「詰めが甘いのは相変わらずですか、諸葛亮さん、鳳統さん。…徐庶さんは何してたんですか？」

「雑務一般、町人なんかとの交渉をね。でも、予想以上に兵が集まるのは本当よ袁姫。」

「そんな弁護聞きたくありません。はあ、貴女達には失望しました。まさかこの程度の人を主とするたわ。」

「ちょっと待ってくれ、確かに俺達の見通しは悪かったし計画も行き当たりばったりだった。でもだからって桃花の行動はそこまで否定されなければいけないのか！」

「ご主人様…。」

「では劉備玄德、貴女は何のために戦うのですか？」

「皆が笑顔で暮らせる国を作るため、でもそのためには戦うしかない時もある。だから私は戦う！少しでも多くの人を笑顔にする為に！」

「自分の兵もろくに養えない人が大きな事を吐きましたね。」

「ッ。」

「諸葛亮、鳳統、徐庶！」

「ハヒッ！」

「はいいい…。」

「……………」

「貴女達はこの人のどこに王の器を見たのですか？ 私には理解できませんね。そこら辺にいる現実の见えていない唯のお子ちゃまではないですか。あつ、優しいなんて理由は認めませんよ。そんな理由しか言えないのなら今すぐ出ていってくださいます？そして二度と私の前に顔を見せないでくださいね。」

「初めはご主人…天の御使いが舞い降りたのが桃花様だったって
いう理由もありました。」

「朱里ちゃん。」

「でも！何時ものように賊を退治した時、皆が引き上げた後賊の亡骸を埋めた所で桃花様は「貴方が生まれ変わった時、賊なんかにならないですむ国にしてみせるから」って言って泣いてたんです！付いてきてくれる兵の皆さん全員と仲良しで、誰かが戦いで死ぬと家族の様に泣いて、誰かに良いことがあるとその人以上に喜んで、どんな事も「大丈夫だよ」って受け止めてくれる。」

袁姫ただ無言で朱里の話を聞いている。

「なんて心が清らかなんだろう、慈愛に満ちているんだろう。桃花様がこの国を動かす立場になったらきつと皆が笑顔になれる。そう信じることが出来る人だから私は、桃花様を主と担ぎました！」

一気に言い切って肩で息をしている。

「二人も同じで良いのかしら？」

雛里も雷雛も黙って頷いた。

「そう。」

そう言うと袁姫は徐にこちらに歩いて来た。

「えっ？」

袁姫は三人を抱き締めた。

「雷は雷鳴を轟かす雲を見つけ、伏竜はかけ上る天を得た。鳳凰の雛も羽を揃えて飛び立ったのですね。」

「袁姫さん？」

「そこまで言うのなら大丈夫でしょう、最後まで頑張るんですよ。」

「

「袁姫お姉ちゃん！」

「劉備殿、御使いさん、失礼な事を言って申し訳ありません。」

「い、いえそんなことないですよ！」

「この通り、詰めが甘い子達ですがよろしくお願いします。」

「あ、ああ。」

「兵糧は私から姉上に言っておきます。今回だけだからね三人とも。」

劉備軍の三軍師が声をあげて泣いた。

そこには三人の泣きじゃくる少女を優しくあやしている天女が確かに居た。

第十三話（後書き）

これからも駄文をよろしくお願いいたします。

第十四話（前書き）

稚拙で駄文ですがよろしくお願いいたします。

第十四話

シ水関に着くまで董卓軍から抵抗らしい抵抗もなかった。

セオリー通りと言ったところか。敵はシ水関と虎牢関に戦力を集中しているとのことだ。

先鋒の孫堅軍がシ水関に着くということで孫堅さんを加えた軍議が開かれた。

「さて、明日には先鋒の孫堅さんと劉備さんがシ水関に着くわけですが、一番好ましい展開は敵を外に誘きだして叩く事でしょう。」

「しかし袁姫殿、敵も馬鹿ではあるまい、そう易々と外には出てこないでしょう。」

「はい、ですから関に籠られた時の為の秘策があります。なので孫堅殿、劉備殿！」

「はっ！」

「はい！」

「お二人はできるだけ敵を外に引きずり出してください。しかし無理をする必要はありません。」

「わかったわ。」

「わかりました!」

「曹操さん。」

「何かしら?」

「先鋒のお二人と中軍の袁術さんとの間に展開し、遊軍として動いてください。」

「わかったわ。」

「シ水関攻略はこの戦の最初の難所、しかし我々ならできると信じています。姉上、号令を御願います。」

「オーホッホッホ、シ水関なんて華麗に突破してみせますわ!皆さんの奮闘に期待していますわよ!」麗羽姉上の号令で軍議は終わ

り、ついにシ水関攻略戦が始まった。

シ水関

「華雄、分かっとなるやろな？」

「しつこいぞ霞！このシ水関に敵が来たら撃退すればいいのだから！」

「ドアホ！ちゃうわ、敵が来たら関に籠って防戦する！おのれは軍議で何を聞いてたんや！」

「ふざけるな！そんな戦い方出来るか！」

「この猪が！それじゃなにか？月が死んでもええっていうんか？」

「ッ！」

「うちらは恋とねねが敵の後方に出たのに合わせて敵の先鋒を叩くのが仕事やろ！言い換えれば恋達が回り込む前にわいらが抜かれたら月の所までがら空きってことや。」

「ムムムッ！」

「少しは辛抱しいや。うちかて籠城戦なんてやりとうない。でも敵はあまりにも強大や。袁紹一人でうちらの全兵力より多い兵を連れてきとるんや。やり方を選んでる場合とちゃうねん。」

「…すまん霞。」

「しかしあのべっぴんさんの言ったとうりになったな。」

「詠の言っていた袁姫の事か？」

「よう覚えとったな。」

「馬鹿にするな！あんな奴忘れたくても忘れられんわ！」

「酷い扱いやな。」

「しかし奴が殲姫だとは驚いたぞ。」

「せやなあ、あんな綺麗な顔して敵は皆殺し。勘弁してほしいわ、ほんまに。」

「ん、霞あれはなんだ？」

ヒューーン！

「なんや、華雄…」

ズドーン！！

「い、岩が降ってきたぞ！」

「あかん、投石か！華雄、恋の所に作戦中止って言ってきいや。」

「なぜ私なのだ！」

「アホ！岩が降ってくるなか恋の所に行ける奴なんかお前しかおらんやろ！」

「よし、私に任せておけ！」

（単純なやつचनाあ。）

「張遼様！」

「なんや！どないした！」

「敵が来ました！旗印は孫と劉！」

ヒューーン！

ズドーン！！

「お前はほかの兵に裏門に集合するように言っとき！虎牢関まで引くで！」

ヒューーン！

ズドーン！！

シ水関サイドエンド

「オーホッホッホ！ただ石を飛ばすだけで関を破れるなんてらくちんですわ！」

「麗羽様は岩を運ばないかららくちんなんですよ。」

「そうですねよ麗羽様。斗詩とイチヤイチヤさせてくださいよ。」

「ちょ、文ちゃん！」

「なら私が斗詩さんとイチヤイチヤしますわ！」

「そんな。あんまりですよ麗羽様。」

「あら、なら私とイチヤイチヤしますか、文醜さん？」

「アネキ！」

「袁姫さん！？」

「は、破廉恥ですわよ袁姫ちゃん！」

「さて、冗談はさておきそろそろ先鋒のお二人から連絡が来る…」

「報告致します！」

「はい、何ですか？」

「先鋒の孫堅様、劉備様より敵はシ水関を放棄し撤退中ゆえ投石の中止を願うとのことです！」

「わかりました、顔良さん。」

「わかりました。皆さ〜ん投石を中止してくださいーい！」

「さて、シ水関突破おめでとうございます、姉上。」

「ありがとう、袁姫ちゃん。さあ、この調子虎牢関も突破しますわよ！」

そして難関シ水関は呆気なく陥落し、敵は虎牢関に撤退して行った。

虎牢関サイド

「全く、えらい目にあったな恋。」

「そこは私ではないのか!？」

「……………?」

「あんた達全員無事？」

「なっ! 詠貴様が何故ここにいる!」

「仕方ないでしょ! シ水関がこんなに早く突破されるとは思っ
てなかったのよ。」

「うっ!」

「まあ、その辺にしといてや詠っち。」

「まあ、いいわ。今月も虎牢関に向かってるから。」

「なんやて！」

「何ですと！」

「な、なぜ董卓様が前線に出られるのだ！」

「これが最後だからよ！」

「え、詠。」

「次は外で敵を迎え撃つは！ここに籠っても、略陽に籠ってもまた投石で殺られるもの！あん達も噂ぐらい聞いたでしょ、相手はあの殲姫なのよ。都だろうが宮廷だろうがあいつは投石してくるは！そんなこと月は望まない。だから、悔しいけど、ボクは軍師なのにこんな策しか考えること出来なくて…ごめん。」

「詠…」

「そんな顔すんなや詠っち。うちらが来た奴全員倒したるから、なあ恋。」

「（コクリ）。」

「恋殿がいればどんな敵が来ても大丈夫なのです！」

「みんな…いいわ月が着き次第軍議を開くは！」

「おう、その調子や詠っち。」

全員が無理に明るく振る舞った。

だれも今までの穏やかで楽しかった生活が終わりを迎えようとしていることを肌で感じていた。ただそれを口にする勇気がなかっただけ。

その夜、董卓こと月が虎牢関に到着した。本陣から明かりが消える事はなく、ささやかな宴は夜遅くまで続いた。

「敵は外に陣を張っていると。」

「孫堅様、劉備様はこのまま敵に当たるのは不利、中軍及び本軍の到着を待つとの事です。」

「麗羽姉上自ら出陣なさる必要もないでしょう。私とあと…高覧、行くわよ。」

「はっ！」

「お待ちくださいなのです！」

「張コウさん？」

「私も連れて行ってほしいのです！」

「しかし…」

「よろしいのでは？袁姫様。」

「ソ授爺…」

「高覧、張コウ両將軍には経験を積ませるいい機会です。」

「わかりました。では姉上、行って参りますわ。」

「ええ、気を付けてね袁姫ちゃん。」

そして私は高覧、張コウの二人を従え十五万の兵を率いて先鋒に合流した。

「待ってましたよ袁姫様。」

「七乃、状況は？」

「敵の数は凡そ二十五万。董の旗印もありますので本当に全兵力を集めたってところですかね。」

「私はこの敵に正面からぶつかりたいと思っています。皆さんの意見は？」

「正面からぶつかりたいと思う理由を聞いて良いかしら、袁姫？」

「はい曹操さん、まず私達は先のシ水関を言わば奇策で落とししました。そろそろ野戦でも敵を破らないと我々の風評が悪くなります。」

「それだけではないのでしょうか？」

「はい、その事について今から話しますね。」

「袁姫様。よろしかったのですか、あのような危険な策を執って。」

「あら、軍議では賛成をもらったわよ？」

「しかし！」

「そんなに不安なら袁姫様と一緒に本陣にいればいいのです！先鋒は私がもらい受けるのです！」

「…何だと。」

「私がいれば何にも怖くなんかないのです！」

「…胸もないお前に何ができる。」

「む、胸は関係ないのです！」

「二人とも仲良くなさい。」

「報告致します！敵が前進を始めました。」

「わかりました。」

今の我々の陣形は曹操さんを右翼で張遼隊にぶつけ、華雄隊には孫堅さんと劉備さんをぶつける。

三人の仕事は敵部隊を撃破して敵の本隊の後ろにまわること。

次に真ん中を私達の部隊と袁術さんの部隊で担当する。

仕事は味方が敵の後方に回り込むまでの時間稼ぎだ。

まあ敵を挟撃して殲滅しましょうって作戦だ。

しかし、呂布なんかを相手にして大丈夫だろうか。

今になって心配になってきた。

「曹操軍、孫堅軍、劉備軍共に敵部隊と戦闘に入りました！」

「報告致します！呂布の部隊がいきなり進路を替え孫堅、劉備両軍の側面を攻撃…」

「報告致します！只今孫堅軍が華雄隊を劉備軍が呂布隊に対応中。劉備軍から援兵の要請が来ました！」

「袁術さんの陣に行き七乃に援兵を組織させなさい！」

「はっ！」

「さあ皆さん！ここが踏ん張りどころですよ！」

両翼に遅れること数十分、董卓軍、連合軍双方の主力が激突した。

「敵、ほぼ作戦区域内に入りました！」

「よろしい、張コウさんと高覧に伝令！手筈通り少しずつ後退せよ。」

「はっ！」

少したった後、張コウさんと高覧が少しずつ後退を始めた。

敵はそのまま陣の中にずるずると引き込まれていく。どうやら敵の主力にはろくな将が居ないらしい。

てっきり力駆が率いてくると思ったのですが…まあこの乱戦じゃあ軍師なんか危なくて居られませんよね。

ザシュ！

「ギャア」

また一人、切り殺す。

「グア！」

突き殺す。

「袁術さんの軍は大丈夫ですか？」

「はっ。問題ないとのことですよ！」

「ウガァ！」

風呂払う。

あちこちで我が銀装隊に撲殺されている敵の断末魔が聞こえる、そろそろかな。

「合図のドラを鳴らしなさい！反攻を開始しますよ！」

「「応！」」

連合軍の反攻が始まる。

「本隊から合図のドラが鳴りました華琳様！」

「そう、なら私達も始めましょうか。」

「はっ！全隊手筈通り敵を押し上げるわよ！」

「春蘭に張遼は任せたと伝えて。」

「さあ、曹操の兵に弱兵無しと天下に知らせめるのだ！」

「「「応！」」」

今までの鬱憤をはらすかのように曹操軍は猛攻を開始した。

「くっ！さすが飛將軍呂布。これほどの腕とは！」

「うー、愛沙あいつすごく強いのだ。」

「苦戦しているようだな。愛沙、鈴々。」

「「星！」」

「華雄隊は孫堅殿の軍が撃破した。御主人様と朱里か孫堅殿と共に董卓の本隊の後ろに回っている。残るは呂布だけだ！」

「なら助太刀頼む！」

「…面倒、三人で早く来る。」

「「なめるなー!」「」」

「くっ!これまでよ月。早く逃げるわよ。」

「で、でも皆が。」

「あいつらは殺しても死なないわよ!それより早く!」

「カ駆様!」

「なに?」

「て、敵が城壁に取り付きました早くお逃げください!」

「あんた達は各自降伏しなさい。殺されはしないでしよう。」

「…はっ。」

「行くわよ、月。」

ガサ！

「くっ、お逃げください！」

ヒュン！

「ぐはあ！」

「あら、ずいぶん可愛い娘達ね。」

張遼は曹操により捕らえられ、華雄も劉備軍に捕らえられた。しかし呂布だけが包囲を破り陳宮と共に逃走した。

本隊が外で壊滅したためか虎牢関内部での抵抗は予想以上に少なかった。

そんななか中庭の方が騒がしい。

「どこかしまりましたか孫堅殿？」

「いいところに来たは袁姫。この娘達を何とかしてちょうだい。」

呆れ半分、面白さ半分の苦笑をして孫堅さんが此方に向く。

「劉備さん、どういふことですか？」

「あ、あのね袁姫さん、孫堅さんがこの娘達を尋問しようって言うから…。」

カ駆さんも董卓さんも私と目が合い縮こまる。

「…」

「ッ…」

「先に見つけたのは孫堅殿なんですよね？」

「うん。」

「こういう場合先に見つけた人に権利があるんですが…。」

「そんなんっ！」

「まあ、かわいそうなんで勘弁してあげてくれませんか、孫堅殿。」

「

「あら、以外に優しいのね。」

「いい加減殲姫なんて呼び名は返上したいですから。」

カ駆と董卓は劉備軍に保護されることになり、虎牢関の戦いは終わりを告げた。

都も檄文のように荒廃などしていなかった。

檄文を出したカン官は袁家で肅清した。しかし困ったこともおきた。皇帝劉弁が我々が都に入って数日後に死んだのだ。

各將軍達は今回の乱の恩賞をもらい自領に戻って行った。

乱世が始まろうとしていた。

第十四話（後書き）

ぼちぼち官渡の戦いに入ろうと思います。

第十五話（前書き）

稚拙な駄文ですが宜しくお願いいたします。

第十五話

反董卓連合が解散した後、時代はさらに加速した。孫堅さんは完全な揚州制圧にのりだし、涼州部族連合盟主馬トウは擁州を制圧し長安を占拠した。

劉備さんは徐州の州牧に我々が任命させた。

理由は孫堅さん、曹操さんに挟まれる形の徐州に曹操さんの仲間ではない人を持って来たかったから。

曹操さんと一緒に孫堅さんを攻撃されても困るし、孫堅さんと同盟して孫家の河北への足掛かりにされても困る。

だからどの陣営にも距離のある劉備さんは適任でした。

次は長安まで侵出してきた馬トウと不可侵条約を結ぶ為に奔走した。

これがなかなか難航しました。やれ我々は漢の臣だの皇帝にのみ仕えるだの言って話が進まない、進まない。

まあ、そこま何とか折り合いをつけてきましたよ。彼方さんもこちらが漢帝国を私物化しようなんて思っていないと分かってくれたみたいですし。

えっ！違うのかって？

違いますよ。漢帝国あつての名門ですからねえ。

かといってカン官達みたいに露骨に権力にむさぼりついたら排除される。

だからこれから袁家は漢帝国の一部になるのだ。

今のところ考えられている計画は麗羽姉上を漢を継ぐ劉協、三國志でいう献帝の嫁に入れること。かなり歳の差があるが問題無いだろう。

麗羽姉上には最低でも子供を二人は生んでもらわないといけない。出来れば二人共男の子がいい。一人は私、もう一人は袁術さんの夫。私も麗羽姉上もこの時代では子を産むにはちと年を取りすぎているが：まあそこら辺は変に都合のいいこの世界なら何とかなるさ。

近親婚のように見えるが私は麗羽姉上とは異母姉妹、袁術さんにい

たつてわ血筋的にも遠く離れた本家の出だ、問題ないはず。てかこの程度の婚姻政策なんて平安時代や中世ヨーロッパではごく普通の事ですよ。

他の歴史のように外戚として専横を行ったとしても、その頃には漢帝国は普遍的なものになり、袁家の血は漢皇室の中に残り続ける。

そんな事を今、七乃と一緒に画策したりしてるんですね。

勿論対外政策も忘れてませんよ。

まあそんなこんなで馬トウさんととりあえず不可侵条約を結ぶ事に成功した。

ケイ州の劉俵とも不可侵条約を結んでいる。

あれ、それは孫堅への裏切りじゃないかって？

それは違いますよ。孫堅さんとの条約はあくまで不可侵、お互いにやることに口を出さないって事。その条件は北進しない事とケイ州攻略を黙認する事。

別に劉俵と不可侵条約を結んだって軍事的、物資的に援護する訳で
わないから何ら問題ない。

向こうからも抗議はないしね。

ま、後は幽州の劉虞さんと公孫賛さんを潰すだけで対曹操包囲網は
完成。

これから来る袁家の明るい未来を夢見ていた時期が私にもありまし
た。

そう、絶望今まさに袁家を呑み込もうとしていることに私は気づき
もしなかのです。

「！：袁逢様が亡くなられた！」

「はい…少し疲れたから早めに休むと言われて…朝になっても部

屋からお出にならないので呼びにいたら…。」

本家からの使者は泣きじゃくりながら報告してきた。

「今本家は誰が？」

「張勳様を取り仕切っております。」

「…袁術さんわ？」

「…心労が大きいようです。」

「麗羽姉上…」

「ええ、本来なら私が弔問に行くべきですが、私は今動けませんし…」

そう、今河北袁家は幽州攻略の最終段階に入っている。後は攻め込むだけ。

ここに来て慌ただしいのは、曹操さんに司州を制圧されたからだ。

司州は袁成様が州牧の任を解かれた後は当地者が居らず、朝廷の直轄領のような扱いをうけていた。

それを曹操さんが「都の陛下を御守りする。」を謳い文句に司州を制圧、献帝を自分の本拠地である陳留に連れていったのだ。

皇帝を半ば人質にとられ馬トウさんはあてに出来なくなかった。

だから計画を前倒しにし、公孫賛に適当な言いがかりをつけて幽州に軍を派遣しようとしていた矢先に袁逢様の死。

何かあからさま過ぎますよね。

「私が本家に行きますわ。麗羽姉上は幽州をお願いしますね。」

「…ええ。美羽さんには心を強く持つようにと伝えてくださいな。」

「はい。」

私は本家からの使者と共に寿春にむかい、麗羽姉上は顔良さん、文醜さん、張コウと郭図のおっさんを連れて幽州攻略にむかった。

地獄の始まりとも知らずに……………。

「七乃、大変だったわね。」

「いえ、美羽様に比べたら私なんか…」

七乃をそっと抱き締める。

「え、袁姫さん？」

「今ぐらい泣いてもいいのよ。私と貴女の仲でしょ。」

七乃が私の背中に手をまわし、顔を胸に埋めた。

「…少しだけ…少しだけお願いします…」

七乃は声も出さず私の着物を涙で濡らした。

「落ち着いた？」

「はい、失礼しました。」

目を赤く腫らしながらも少し、いつもの七乃に戻った。

「美羽さんは大丈夫？」

「泣き疲れて眠ってます。」

「そう、なら少しおしゃべりしましょうか。」

「はい、ちょうど私もしたいと思ってたんですよ。」

と言ったとたん、外の人の気配が消えた。影達に人払いをさせたようだ。

「袁逢様は暗殺？」

「分かりません。でもお倒れになる前日は元気でした。」

「なら誰が？」

「曹操さんでしょうか？」

「あの人なら正々堂々と決戦を挑んできますよ。」

「ですよね。じゃあ劉虞さん達ですかねえ？」

「幽州は完全に孤立させているわ。妙な動きがあればこっちが気づくわ。それに狙うなら袁逢様ではなく袁成様でしょうよ。」

「ならいったい誰が……。」

「孫堅さんか劉俵。」

「まさか！」

「孫堅さんが犯人の場合得する事が多いけど劉俵も持って行き方によっては…」

「劉俵さんですか？」

「孫家と袁家の仲違い。」

「!?!?」

「七乃、今すぐケイ州付近に展開している軍を呼び戻しなさい！私の読みが当たってあれば…」

七乃の顔が青ざめる。七乃も理解したようだ。

「わっ分かりました！袁姫さんはお嬢様をお願いします！」

孫堅と袁家の離間。最悪のシナリオは今動き出した。

揚州の州境

「いよいよね、祭。」

「そうじゃのう、堅殿。長いようで短かったですの。」

「悲願の揚州制覇を成し遂げ、今ケイ州攻略に出ようとしている。江賊をした頃が遙か昔に思えるわね。」

「ハッハッハ、何を仰る。あの頃は策殿、権殿、尚香殿も居られなかった。十分昔の話じゃよ。」

「そうね。江賊家業から足を洗い、官吏になろうと走り回って、雪蓮、蓮華、小蓮が産まれ、呉郡を治めるまでになり、袁姫に会った。」

「そういえば堅殿はえらく豊穰姫をかっておいででしたな。」

「ああ、祭は彼女に会った事がないのよね。」

「貴女が留守番をさせたのでしよう。」

「悪いことをしたわね。…初めて、彼女を見た時初めて膝をつきそうになったの。」

「なっ！」

「袁姫に言われたの、虎も飼い慣らしてしまえば体の大きな猫だと……。本当だった。この江東の虎が彼女の前では子猫の様に虚勢をはることにしか出来なかった。初めて器の違いを肌で感じたの。」

「それ程なのですか？」

「ええ、でもそれを感じさせたのは一瞬だけ。だから雪蓮も冥琳も気が付かなかったみたい。あの二人もまだまだね。」

「そう言ってやりますな。策殿も冥琳もこれから大きくなっていくでしょう。策殿は貴女の娘で冥琳は貴女と私が鍛えた娘なのですから。」

「彼女が居たから北進を簡単に諦めることが出来たわ。彼女の居る袁家なら河北をしっかりと治めてくれるだろうし、江東も任せられちゃったしね。」

「母様、祭の準備出来たわよ。」

「さて、蓮華、小蓮。」

「はい！」

「はいはい。」

「母と姉が居ない間の揚州を任せたわよ。」

「はい！お任せください！」

「シャオに任せてよね！」

「蓮華は相変わらず固いわね。」

「姉上もお気を付けて。」

「ふふっ、ありがとね蓮華。しっかりと母様の手綱を握っとくから、安心なさい。」

「それは逆じゃないの？」

「娘に先鋒を取られたってイジケル人に言われたくないわ。」

「はあ、大蓮様、雪蓮、そろそろ行きますよ。」

「冥琳まで…祭…娘達が反抗期だわ。」

「ハッハッハ、それぐらいが丁度良いでしょう。」

「はあ、全軍出発！」

「出発の号令まで言われたわ！」

そんな感じで孫家はケイ州攻略に乗り出した。

それが孫家の未来を大きく変える事件に繋がるとも知らずに。

ケイ州攻略は想像以上に上手く進んだ。

劉儀は抵抗はするものの、本格的なぶつかり合いはなかった。

「なんか拍子抜けね。」

「いや、むしろ相手の策だと見るべきだろ雪蓮。」

「えゝ策ってなによ、冥琳？」

「此方の補給線を引き伸ばしてその線を断つ。」

「その様ね。」

「大蓮様？」

「母様？」

「今劉俵軍がこの先で展開していると知らせが入ったわ。その数十万、更に別動隊四万が私達の補給線を断とうとする動きをしているそうよ。」

「ほう、劉俵もやっと重い腰を上げましたか。」

「十万、だいたいうちの倍。遣り甲斐があるわね！」

「そうよ。敵はこちらを策に嵌めたと思っている、でも江東の虎を捕まえるには脆すぎるわ。私を殺すには最低でもあの倍の兵は必要ね。そうでしょ、雪蓮。」

「ええ、孫家の軍を甘く見た報いを受けてもらっちゃいましょう！」

「冥琳、軍議を開くわよ！」

「はっ！」

孫家軍は慌ただしく戦闘の準備に取り掛かった。

「てっきりケイ州から逃げ出したのかと思ったわよ、劉俵。」

「フォッフォッフォッ、ただ攻め立てるだけが戦ではないぞ孫堅殿。」

「そう、全軍突撃！」

劉俵軍は少し戦闘を行うと後退しだした。

「冥琳、あの動きをどう見る？」

「伏兵でも居るのでしょうか。」

「数わ？」

「五千程、奴に大蓮様程の度胸があれば二万は伏せて置くでしょう。まあ、伏せているとばれている時点で伏兵の意味を成していませんが。」

「そう、どれくらいの兵が必要かしら冥琳？」

「千人もいれば十分かと。」

「そう、そっちはお願いね。」

「大蓮様？」

「私は劉俵に止めを刺してくるわ。」

「はあ、余り無茶しないでくださいね。」

「わかってるわよ。雪蓮じゃないのよ私わ。」

「（似たり寄ったりだと思うが）」

「何か言った、冥琳？」

「いえ、何も。」

「そう、本隊は私に続きなさい、劉俵に止めを刺すわよ！」

「我が隊は敵の伏兵を叩く！孫堅様に遅れをとるな！」

戦は一気に加速していく。

劉俵軍サイド

「劉俵様、敵は此方の策にまんまと嵌まりましたな。」

「若いもんは耐えることを知らんでいかん。伏兵に合図を送れ。」

伝令が走りドラが鳴る。そのとたん近くの林から怒号が飛ぶ。

「反応が早くて結構。」

「り、劉俵様！」

「何事じゃ！」

「伏兵が敵の別動隊に攻撃され瓦解しました！」

「なんじゃと！」

「劉俵様！」

「今度はなんじゃ！」

「敵の補給線を断ちに行った別動隊が敵に撃破されたとのことです

「！」

「……………」

「だ、誰か劉俵様をお運びしろ！撤退だ！」

劉俵軍はなすすべもなく崩壊した。

劉俵軍サイドエンド

「これでケイ州の半分は私達の支配下に入ったわね冥琳。」

「はい、しかしここからが大変かと。」

「そうね、でも若い人材も育ってきてるわ。蓮華に就けている陸遜と甘寧、呂蒙も良い感じらしいじゃない。」

「はい、穏は軍師としてかなりの才があります。思春はあと少し経験を積みめば自分を越えるだろうと祭殿が。亞沙は元々武将として育てていたのですが軍師としての才もなかなかなので今は軍師として教育しています。」

「あら、もう真名を交換してるのね。」

「はい、蓮華様はこの戦が終わったら三人を大蓮様に報告するつもりですよ。」

「そう、それは楽しみだわ。」

「母様へ。」

「あら、どうしたのよ雪蓮？」

「追撃が一段落したからその報告に来たの。捕虜と怪我人の対応

は祭がやってるわ。」

「はあ、めんどくさいこら祭に……。」「

ビュン！

グサ！

「え？」「

「大蓮様！」「

「貴様ー！」「

「グア！」「

「劉俵の残党がいるぞ！孫堅様を囲め！見張りは何をしていた！」「

「戦場で…討たれる覚悟はしてたけど…呆気ないものね。」「

「母様喋らないで！」

「医者だ、医者は何をしている！」

「周瑜様、残党がこんな物を…」

「袁家軍の矢だと！」

「じゃあ、袁家が母様を…」

「違…うわよ。雪…蓮。」

「母様？」

「これは劉俵の策略…。敵に…私の事がばれる前に揚州に退きなさい…ゴホッ、ゴホッ。」

「母様！」

「し、失礼します！」

やっと医者に来て治療を始めた。

「少しで…いいの、雪蓮と話をさせて。」

「…畏まりました。」

医者は泣きながら治療を続ける。

「雪蓮、これは劉俵の孫家と袁家に対する離間の計よ。貴女が後を継いだらまず袁姫の指示を仰ぎなさい。蓮華と小華を頼んだわよ。」

「分かったわ、母様。」

「冥琳、破天荒な娘だけど宜しくね。あと、一人で全てをやりうとしないこと。」

「…はい。」

「祭は、間に合わ…。」

「堅殿！」

「良かった祭、若い娘達を頼んだわ。」

「任されよ、若い娘達はしっかりと育ててみせましょう。」
「袁姫に…貴女と見た夢を成し遂げられずに残念だと伝えて。」

「はい。大蓮様。」

「ふう、言いたい事は全部言っちゃった。少し疲れたから…少し
…休むわ……………」

江東の虎と恐れられた孫堅は志し半ばで倒れた。歴史は加速する。

第十五話（後書き）

全然官渡の戦いに入らない……。。

第十六話（前書き）

なかなかうまくいかないものです。

第十六話

孫堅討死の報せは袁家に計り知れない衝撃を与えた。

「袁逢様の次は孫堅さん。劉俵さんを少し甘く見ていましたね。」

「

七乃からどす黒いオーラがにじみ出ている。

「孫家に動きは何かあった？」

「軍は孫策さんの頭領就任を認めているみたいですけど、服属して間もない豪族達が動き回っているみたいです。」

「七乃、合肥に要塞を作りなさい。」

「えっ、合肥に要塞なんか作って良いんですか？」

「今の孫家は信用に値しないわ。それに袁家に南方に兵を割くほどの余裕は無いわ。」

「分かりました。規模はどれくらいですか？」

「寿春並みの大きさは欲しいわね。」

「ええっ！そんなに大きいのをですか？」

「最悪揚州の支配者が変わることも念頭に動かなければ。それに合肥は劉備への抑えにもなるわ。」

「分かりました。私が直接指揮を執りますね。」

「お願い七乃、貴女は死なないでね。貴女が死ぬなんて私には耐えられないわ。」

張勳サイド

袁姫さんの心が少しずつ壊れていく。その音が聞こえるような気がします。

元々お優しい方でした。家族、というより袁一族を愛し、自分の周りにいる人達が笑顔でいる、それを幸せと感ずることの出来る、そんなお方なんです。

そんな人が薄汚い政治の世界に足を踏入れた。

耐えられるわけなかったんです。

他の貴族や豪族達との粗の探り合いは少しずつ袁姫さんの心を侵食していったんでしょう。

そんな中、孫堅さんと袁姫さんは出会いました。

どうしてか馬が会うみたいで話が弾んでいました。

後で話を聞いたところ歳上の女性に弱いらしいです。

無意識に母親を求めてしまうんでしょうね。孫堅さんは現に三女の母親ですし。

孫堅さんも袁姫さんが自分に何を求めているのか分かっていたみたいで袁姫さんと話す時は必ず大人の女性を演じてましたしね（笑）

だからこそ、孫堅さんの死は袁姫さんにとって衝撃的だったでしょう。袁逢様の死があったばかりなので尚更。

母親になってあげられる人をいきなり二人も失い、袁姫さんはかなり精神的に不安定になっています。

河北では袁成様に沢山の護衛を付けて半ば軟禁状態にしてであると田豊さんからの手紙に書いてありましたし。

何で田豊さんと手紙のやり取りをしているのですか？

河北と私達本家は関係の修復が進んできましたし、お互いの内情を報告し合うぐらいにはなったんですよ。

確かにまだ袁成様が居ます。まあ、袁成様しか居ないからこそここまで過剰な対応をするのでしょうが、いい傾向ではありませんね。袁姫さんは今事実上河北袁家の舵取りを一人で行っている。

別に周りの人が無能だとか言ってるんじゃないんですよ。

…やだなあ、本当ですよ（笑）

ただ、袁姫さんと同じ目線で話が出来る人が殆ど居ないってことです！

このままではいけない反感を買ってしまうかもしれません……。

張勳サイドエンド

七乃と仕事の話が終わらせた直後……

トタトタトタトタ……

「あっ。」

「起きちゃいましたか。」

「袁姫御姉しゃま！」

「あらあら、どうしました袁術さん？」

ギュー。

袁術さんが抱きついて…否、しがみついてきた。

「ひ、一人にしないで欲しいのじゃ！一緒に寝てくれると言ったのにグシュ…お、起きたら袁姫御姉しゃまも七乃も居なくて…」

「ごめんなさい、袁術さん。ちょっと七乃と仕事の話をしてただけなんですよ。」

袁術さんの涙を拭いてやりながら諭すように話す。

…七乃、袁術さんの泣き顔を見ながら悦に浸るの止めなさい。てかすんごい幸せそうな顔ね…

「フミユ、で、でも寂しいのじゃ！袁姫御姉様も七乃も仕事、仕事と中々一緒に居てくれないのじゃ！」

この歳で母親を失う、とても寂しいだろう。でも、私は言わなくてはいけない…七乃では言えないこの事……

「袁術さん。」

「な、なんじゃ、袁姫御姉様？」

「私は近く河北に帰ります。」

「！い、嫌じゃ！帰っては嫌じゃ御姉様！」

「袁術さん！」

「！」

「袁術さん、貴女はこれから袁家の人間にならなくてははいけません。」

「…妾は元から袁家の人なのじゃ。」

袁術さんがきよんとしている。

「袁術さんは袁術さんの役割を果たさなくてはいけないということとです。袁家の人間になるという事はそういうことなんです。」

「妾の役割かえ？」

「はい、袁術さんの役割はこの本家の頭領としてこの地をしっかりと統治する事です。」

「そんなの七乃に任せておけばいいのじゃ！」

このどや顔。思わず苦笑がでる。

「それでは袁術さんは自分の役割を果たせていない、そんな人を袁家の人間とは言いません。」

俯いちゃった。

「うう。ではどうすれば良いのじゃ？妾はどうすれば袁家の人間になれるのかえ？」

「今すぐお仕事をしろなんて言いません。ただ少し七乃の仕事を

見て、解らない事を質問してみてください。」

「それだけでいいのかえ？」

「まずはそこから始めましょう。次は字の読み書き、やることは沢山ありますが焦らずにやっていきましょう。」

「うむ！それくらいなら妾にも出来るぞ！これで妾も本当の袁家の人間じゃ！」

「よっ、その無駄に溢れ出る自信があつてこそその御姉様です！」

「ワハハハ、もっと褒めるのじゃ七乃！」

ふう、少し言い過ぎたと思ったが袁術さんは分かってくれたみたいだ。

袁術さんも袁家の人間ということだ。

後は私がこの歴史の流れを断ち切るだけ。

揚州建業

ダン！

「孫策殿、袁家の合肥に要塞を造る行為は明らかな我々への敵対行動ですぞ！」

「速やかに建設を止めさせなければ！」

「そして劉俵さんと袁家を同時に相手にするんですか？豪族の反乱を押さえるのに精一杯な現状で？」

陸遜の一言に強硬論を唱えていた武将達が押し黙る。

「穩、その辺にしといてあげて。」

「はい、雪蓮様。」

「貴方達の言いたいことも良くわかるわ。」

「孫策殿…」

「でも穩の言うようにそれをどうにも出来ないのが今の私達の現状。だから冥琳！」

「なんだ、雪蓮。」

「私母様の遺言を実行しようと思うの。」

「袁姫と話し合えというあれか？」

「そう、あれあれ。」

「それは危険です姉上！」

今まで黙っていた孫権が口を開いた。

「合肥に要塞を造っていることから袁家が我々孫家に友好的でない事は分かりきっています。そこに孫家の頭領たる姉上が自ら出向くなど危険過ぎます！」

「でも蓮華、会いに行っていきなり殺されたりはしないでしよう。」

「しかし！」

「蓮華様、袁家と一度話し合わなければいけないのも事実です。それに……」

「その書簡は何冥琳？」

「つい先程袁家から届いた手紙です。雪蓮、先に内容を確認させてもらったわ。」

「いいわよそんなの。で、内容わ？」

「合肥要塞に雪蓮自ら出向くようにだそうだ。」

「……、内容確かめてもいい？」

「ああ……」

「はあ、これが袁家の私に対する評価なのね。」

「ああ、その様ね。」

「姉上、袁家は何と？」

「孫堅の死に心から冥福を祈る。孫堅の後を孫策が継ごうが、妹の孫権が継ごうがどっちでもいいから早く報告しに来るようにだつて。」

「なっ！」

「ふざけるな！」

「何様のつもりなのだ奴らわ！」

「こんな暴挙を許してはなりません！」

「はあ、だからそれができたら苦労しないって話でしょ。」

「ぐっ。」

「おのれ…」

「でも、文句の一つぐらい言ってやらないと気がすまないの。だから袁家に行って来るわ。」

「危険ではないのでしょうか、姉上？」

「蓮華様、相手も頭領就任を報告に来た者を害したりして名を汚すような事はしないはずですよ。」

「冥琳…。」

「そっ、だから城の事を冥琳と蓮華、貴女に任せるわ。」

「はっ、大任を必ず果たしてみせます！」

「余り固くならないようにね。」

「少しは見習ったらどうだ雪蓮？」

「ブッ、冥琳の意地悪。」

会議は終了し、孫策は豪族の反乱を鎮圧していた祭と合流して一路合肥要塞を目指した。

「これはまたとんでもない要塞を作りましたな、袁家わ。のう策殿。」

「本当よね、それだけ私が袁姫に信用されてないってことね。」

「そう気を落とされるな、確かに孫家の頭領となって肥は浅いが策殿はしっかりと揚州を治めておる。現に反乱を起こしている豪族の殆どが元から劉俔と通じていた豪族ばかり。堅殿の時代からの豪族達は策殿に従っておる。」

「フフツ、ありがと祭。そうよね、ウジウジ考えるなんて私らしくないわ!」

「その勢じゃ!しかし袁姫とどう話すつもりですかの?」

「自分の想いをぶつけるだけよ。小細工がきく相手じゃないしね。」

合肥要塞の城門はすぐそこまで来ていた。

謁見の間は静寂に包まれていた。

痛いまでの静寂。自分の呼吸、鼓動の音が異常にうるさく聞こえる。

先に口を開いたのは…。

「孫家頭領就任おめでとうございます、孫策殿。」

何の感情もこもらない、何の関心もない声を放ったのは袁姫。

「ありがと、報告に來いって言うから報告に來たわよ。」

「そうですか、豪族の反乱が多発しているようですが？」

「それについては心配はいらんぞ、反乱を起こしている奴らは殆どが劉俣と通じていた豪族。堅殿の時代からの豪族は策殿を支持しておる。」

「そうですか…」

なんだ…

袁姫の様子がおかしいの。母様と一緒に会ったときはもっと生き生きしてた。

今の彼女はおかしい。何が彼女をこんなふうにしてしまったのか。

別に彼女と何かあるわけじゃないわ。むしろ美羽ちゃんの方がいい関係を築いていたわ。

でも……。あんなに辛そうにしている人を見て何とも思わないような薄情者じゃないわ！

「ねえ、袁姫。」

「何か？」

またあの目。感情の籠らない淀んだ目。

「何があったの？」

「…はい？」

「何が貴女をそんなに変えたのよ！」

「変わってなどいませんよ、私わ。」

「はぁ？ 十人いれば十人が変わったっていうわよ。ああ、美羽ちゃんには分からないように演技してるのかしら？」

「…何が言いたいんですか？」

袁姫の雰囲気が変わる。

濃厚な殺気。

貴女はそんな簡単に感情を表に出したりしなかった！

「何に苦しんでるの、何を…恐れているの？」

「……。」

「確かに私は母様に比べたら器が小さいかも知れない。でも、私はあの江東の虎の娘よ！必ず江東の地を手にしてみせる！貴女の同盟相手に相応しい勢力に孫家を育て上げて見せる！だから……お願いよ、そんな顔しないで……。」

らしくない事なんてわかってる。でも言わずにはいられないわよ。

あんな必死に母親を探す幼児みたいな目を見ちゃったら。

祭も袁姫も驚いたみたい。袁姫なんか俯いちゃったわ。

「……………です…」

「え？」

「私がもっと慎重に事を運んでいたら孫堅さんは死なずにすんだ…。」

「夢を、打ち明けたりしなければケイ州攻略にもっと時間をかけた…。」

「袁姫…？」

「沢山人を殺めておいて今さら気付いたんです、大切な人を失う哀しみに。」

袁姫の頬を涙が落ちる。

「私は！貴女から…妹さん達から…大切な人を奪ってしまった！」

「ちょ！袁姫それは違…」

「違わくない！孫堅さんは、他の同盟相手に不安を覚えて曹操さんとの決戦に踏み出せない私を！少しでも楽にさせようとケイ州

攻略を急いだ。」

「それは違うぞ袁姫殿。ケイ州攻略は孫家全体で何度も話し合い決めたことじゃ…」

「交州…」

「！」

「ケイ州と揚州の更に南にある交州を制圧すればケイ州を二方面から締め上げる事ができたはず。」

「そ、それは…」

「多分孫堅さんが周瑜さん辺りに口止めしていたんでしょう。」

「だから？」

「えっ？」

「だから何なのよ。」

「だから…私は…」

ギュッ

「!!!!？」

「馬鹿ね、貴女がそんなに背負い込むことないのよ。」

孫策さんに抱き締められた…

「確かに貴女を同盟相手に選んだから母様は短期間でケイ州を制圧する事にこだわったのかもしれない。でもね母様は後悔なんかしてないと思うの。」

「何で…」

「母様は貴女の事を本当に盟友だと思っていたわ。それに貴女の

事を何時も考えてた、娘の私が羨む位にね。」

袁姫が私に抱きつく力を強めた。

頑固な娘、声を押し殺す必要なんてないのに：

「母様の死を嘆いてくれるのは嬉しい。でもそれに貴女が変な責任を感じる必要はないの。」

「貴女はそれで納得できるのですか？」

「そりゃ納得できない事もあるわよ。でも、少しずつ受け入れていくわ。母様の死をね。」

それからしばらく袁姫は私の服を涙で濡らしたわ。

「お見苦しい所をお見せしました。」

「あら、泣いてる貴女可愛かったわよ？」

袁姫の顔が赤くなる。

「コホン、合肥要塞の事ですか？」

「そうそれ、その話を聞きに来たのよ。」

「あの要塞は揚州と徐州の押さえのための要塞です。」

「やっぱり。」

「曹操さんと決戦に挑む以上、後方に憂いを残すわけにはいかないのです。」

「まあ、ゴタゴタしてるのは私達だから、仕方ないか。」

「合肥は建業との交易の一大拠点にもなる予定です。」

「あゝ、難しい話は冥琳として。」

「フフツ、分かりました。」

「さあて、祭帰るわよ。」

「そうするか。」

「というわけでじゃねー袁姫。」

「孫策さん！」

「ん、なに？」

「今日はありがとう。」

「気にしないで。……すぐに貴女の隣に追い付くわ。待っててね。」

時の流れは止まらない。孫策が揚州に帰った直後、袁紹が幽州を制
 圧したとの報告が袁姫の元に届いた。

第十六話（後書き）

次は官渡の戦いの前哨戦になるはず…。時系列めちゃくちゃですがそこはオリジナル設定ということで勘弁してください。

第十七話（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

第十七話

どうも、袁姫です。なんかこの始まり久しぶりな気がします。

私只今キ州にて曹操さんとの決戦にむけての準備をしております。

今まで曹操さんを包囲してから決戦に持ち込む事に拘り過ぎていました。

大軍で押し潰します。戦争は数なんですよ、数。いくら惇ちゃんや夏侯淵さんが一騎当千だろうが万を超える兵を相手に出来るわけではない。

そうと決まれば話は早い。動員出来る限りの兵を動員すべく只今兵糧や武具、軍馬の調達に走り回っています。

今のところ動員出来る兵数は四十万程、たしか史実の官渡の戦いで袁紹軍の数が十万程なのだからこの異常な数がお分かりだろう。

しかしこれにもちゃんと理由がある。この世界の男女逆転だ。

この世界は女性が強い。歴史の英雄が殆ど女性ということからもお分かりだろう。

女性が強いということは女性も兵として徴兵出来るのだ。

まあこれをやってしまうと働き手がなくなってしまうので希望しない限り女性を兵として徴兵することはない。

しかし、流民等の中には身寄りのいない女性が結構居り、その中で兵になることを望む者は少なくなかった。

そんなこんなで袁家は莫大な兵力を保持する事が出来ている。

兵が多ければその分の武具も必要になる。軍事産業も絶好調だ。

本来なら有るだけで国家に負担を掛ける軍が経済の重要な位置にいる。おかしな話だ。

まあそんなことはともかく、幽州では我が軍の圧倒的な勝利で終わったそうだ。

劉虞さんは降伏し、公孫賛は僅な手勢を率いて何処かに離脱したそうだ。

多分劉備の所だろうさ。

あの残念な人の事はどうでもいいんですが幽州最高ですね！

劉虞さんがしっかりと治めていたお陰で異民族やらに荒らされていた割には土地はしっかりとしていた。後は寒さに強い作物の改良に成功すればもう安心だろう（このころの幽州はよく飢饉に襲われた。）

それになんといっても良い馬が手にはいる。これのお陰で袁家軍の機動力は格段に上がった。文醜さんが率いる突撃機動軍（笑）は十万の兵力の内の四万程を騎馬で編成出来る程に。

そのネーミングは何だって？

麗羽姉上や文醜さんに何かそれっぽい名前を着けてくれって言われたので私が着けました。

因みに重装備歩兵が中心の編成がされている顔良さんの部隊の名前は破軍である。

とにかくにも準備は整いつつある。後は各部隊の調練と兵糧の移送準備が出来れば侵攻するだけ。

……もうすぐ袁家の世が来る。

荀イクサイド

最悪よ。遂に袁家が華琳様を倒すために本腰を入れ始めた。

キ州には四十万程の兵が集められ今すぐにもこのエン州に侵攻可能な状態で待機しているそうよ。

それに比べて此方が集めれる兵は多く見積もっても二十万、袁家の半分程よ。周りに敵が居すぎるのよ！

…それなのに華琳様はとても嬉しそう。

「やっと、やっと私を見てくれるのね、袁姫。」

華琳様にこんな御言葉を言わせるなんて妬ましい！悔しい！羨ましい！
い！

コホン、とにかく華琳様はこの袁家の侵攻を正面から受けてたつもり。

主君がそう決めたのなら軍師はその決定に最高の献策をするのが仕事。確かに兵の数で圧倒的に負けているけど将や軍師の質では負けてないはず。

…ああ、そういえば新しく入った奴らの紹介をしてなかったわね。

軍師ではまず郭力、真名は稟。戦略よりも戦術が得意な軍師ね。あとよく華琳様の事を妄想して鼻血を出してるわね。

次は程イク。真名は風よ。頭に変な人形を乗せて何時も眠そうな顔をしている変な奴よ。でも時々私でも思い付かないような残忍な策略を献策したりしてくるのよ。風は謀略たんとって言った所かしら。

武将では楽進、李典、于禁、真名は凧、真桜、沙和。

元々義勇軍として賊と戦っていたところを秋蘭に認められ華琳様に紹介されそのまま武将として迎えられたの。

この三人は今は新兵の訓練を任せてるんだけど中々良い感じに訓練出来ているの。

将と軍師の質では負けてないけどやはり問題は兵の数ね。しかも私達は汝南の袁本家も相手にしなくちゃいけないし、どうすれば良いのよ！

サイドアウト

「桂花、どうしたのですか？」

「どうやったら華琳様に勝利を献上出来るか考えてるのよ。稟こ

そどうしたのよ？」

「私も同じ様なものです。やはり州境に砦を何個か築きその砦で袁家の本隊を足止めしその間に汝南を叩き、返す刀で本隊と当たるしか無いのではないのでしょうか？」

「私もそれは考えたわよ。でもそれじゃ兵が疲弊しきった状態で本隊に当たる事になるし、第一築いた砦が袁紹の本隊を足止め出来ると決まった訳ではないのよ？」

「しかし！汝南袁家が袁紹に合わせて北進するのは確実、これ以外の策など…」

「離間ですかね。」

「風？」

「袁術さんに北進されたくないなら出来ないようにしちやえば良いですよ。」

「具体的には誰を離反させるのよ？」

「ぐうぐ。」

「「寝るな!!」」

「おおっ!二人からのツツコミですか。」

「はあ、誰を離反させるのよ。」

「それはー…」

曹操軍玉座の間

「そう、其が貴女達が考えた袁家への対策なのね。」

華琳様のご機嫌は最悪のようだ。姉者も理由が解らずオロオロしている。アア、そんな所も可愛のだが、このままでは姉者が華琳様の逆鱗に触れてしまうかもしれん。どれ、助け船を出してやるか。

「どうしたのだ、姉者？」

「ああ秋蘭。風の言っていた離間とは仲間同士の仲を悪くする策だよな？」

「簡単に言ってしまうばそういう事だな。しかしよく離間の事を知っていたな姉者。」

「ああ！この前季衣と一緒に稟に教えてもらったからな！」

「ほう、稟とは変わった相手に教えてもらったのだな。」

「ああ！あの時はって違う！離間の話だ離間の！」

「すまん、すまん。で、離間がどうしたのだ？」

「袁紹と誰を離間させるのだ？同じ一族なのだから袁術は無理だろう？」

おっ、桂花が口を開くぞ。

「あんた本当に馬鹿ね。」

「なんだとう！」

「袁家には沢山の同盟相手が居るでしょう。」

「馬トウは領地を接していないし孫策に対しては合肥要塞が有るではないか！」

「劉俣がまだ居るわよ。」

「華琳様：劉俣の軍は質が良いとは言えません。袁家軍に対抗できるとは思えないのですが？」

「それでも背中を襲わせれば…」

「ッ！桂花貴様ら華琳様にその様な卑怯な策を献策したのか！」

「馬鹿ね、二方面作戦は袁家が先に採った策よ。」

「そんなものの片方を潰した後にもう片方を潰してしまえば良いではないか！」

「片方を潰している間に出来る時間を見逃すほど袁姫は馬鹿じゃないわよ！」

「二人とも止めなさい。」

「「華琳様？」」

「風、劉俵への離間は貴女に任せるわよ。出来るわね？」

「はい、任されましたですよ。」

「華琳様！」

「これは決定よ！」

「ッ！」

「袁姫、貴女は最後まで私を見てくれないのね。」

華琳様は言葉に出している事に気づいていないのだろうか？

華琳様は俯いたまま独り言を続ける。

「私を見てもくれないなら…」

顔を御上げになった時、その瞳に映っていたものは…

「私しか見れないようにしてあげる…」

憎悪だった。

準備は整いました。見てください、業の街の郊外を埋め尽くさんばかりの我が袁家の精鋭！

時は満ちた、曹操さんを倒しこの漢帝国を再び蘇らせる。

麗羽姉上が望む天下泰平を私が作ってみせる。だから曹操さん…ここで消えてください。

「いや、ここまで兵が居ると壮観ですねー。」

「そうだねえ文ちゃん。」

「見てください猪々子様！斗詩様！彼処に居るのは私の部隊なのですよ！」

「見えてるって、張コウお前の部隊はアタイの部隊の隣だろ（笑）」

「そっ、そうでしたです。」

「袁姫様、いかがなさいましたか？」

「何でもないわ高覧それよりも皆、もうすぐ麗羽姉上の号令が…」

「ほっ報告いたしますっ！」

「何事か！」

「劉俵離反！汝南本家が襲われ北進の為に集結中の袁術軍十五万は敗走との事！」

「なんだと！」

「え、袁術様はどうされた！」

「詳しい事は解りませぬが汝南に立て籠る勢力があるということから汝南に戻られたのではないかと…後、紀霊將軍が寿春にて曹操軍と交戦中と事です！」

「曹操軍だと！」

「離間の計をはめられたか！」

「皆さん！」

「麗羽様…」

「早急に対策をたてますわよ！」

「はっ！」

…どうしてこんなことになった…

孫策サイド

「なっ！曹操軍が寿春を攻撃しているだど！」

「はっ、それに合わせて劉俣軍が汝南を攻撃、袁術殿は苦戦中との事です！」

「曹操の計略か！」

「姉様、いかがなさいますか？」

「美羽ちゃんを助けに行くわよ。」

「しかし、それでは揚州が手薄になります！」

「でも私達に袁家を裏切るという選択肢はありません蓮華様。」

「べ、別に袁家を裏切ると言っているのではない！」

「もう冥琳、余り蓮華をからかわないであげて。」

「何を言っているの雪蓮。蓮華様には王としてもっと多くの事を学んでいただかなければならないのよ。」

ざわめきがおこる。

「なっ、姉様を差し置いて私が…しかも王なんて！」

「大っきく出たわね冥琳。でも何で私を抜かすのよ！」

「王になるのか？政務は今まで以上に大変だぞ。」

「蓮華、頑張ってねー！」

「姉様！」

「さて、我々が袁家を裏切れない理由ですが…」

「流すのねこの話、分かっているわよそんなこと。豊穰姫でしょ。」

「

「そうです、蓮華様。彼女がこの地に与えた影響は大きすぎる。

確かに彼女の働きで孫家は確固たる財政基盤を得る事が出来ました。
この地を治めている孫家と変わらない信望を民から得る、という対
価と引き換えに。」

「……」

「城下や他の街で民はこう言っています「今の孫家があるのは豊
穰姫のおかげだと…」」

「そんな馬鹿な！この地は母様と姉様達が戦って勝ち取り冥琳達文官が走り回って民政を建て直したのではないか！それを一回か二回援助してきた相手のおかげだ等と！」

「民とはそういうものなのですよ蓮華様。それに豪族や江賊の対応に追われ民への対応が遅れていたのも事実です。」

「しかし！」

「はい！この話はここで終わり！今は袁家への対応を話し合う時間よ。」

「「！！！！」」

「何よその反応。」

「姉様がまともな事を…」

「何か拾い食いでもしたのか雪蓮？」

「策殿、熱があるなら早く言いなされ、誰かー！医者を呼んでま
いれ！」

「何なのよその反応ー！」

それから数分後、寿春にむけて孫策が直率する二万の兵が派遣されることが決定された。

寿春サイド

「紀霊將軍、曹操軍の数は五万前後、旗印は楽、李。楽進と李典と思われます！」

「汝南に集結中の本隊の情報は何かないのか！」

「今のところ…」

「報告いたしますっ！」

「何だ！」

「汝南に集結中の本隊は壊滅！袁術様、張勳様は居城にて兵を纏めておられますが劉表軍の猛攻により苦戦中との事です！」

「將軍！今すぐ救援に向かわなければ！」

「馬鹿者！こちらの倍の兵を相手に打って出るなど出来るか！」

「しかし！」

「七乃なら何とか兵を纏めて包囲を破り寿春まで落ち延びてくるはず、我々の使命は曹操軍をこの寿春に引き付けて汝南への圧力を少しでもなくし、美羽様達が此方へ脱出しやすくすること。」

「それに…」

「それに？」

「袁紹様達が必ず救援に来てくださるはずだ。」

「そっ、そうだ！袁紹様達が来てくださるはずだ！」

「それまで持ちこたえるぞ！」

何とか士気の低下は避けれたか…

美羽様、七乃、どうか御無事で…

汝南サイド

「なぜ劉俵が妾達を攻撃してくるのじゃ！」

頭からプスンプスンと湯気を出しながら美羽様が怒っている。

何時もならこの可愛いお嬢様の顔を見ているのですが、流石にその余裕は無いですね。

「兵はどのくらい集まってきましたか？」

「はっ、何とか五万程になりました。」

「そうですか。」

しかし、困りましたね。籠城戦は本来増援が来るからこそ採る作戦、増援の見込みが無い今、余りおすすめる作戦じゃないですね。

やっぱり……

「寿春の紀霊さんに合流しましょう。」

「可能でしょうか？」

「劉俵さんは先の孫堅さんとの戦いの傷が癒えていないはずです。やるなら今しかありません。」

「はっ、準備を始めます。」

「のう、七乃。」

「はい、何ですかお嬢様？」

「これからどうするのかえ？」

そこに少しの不安と恐怖を滲ませたお嬢様の顔がある。

大丈夫ですよお嬢様、この七乃が必ず：

「そうですね、まず紀霊さんと合流して袁姫さんの所に行こう
と思っってますよ。」

「むう、ならこの汝南はどうするのじゃ？」

「放棄するしかないかと。」

「バカ者！」

「お嬢様？」

「名門に撤退の二文字は無いのじゃ！最後までここで…」

お嬢様、ご立派になられて…でも

ガシッ！

「ふみゆ？」

「用意は出来ましたか？」

「はっ、滞りなく！」

「お嬢様。」

「何じゃ。」

「ご立派になられて七乃は嬉しいです。ですが今は逃げますよ――！」

「ふみゃー！」

「ちょ、張勳様――！」

後に「袁術の大逃避行」で知られるこの撤退戦は五万の兵を殆ど失わずに寿春に撤退を成功させた。

「そう…ですか。」

場に安堵の雰囲気の流れる。袁術さんは無事に寿春に撤退したとの事だ。しかも孫策さんが増援を率いて来てくれたとの事だ。

「一時はどうなるかと思いましたが、美羽さんは何とかなりそうですね。」

「しかし、戦の時を逃してしまいましたな。」

「美羽さんが無事なら戦の時ぐらいたくくだけでも待ちますわよ。」

「麗羽様……」

一同が涙した。ソ授爺、田豊爺、郭図のおっさん、審配さん等々、麗羽姉上を知る皆が泣いた。

まさか姉上からあのような言葉を聞くなんて…。

「ううう、麗羽様、よくぞ申されました。」

「よくぞ判断されましたじゃ。」

「キャー、流石です麗羽様！」

「姉上。」

「何かしら、袁姫ちゃん？」

「今すぐ出兵しましょう。」

「なっなんですとー！」

「理由を…聞いてもいいかしら？」

「もう、戻れないのです。」

「？」

「汝南という基盤を失った袁術さんは次の曹操さんからの攻撃に耐えられないでしょう。」

「「「！」」」

「多分曹操さんはそこまで考えて劉俵を離間させたのでしよう。

我々が戦の時ではないと動かなければ袁術さん、そして劉備を倒す。

」

「そんな……。」

「基盤を失い兵も失った袁術さんは曹操さんからの攻撃に耐えられません。劉備の徐州は黄布の乱で荒廃し満足に兵を養えないでしょうから曹操さんの敵ではありません。」

「……………」

「我々は一族を失うばかりか曹操さ…いや曹操に領土拡大の機械を与える事になってしまふのです！」

「どうすればいいんですの！」

「前に進むしかありません。」

「前に…。分かりました袁姫ちゃん指示をお願いします。」

「はっ！まず郭図！青州を五万の兵で何とかしなさい。」

「本気っすか！」

「それ以外の兵は本隊に合流させなさい。」

「また無茶な事を仰る。」

「田豊さんはヘイ州と幽州をお願いします。」

「あい分かりました。」

「審配さんはキ州を頼みましたよ。」

「麗羽様のために任されました。」

「各州からの兵は白馬で本隊と合流します。以上です、姉上。」

「さあ皆さん、ここが正念場でしてよ！華琳さんを倒し、この混乱した世の中を泰平にしますわよ！」

時は確かに動き始めた。

第十七話（後書き）

死亡フラグ…

十八話（前書き）

駄文ですがお願いいたします。

十八話

白馬

結局我々袁紹軍は六十万にまで膨れ上がった。各地から守備兵を削ってまで兵を徴兵した結果だ。

兵糧も進軍する進路も問題ない。兵糧はこの規模の兵が三年は満足に食べていける量があるし、街道や途中の河川を渡る橋も曹操に呼ばれた時に整備してある。

「報告いたします！文醜様及び突撃機動軍、徒河を終了しました！」

「すぐに張コウの部隊に徒河を始めさせなさい。」

「はっ！」

曹操は白馬に建築した砦に本隊を置こうとしているらしい。徹底抗戦の構えだ。

「袁姫殿。」

「ソ授命？」

「敵側が動くなら今でしような。」

「曹操は動きませんわよ。」

「なぜ、そう思われるのか。」

「曹操は私しか見ていないからです。」

「?」

「私と知を競い、私と武を競いたい。あの人はいつも私しか見ない、麗羽姉上が袁家の頭領なのに。」

袁姫殿が苛ついている？

「あの人が覇を競うべき相手は麗羽姉上であるはずなのに、あの人は私ばかり見る。袁家の一将に過ぎない私ばかり。」

「曹操殿程の相手にそれほどまでに認められる、誇っても良い事

ではないのですかな？」

「麗羽姉上を蔑ろにするのが気に入らないんですよ。」

「……。」

「…軍議に行きましようか。」

「だ・か・ら…」

軍議は白熱した。兵糧を徒河させて保管すべきとする文醜と張コウに対し顔良と高覧が兵糧は徒河させるべきではないと反論している。

「いちいち飯運ぶのに橋を渡んなきゃいけないなんてめんどいだろ！」

「文ちゃん、兵糧を前線の近くなかに持って行ったら危ないよ！このまま曹操さんに圧力をかけながら南下した方が安全だって！」

「何の為にアタイと張コウの部隊に徒河させたのさ！アネキの所の工兵を貸してもらえればあんな砦すぐに落とせるって！」

「曹操さんが本隊を連れてこっちに向かってるって間者の人が報告したの聞いてなかったの文ちゃん！攻城戦は曹操さんが砦についてからで十分だよ！」

「うゝ！」

「むゝ！」

「ソ授さん、貴方はどう思いました？」

「いささか論題から外れましたが兵糧は徒河させぬ方がよろしいかと。」

「なっ！」

「うんうん！」

「どうしてですか？」

「先程顔良殿が言ったように今の我々の最大の弱点は兵糧です。そして曹操もそれは分かっているはず。」

「なら兵糧は今のままで良いんですね！」

「そうとも限らないのです。」

「何故ですか？」

「例えば曹操が自領深くに我々を引き込む策を採った場合、顔良殿の策を採ると補給線が長くなりすぎるのです。敵を撃ち破った後の事を考えるならば文醜殿の策の方が効率的です。」

「要するに、どちらも良いところと悪いところがある、という事ですわね。」

「はっ。そのとおりであります。」

「どうする？」

確かにどちらを採用してもかまわない。

しかし相手はあの曹操だ。

どうすればいい…

「私に妙案がありましたよ！」

「姫？」

「麗羽様？」

「妙案とはなんですかの？」

「姉上？」

「部隊を二つ分ければ良いんですわよ！」

「麗羽様、兵力の分散は避けるべきかと…」

「姉上、何故そう考えられたので？」

「確かに兵力の分散は避けるべき事ですわね。ですが猪々子さんと斗詩さんに袁姫ちゃんを合わせれば数は曹操さんと同等以上。簡単にはやられないはず。曹操さんがソ授さんの言うように私達を引き込もうと言うなら合流してから侵攻すればいいだけ。砦に籠るなら曹操さんが砦に着き次第私達が徒河すればいいんですわよ。基本的に曹操さんには全兵力で当たります。倍以上の兵力を前に別動隊を組織するほど曹操さんに余裕は無いのではなくて？それでも兵糧が心配なら先鋒に必要な分の兵糧を持たせてそれ以外をこちらで管理すればいいだけでしょう？」

何ですと！

麗羽姉上が…

（パクパク）

「だから、当分は必要な分の兵糧は前線の近くに保管して、それ以外は徒河させないという方向で行きますわよ。」

曹操、麗羽姉上は貴女が私しか見ていない内にこんなに大きく成長していましたよ。

曹操軍サイド

「華琳様、凧と真桜は寿春から撤退中との事です。被害はほぼ無いそうです。」

「そう、砦の方はどうなっているかしら？」

「霞と稟の報告では今のところ…」

「ほっ、報告致します！」

「今は軍議中だぞ！何事か！」

「袁紹軍が侵攻を開始！張遼將軍と郭汜様は第一の砦を放棄、第五砦まで後退するとの事です！」

「敵の数は！」

「先遣隊は文醜、顔良、袁姫に率いられた二十五万！袁紹は徒河せず！」

「砦の守備兵は一から五まで合わせて二万、後退の判断は間違いないか。」

「早く霞達に合流してやらなければ！」

「春蘭、季衣、五万の兵を率いて砦の霞と稟に合流しなさい。」

「！」

「華琳様、今すぐ全軍を動くべきではないのですか？」

「策が今始まったところなの、全軍を動かすのはまだ先よ。」

「桂花、姉者と季衣に死に行けと言うのか！」

「落ち着きなさい、秋蘭。」

「華琳様？」

「言っただけよ、策だと。確かに僅な兵力で圧倒的な敵を相手にさせることになるわね。でも皆で敵を防がなければ策は成就しない。そしてこの大任を成すことが出来るのは春蘭と季衣しかないから私は命令したの。」

「……………」

「秋蘭、心配するな。華琳様が私をここまで信頼してくださっているのだ。武人としてこれ以上の誉れはないではないか！」

「ボクなら大丈夫ですよ、秋蘭様！春蘭様や霞さん、稟さんもいるんですから！」

「それで華琳様、我々はどれ程持ちこたえれば良いのですか？」

「桂花。」

「はい、まず最低で七日よ。欲を言えば十四日は欲しいわね。」

「任せておけ！」

その翌日、春蘭を大将とした五万の兵が戦場に出撃した。

「桂花、風から連絡はあった？」

「順調との事です。」

「フフッ、もうすぐよ袁姫…」

「…華琳様、一つお聞きしても宜しいですか？」

「何かしら？」

「袁姫が華琳様を見ていないとはどういう事なのでしょう？」

ううゝ、一気に華琳様の御機嫌が悪くなったわね。

「…袁姫の瞳には麗羽しか映ってないのよ。まあ、袁成も含まれるんでしょうけど麗羽には及ばないでしょうね。」

「……。」

「自分の周りの麗羽の家臣達にも一見心を開いているようで本当の袁姫の心、大切な一線を踏み越えさせていない。なぜなら彼女の心は麗羽の物だから。」

それは家族愛と呼ぶには歪すぎる。

「麗羽の友人でしかない私なんかそこらの雑草程度にしか認識されていないんでしょう。」

「そんな!」

「敵勢力として無視できなくなっても袁姫は私を見てくれなかった。麗羽しか見ない。どんな形でもいい、袁姫に私を認識して欲しかった。相手にもされないでいるとね、彼女への思いがどんどんと大きくなっていくの。彼女の心を、体をどんなことをしても私の物にしてみせるって。」

華琳様……。

「だから彼女の大切な物を傷つけたの。」

「袁術ですか。」

「ええ、思った通り袁姫は今私を見てくれている。」

華琳様の笑顔が咲き誇る。

華琳様が歪んでいく。

「幻滅したかしら、桂花？」

「まさか！私にそのような心の内をお聞かせくださるなんてこの桂花、身に余る光栄です！」

某所：

「程イク様、準備は整いました。」

「分かりました。壊す準備もお願いしますね。」

「はっ！」

華琳様の負の感情が袁姫さんを呑み込むのでしょうか？それとも袁姫さんはそれすらも跳ね返すのでしょうか？見当もつかないですね。

揚州

「袁姫が遂に動いたか。」

「おもいつきり数で押しまくる気よね。」

姉様が苦笑しながらぼやいている。

確かに今回の袁家が動員した兵力は凄すぎる。汝南の袁術が曹操に嵌められてからその数は更に増えた。袁紹も袁姫も今回の事で曹操を叩き潰すつもりなのだろう。

しかし、私は袁家が恐ろしくてたまらない。姉様のように袁家、袁姫を信頼することができない。

あれだけ圧倒的な力を持ちながら御母様が亡くなり没落しかけていた私達を何故切り捨てないのか？曹操を倒したらそのまま揚州に攻め込んで来ないのか？思考が泥沼に飲み込まれていく…

「大丈夫よ、蓮華。」

「！」

「袁姫は大丈夫よ。私達を裏切ったりしないわよ。」

「なっ、何故その様に信頼できるのですか！」

「うーん、堪かしらね」

「姉様！」

「心配し過ぎよ、それに私の堪が外れた事なんか無いでしょ？」

その姉様の言葉で、堂々巡りをしていた私の気持ち少し軽くなったような気がした。

「今度…袁姫と話をすることは出来るでしょうか？」

「曹操と戦いが終われば大丈夫じゃない？」

「雪蓮、少しは相手の予定も考えろ。」

袁姫と会うのがとても待ち遠しかった…

敵は五つある内の四つの砦を放棄していた。あの見事な撤退ぶり、敵将は誰だ？

「報告致します！最後の砦に五万程の増援が到着したもよう！それと砦の旗は張、夏、許であります！」

「随分豪華な面子っすねアネキ。」

「攻めにも守りにも柔軟に動けるいい編成です。」

「袁姫様、どうしますか？」

「今私の部隊に攻城戦の用意をさせてます。文醜さん、騎兵で砦の回りを走り回ってください。」

「あいよ！…なんでそんな事するんですか？」

「騎兵を怠けさせないためと挑発ですよ。」

「挑発？」

「自分の周りをハエが飛んでいたら鬱陶しいですよね。」

そこまで言うとな彼女はイタズラを思い付いた子供のような笑顔を見せてきた。

「アネキも人が悪いなあ」

「何とでも、無理はしないで下さいね。」

「あいよ！分かってるって！」

「次に顔良さん、貴女には砦の前面に展開、私の部隊に敵を近付けさせないで下さい。」

「はい！」

「次に張コウ！」

「はいなのです！」

「貴女には私の部隊と一緒に攻城兵器の運用をしてもらいます。」

「はいなのです！」

「敵に昼夜問わず攻撃を仕掛けます、いざという時は予備兵力としても動いてもらうのでそのつもりで。」

曹操と袁紹の決戦の第一ラウンドが始まった。

砦サイド

地獄、袁姬達が攻撃を開始したとたんこの砦は地獄に変わった。

降り続く火矢、砦の近くを我が物顔で駆け回る騎兵の地鳴り、包囲してる兵からの咆哮。

敵の行動全てが兵を疲弊させた。

この状態で十四日も耐えろとは洒落にならないで華琳！

「打って出るべきだ！」

惇ちゃんの我慢もそろそろ限界みたいやな。

「なりません、春蘭殿。」

「何故だ稟！」

「お分かりになりませか！敵は我々を誘っているのですよ！」

「攻撃してるのにぼく達を誘ってるんですか？」

「そうです、投石をしてこないのも補給線を絶とうとしてこないのも全てが誘いなのです。」

「ウチらを外に引きずり出すためか、稟ちゃん？」

「稟ちゃん…いいえ違います。」

「なら誰を誘っているのだ！」

そう怒るなや惇ちゃん。…あの猪は今何をしとるんやろな…

「華琳様です。」

「！」

「まあ、騎兵は我々を引きずり出すためのものですがそれ以外は全てが華琳様への挑発ですよ。」

「どういう事や？」

「投石をせずに我々を生殺しにしているのは華琳様に本隊を率いて我々を救援させるため。敵の狙いは華琳様との決戦。我々は華琳様を釣るための餌と言ったところです。」

「おのれえ！」

「しかし、どうするんや？兵はそろそろ限界やで。」

「それなら大丈夫です。」

「「「？」」」

「今華琳様からこちらに向かってしていると連絡が来ました。」

「おお！ならば！」

「はい、策は成功し、反撃の時は近いという事です。」

「曹操が遂に動きましたか。」

「どうしますか？」

「曹操が砦に着くまで攻撃は続けてください。あと麗羽姉上には少し様子を見るために渡河は待たれよと。」

「分かりました。」

数日後、曹操が砦に到着した。

「よく砦を守りきってくれたわね。霞、稟、それに春蘭に季布も。」

「」「」「はっ！」「」

「さあ、反撃の時よ！」

「打って出る気か？」

「姫に援軍を頼みますか？」

「いえ、こちらも陣を整えてください。後文醜さん、貴女の部隊は後方に下がってくださいね。」

「なっ、何でだよアネキ！」

「貴女の部隊の騎兵は我が軍の最精鋭。無駄に消耗するわけにはいきません。」

「貴女の騎兵を下げてでも数では互角。様子見のために一度当たるだけですから。」

「了解、騎兵を下げてください。」

何を考えているんですか、曹操？

「私はこの時をどれ程待っていたか、貴女は分かっているのかしら、袁姫？」

「さあ？ 私は待っていなかったので分かりません。」

「今日、貴女の全てを私の物にしてみせる！」

「…私は貴女が怖かった。貴女の覇気、智謀、統率力全てが怖かった。でもそれも今日で終わりですね。貴女はここで歴史からいなくなるのですから。」

「全軍突撃！」

曹操軍二十万と袁紹軍三十万の戦いは数では袁紹軍が勝っていたが互角の戦いが続いていた。

「くっ、攻めきれないだと！」

「夏侯惇將軍！」

「なんだ！」

「張遼將軍の騎馬隊が敵の騎馬隊と衝突、張遼將軍が僅かに有利との事です！」

「霞の騎馬隊でも互角だと！」

「また左翼の夏侯淵將軍と典偉將軍苦戦中です！」

「なに！秋蘭が苦戦だと！」

「夏侯惇將軍とお見受けいたします！」

「何者だ！」

「私は袁家の突撃隊長、張コウなのです！尋常に勝負！」

「この私を恐れずれに向かって来るとはいい度胸だ！」

戦場のあちこちで激戦が繰り広げられていた。

「やるではないか、張コウ！」

「くうっ、これが猛将夏侯惇の力なのですか、でも！」

「夏侯惇將軍！」

「今は一騎討ち中だぞ！」

「曹操様から伝令です、敵を押し返せ、です。」

「！」

「張コウ殿！」

「何ですか！」

「袁姫様から後退して体制を立て直すとの事です。」

この狙ったかのようなやり取りの後、袁紹軍は後退を始め、曹操軍はそれを追撃した。

しかし前線の顔良と張コウはそれをうまくいなしながら後退を成功させた。

この一戦で袁紹軍は三千人、曹操軍は四千人の死者を出す。

「河岸まで押し出されちゃいましたね。」

「大丈夫ですよ。これは様子見。次は私と文醜さんも出ますから。」

「

「アタイも出て良いのか、アネキ！」

「ええ……」

「えっ、袁姫様！急いでここから離れてください！」

「何事ですか！」

「そ、ソ授様から伝令です。河川の水位が著しく低下中。敵は水

計を…」

ゴゴゴゴッ！

「なっ！」

袁家軍先鋒三十万は壊滅した。

袁紹サイド

「なっ！」

誰も言葉を発することが出来なかった。

その中でいち早く冷静になったのはソ授だった。

「れ、麗羽様、五万程兵をお貸しください！」

「……………」

「早く堤防を崩さなければ先鋒は全滅ですぞ！」

「！、は、早く堤防を崩しなさいな！袁姫ちゃんは！猪々子さんは！斗詩さんは無事ですの！」

気がついたら仰向けに倒れていた。確か水…

「ッ！誰か、誰かいなか！」

「はっ！」

「味方の損害は！」

「文醜様の突撃機動軍は全滅、比較的高台にいた顔良様と張コウ殿の部隊は損害は軽微。袁姫様の銀装隊は…半壊です。」

まさか水計を使われるなんて。

「そ、曹操軍だー。」

「くっ、動ける者は私に続きなさい！このままではなぶり殺しよ！」

生きて、麗羽姉上に会えるだろうか…。

曹操軍サイド

「これ程とは！」

「何を呆けているの。すぐに攻撃を再開しなさい！」

「はっ！」

今まで押されていた分を巻き返すかのような猛攻が始まった。

「ん？ 水位が下がり始めた？」

「アネキ、水位が少し下がってるって！」

「ソ授さんが堤防を崩したんだよ！」

「顔良さん、文醜さん、兵を纏めて徒河してください。」

「アネキ？」

「私が殿を勤めます。」

「だっ、駄目ですよ！」

トン！

「うっ！」

「アネキ！何して！」

顔良さんを気絶させて文醜さんの方に投げ渡す。

「早く行きなさい！少しでも多くの兵を向こう岸に！」

「馬鹿野郎！アネキ置いて行けるかよ！」

「お願い、早く行って！」

「くっそー！」

文醜さんが顔良さんを背負って走って行く。

そうです、それで良いんだ。

「袁姫様。」

「ごめんなさいね、貧乏クジ引かせて。」

「我ら銀装隊は袁姫様と共に。」

「さあ、味方のために時間を稼ぎますよ！ですが、狙うは曹操の首！」

「「「応！」」」

袁姫と銀装隊の奮闘により、生き残った部隊は徒河に成功する。しかしその数は侵攻時の半分以上の九万程であった。

「麗羽様、撤退の命令をお願いいたします。」

「馬鹿を言わないでくださいな！まだ袁姫ちゃんが来てませんのよ！」

「袁姫様の思いを無駄になさいますな！」

「！」

「袁姫様は自らの身を犠牲にして麗羽様の為に時間を稼いでいるのですぞ！」

「私の為に…」

「先鋒は壊滅致しましたが本隊は無傷です。キ州に戻り体勢を立て直せばまだ麗羽様は戦えます！」

「……………撤退いたしますわよ。」

「はっ。」

「袁姫様、あれをご覧ください。」

本隊が撤退していく。姉上、よくぞ御決断なさいました。

周りを見渡す。手塩にかけて育てた銀装隊ももう百人を切った。しかも完全に包囲されている。

でも！

「殿の勤めは果たしました。我らもこれより撤退します。」

「はっ！」

まだ諦めない！

そこからは自分でもよく覚えていない。ただ追撃してくる敵から必死に逃げ、包囲してくる敵を殺して包囲網を食い破った。

だが結局河岸に追い詰められてしまった。味方は……もういない。

「袁姫。」

「ハア、ハア、何ですか、惇ちゃん？」

「投降しろ。華琳様はそれを望んでいらっしゃる。」

「ハア、馬鹿な、私がそれを受け入れるとでも？」

「そうだな、だから！」

惇ちゃんが太剣を抜く。

「ええ、そうじゃなくてわね！この殲姫を恐れぬならばかかってきなさい！」

「ハアア！」

太剣と薙刀がぶつかる。

力と技。周りの曹操軍の兵はその圧倒的な武のぶつかり合いをただ見守る事しか出来なかった。

しかし…

キーン！

ヒュンヒュンヒュン…

ザク！

袁姫に夏侯惇の攻撃を凌げる程の力は残っていなかった。

「ハア、ハア、殺しなさい。」

「華琳様に生きたまま連れて来るようにと言われている。」

「舐めるなあー！」

その咆哮に曹操軍の兵が反応してしまう。

「うわー！」

「化け物だー！」

一人、また一人と弓を放つ。

「や、止めぬか！何をしている。」

グサグサ！

「クハァッ！」

「袁姫！」

「姉者！」

「「春蘭様ー。」」

「この…髪の毛一本とて、曹操には渡しませんよ…」

一歩、また一歩と川に向かう。

「何をする気だ、袁姫！」

夏侯淵さん、貴女とはもっと別な形で会いたかった。

「麗華！」

「曹操！これで袁家が負けたと思わぬ事だ！」

「……。」

「麗羽姉上は必ず貴女を倒し、この国を再建するだろう！」

「グフツ、そして……貴女には髪の毛一本渡しませんよ。」

「袁姫！私は……」

「袁家に、栄光あれ！」

ザパン

「ッ、早く引き揚げなさい！早く！」

袁紹と曹操の一大決戦、後に「官渡の戦い」と呼ばれる戦いは曹操軍の戦死者一万人程に対して袁紹軍の戦死者十五万人以上という袁紹軍の大敗て幕を閉じた。

なお、袁姫の死体は発見されなかった。

これ以降、袁姫の名が歴史の中に出てくる事はない。

十八話（後書き）

地名とか、何で袁姫の所だけ堤防が壊れるとか多々おかしな点があります、そこは御都合主義って事をお願いします。

第十九話（前書き）

次
に
続
く
閑
話
み
た
い
な
も
の
で
す
。

第十九話

袁家の大敗、そして袁姫の死は歴史の齒車を加速させた。

袁家を撃退した曹操は撤退していく袁紹を追撃せず、軍勢を西に走らせた。

これに対し馬トウは一族を全て召集し、連合を組んでいる他部族からも兵の供給を受けて対応した。

しかし、袁紹が大軍を率いて南下した時にさえ皇帝が曹操の元に居ることを理由に西からの攻撃を加える事の出来なかった馬トウに流れは傾かず、僅か一回の開戦で曹操軍の猛将夏侯惇に打ち取られてしまう。

西域連合はその戦から何とか母親と一族の遺骸を背負いながら涼州に帰還した馬超を総大将に据えてもう一度連合軍を組織したが曹操軍を止められず、馬超と従姉妹の馬岱は敗走。涼州、擁州を治めた西域連合は滅亡した。

敗走した袁紹は再起を図り、曹操が馬トウを攻めている内に四十万の大軍をまた組織してみせた。

しかし軍の中心であった袁姫を失い、精細を欠く袁紹軍はまたしても大敗。総大将の袁紹、文醜、顔良が乱戦中行方不明になり袁紹軍は事実上崩壊した。

袁成、田豊、ソ授、審配は業の袁家居城で籠城戦を繰り広げたが遂に城を枕に自害した。

張コウ、高覽は業近くの城に籠り抵抗を続けたが袁成らの自害を知り、部下の命の保証を約束させたうえで投降した。

青州で最後まで抵抗を続けた郭図は数ヶ月に及ぶ抵抗の据えに討ち取られた。

ここに河北四州を支配し権勢を極めた河北袁家は滅亡した。

時を同じくして汝南を孫家の力を借りて奪還した汝南袁家も曹操の攻撃の前に敗退。滅亡の道を辿ることになる。

袁術、張勳が行方不明なことをここに記しておく。

なお、紀靈は夏侯惇との一騎討ちに敗れ戦死している。

揚州の孫家は劉表との因縁を終らせるために再びケイ州に侵攻。そして遂に母親の仇をとることに成功する。

しかし、制圧したケイ州の民政を落ち着かせている最中に汝南が曹操の攻撃を受け、援軍を組織しているうちに袁術は曹操に敗れてしまう。

母親からの悲願である江南の制圧には成功するが何とも素直に喜べない結果になってしまった。しかも援軍を送る事が出来なかった事が後々孫家に暗い陰を落としていく事になる。

このような中、勢力を急激に伸ばした勢力がある。

劉備一行である。その話をするには時を少し遡る必要がある。

徐州は至って平和であった。他所では曹操と袁姫が睨み合い、孫策も劉俵との対決のために力を蓄えている。そんな中徐州は平和で、しかも幸せの絶頂であった。

「いやゝめでたいねえ！」

「ああ！劉備様と天の御遣い様との間にお子様がお生まれになった。こんなにめでたい日ねえ！」

そう、天の御遣いこと我らが一刀殿は群雄がしのぎを削っている間にあの劉備の豊満ではち切れんばかりの体をそれはもう昼も夜も二

ヤンニヤンしまくり、挙げ句身籠させたのだ。

「ヘックシヨイ！」

「大丈夫ですか、兄上？」

「ああ、ありがとう大丈夫だよ、桜花。」

この俺を心配してくれている彼女の名前は劉封、真名を桜花という。

彼女は桃香の従姉妹で今まで親が益州の官吏だったから益州に居たのだが桃香が徐州の州牧に就任した事を聞きつけて手伝いに来てくれたんだ。

性格は桃香と愛沙の良いところだけを合わせたような性格だな。

桃香みたく底抜けに優しく、でも愛沙みたいに自分の中に一本の芯を持っているって感じかな。

ただ……

「あつ、兄上が風邪を…どうしよう。私のせいで兄上が…どうしたらいいの！」

変なところで変にネガティブな思考に落ちやすいのだ。前も桃香が身籠ってすぐに何も無い所でスッ転んだ時なんかは危うく自害しそうになった。

「桜花、落ちつけて。ただのくしゃみだよ。」

「ふえ？」

ぐう！上目遣い＋涙目だと！なんつう破壊力だ！

「俺は大丈夫だし俺がくしゃみをしたのは桜花のせいじゃないからさ。」

「そっそうでしょうか？」

「さあ！桃香の変わりにこの政務を片付けるぞ！」

「はい！」

しかし、悲しいかな。朱里が何時もの桃香がこなす政務だと言って持って来た量は余りにも少なく、桜花と二人でやったところもの一時間ぐらいで片付いてしまった。……桃香、君が何時こなしている政務って……。

「アツ、アハハハハ。朱里達にもう少し仕事を貰いに行こうか。」

「そつ、そうですね兄上。」

今日も徐州は平和である。

「ほら、愛沙ちゃん、ほったプニプニだよ。」

「とつ、桃香様。そんな事をしたら劉禅様が起きて…」

「オギヤー、オギヤー。」

「あわわわっ、ほらほら劉禅ちゃん、良し良し。泣かないで。」

「ハァ」。言わんこっちゃない。」

本当に徐州は平和である。しかしその平和は長く続かなかった。

徐州軍議の間

「遂に袁姫は南下を決意してみたね。」

そうだ、袁紹軍が冀州に集結しているという報告が入り今俺達は軍議を開いたんだ。

面子は桃香、愛沙、鈴々、朱里に雛里に雷雛、途中から参加した趙雲、桜花、袁紹に攻められて逃げてきた公孫賛だ。

「これがいかにこの徐州にとって一大事か分かってるでしょうね、そこの浮かれ州牧と全身性○ご主人様。」

ダンッ！

「だから何度言わせる気だ雷轟！ご主人様に対してその口の聞き方は何なのだ！」

「愛沙、俺は気にしてないからさ…」

「しかし！」

「今は俺達が今後どう動くかを決める大切な軍議だ。だから今は軍議を進めよう。」

「ご主人様がそう仰るなら…」

「で、では私達が置かれている現状を確認したいと思いましゅ！はわわ！囃んじやいました！」

「お、落ち着いて朱里ちゃん。えと、私達が居る徐州は北に袁紹さん、南に孫策さんと袁術さん。西に曹操さんに挟まれています。」

「まさに周りは強豪ばかりだな。」

「確かにそうですが今はそこは問題ではありません。」

「何でだ？そこは重要だろ。」

あ、公孫賛…居たんだ。

「何か酷いこと考えなかった、北郷！」

「イヤナニモカンガエテナイヨ。」

「それは桃香様が袁紹さんの推薦でこの徐州州牧に就任したからです。」

「無視かよ！もう、いいよ。それでその事と周りの強豪は問題ではない事の何が関係あるんだ？」

「袁紹が桃香様を徐州州牧に推薦し、曹操さん達がそれを認めたのは桃香様がどの勢力に対しても中立の立場を取り続けたからです。」

「ふえ！」

禪をあやしながら自分もウトウトしてたな。

「あの時袁紹さん、というより袁姫お姉ちゃんが徐州に欲しかったのは曹操さんにも孫策さん、あの時はまだ孫堅さんでしたね。にも靡かずなおかつ自立した勢力を保てる人です。」

「それが桃香だったと？」

「はい。桃香様は終始中立の立場を取り続けましたし、愛沙さん、鈴々ちゃんといった猛将も居ますし……」

「反董卓連合の時に呂布も捕まえたしね。」

「そういえば恋や月達が居ないな？」

「彼女達には袁姫対策のために動いてもらってるのよ。」

「月もか！」

「詠が月をチン○御遣い様の側に居させるのを嫌がったのよ。」

「…そうか。」

「とにかく、あの時袁姫お姉ちゃんが桃香様に求めた役割は曹操さんと孫堅さんへの牽制です。」

「孫堅の北進を防ぎ曹操に少しでも兵を分散させる為、ですかな？軍師殿。」

「星さんの仰るとおりです。ですがもうその役目も終わろうとしています。」

「袁紹の南下だな。」

「はい。袁姫お姉ちゃんはその後孫堅さん、孫策さんの二代にわたって強固な同盟を孫家と結んできました。だから曹操さんを倒した後私達には何の利用価値も無いんです。」

「なら私達は曹操さんの援護をすればいいの?」

「それも出来ないんです、桃香様。」

「なっ、何で、雛里ちゃん！」

「曹操さんは一時味方をしたからといってこちらの地位を保証してくれるほど甘い人ではないはずです。」

「そんな…」

「ならどうしたら良いんだ、朱里、雛里、雷雛！」

「この徐州に居るからこんなに困るのよ。」

「ですから私達は新天地を求めるべきだと考えました。あわわ！最後の最後で囁んじやいました！」

「落ち着いて雛里ちゃん！」

「新天地？」

「はい、候補として月さん達が治めていた擁州、同じ劉姓のひとが治めているケイ州と益州があるんですが…」

「擁州は月達の身元がばれるかもしれないし、ケイ州は孫策から無駄に恨みを買うかもしれない。で、残ったのは益州なんだけどもねえ。」

「益州はここからかなり離れています。苦しい行軍になりそうですね。」

「益州から来た桜花が言うところの本当にきつそうだな。」

「でも私達が天下に近づけるまたとない機会であるのも確かだよ。」

これで桃香はショックを建国する土地を手に入れるのか。

「俺はその案が良いと思う。」

「ご主人様。」

「このまま待っていても俺達にあるのは破滅だけだ。なら少しでも希望のある道を進むべきだと思うんだ。」

「うん！私もご主人様と同じだよ！大丈夫、私達ならできるよ！皆の意見はどうか？」

反対はいないようだ。

「なら早速動くわよ。益州には私と桜花様が先行して向こうの州牧と話をつけてくるわね。」

「二人で危ないかな？」 「ご心配なく、桃香お姉さま。雷雛さんは私が必ず益州に送り届けてみせます！」

「気をつけてね桜花ちゃん。」

「その間に私達は荷物を纏めてしましましょう。」

「結構日は袁姫お姉ちゃんと曹操さんがぶつかったその時しかありません。」

「ああ、だから皆一頑張りしようか！」

「」「はっ！」「」

桃香達の夢の為、そして劉禅の未来の為に負けられない戦いが始まった。

そして遂に時が来た。

「報告致します！袁紹軍六十万南下を開始いたしました！」

「遂に来たか。」

「そうだね、ご主人様。」

「あー。」

「さあ、出発だ！」

かなり苦しい行軍を想定していたんだか思いの外すんなりと益州に着いてしまった。……こんなん良いのか？

益州は殆ど無政府状態だった。というのも前州牧は臆病な人だったらしく政治なんかを法政や黄忠、嚴顔に任せて城の奥に引き籠っていたらしい。

おいおい…

そんな中袁姫と曹操は激突して袁姫は戦死してしまった。

女学院時代からの仲だった朱里達はショックが大きかったみたいだ。朱里と雷雛は気丈に振る舞っていたが一番可愛がられてた雛里は寝込んでしまった。

そんな感じで俺達もドタバタしてただけでもっと大変な事があった。涼州の馬超が曹操に敗れて落ち延びて来たんだ。

桃香も他の皆も受け入れるのに反対な奴はいなかった。

しかしこれで曹操と完全に敵対する事になるんだな。隣のケイ州の劉俣も孫策達に滅ぼされたし、三國志の形が出来上がってきたな。

一人のイレギュラーが歴史から姿を消した。しかしその歪みは少しずつ、だが確かにこの外史を呑み込もうとしていた。

第十九話（後書き）

駄文をこれからもお願い致します。

第二十話（前書き）

そろそろ限界です…死にそうです…

第二十話

そして時は流れる。河北は曹操が握り江南は孫策が統治。劉備は益州をしっかりと治めていた。

これだけを見れば三國志の形が出来上がったように見える。しかし内では三国ともかなりの問題を抱えていた。

まず漢帝国皇帝から魏侯の位を賜り、名実共に魏国（まだ漢帝国があるので帝国を名乗らない）を建国した曹操の問題、それは言うまでもなく袁家が統治していた河北四州の統治である。

袁家が侵攻し、それを撃ち破って手に入れた河北四州なのだが袁家の力が未だに無くならないのだ。

民から見れば曹操は侵略者であり、自分達の為に善政をしてくれていた袁家を滅ぼした彼女を受け入れる事など到底出来るものではないのだ。しかし受け入れられないといって反抗する事は出来ない。彼等にもその日の生活があるのだ。

しかし不満は少しずつ溜まっていく。去年より収穫が少なかった。役人が袁家の時よりも働きの悪い等々。

去年より収穫が少なかったのは働き手の男が戦争に駆り出されたから。そもそも統治する組織が変わったのだから役所が上手く機能しないのも致し方ない。別に統治出来ていない訳ではないのだ。

それでも不満は溜まる。

最初は民の小さな抗議。それに豪族が加わり暴動になった。さらに袁家の残党が加わり乱になった。

曹操が河北四州で初めに始めなければいけなかった事は民政を落ち着かせる前に豪族や袁家残党の鎮圧であった。

結果的に河北四州の統治に追われ、曹操は当分の間攻勢に出ることが出来なかった。

次に江南の孫家である。

ケイ州を制圧。その統治を妹の孫権、副軍師の陸遜、呂蒙に任せ自身は揚州で北進の為の準備を進めていた。

本来なら孫家も曹操と同様に内政を充実させる為に攻勢は控えるべきなのだが、それが出来ない理由があった。

汝南袁家の滅亡である。

孫家はケイ州攻略の前哨戦として袁術に援軍を出して汝南を奪回させている。

そしていざ自分達がケイ州攻略に臨んだらその汝南が曹操に攻撃されたのだ。まさに絶妙なタイミングである。

孫家が母親の仇である劉表を討ち取り、袁術に援軍を組織した時にはもう汝南袁家は滅亡した後であった。

江南の民は少なからず袁家、袁姫のもたらす恩恵を受けており、曹操に対して仇を取るべしという意見が強かった。

下手にこの声を封じようものなら乱が起き、せっかく孫権や周瑜達が立て直した民政がまた駄目になってしまう。

結果、取るべきでは無い時に孫家は攻勢の構えをとらなくてはならず、孫策は曹操の手に落ち、今は張遼と楽進が駐屯している合肥に張り付かなければいけなくなった。

そして長い間対陣する事は財政を圧迫するものであり、周瑜達は現状の打破する為に頭を痛める事になる。

次に劉備一行の治める益州もといシヨクだが、国家としては一番悲惨な状態である。

国土は天然の要塞に守られている為に防衛には向いた土地なのだが他国を攻めずらいという難点がある。

曇りの天気が多い為に作物が育ちにくい。人口は大きな乱などに襲われたことが無いため安定しているが僻地に有るために極端な人口の増加が見込めない。

この人口の増加が見込めないというのは国家の根幹に関わる問題だ。

他の二国が一回の戦争で受けた人的損害を一年で回復出来るとする。この二国に対してシヨクは二年、三年をかけなければ回復出来ないのである。

それでもこの二国を相手にこの国が存続できたのは優秀な軍師達の方と猛将達の働きがあつてこそである。

とにかく、三国の形は出来上がった。そして物語は魏国に二人の少女が仕官したことで加速していく。

「司馬家の人間がこの都に居るですって？」

「はい華琳様。何でも国を放浪し、数年ぶりに家に帰って来たとか。」

「桂花、すぐに参内させなさい。」

「仰せのままに。」

「なあ、秋蘭。」

「何だ、姉者？」

「司馬という奴はどんな奴なんだ？」

「私も詳しくは知らんが、確か八人ぐらい兄弟がいて…」

「司馬八達。」

「華琳様？」

「司馬家には八人の兄妹がいてね。その八人がみな宰相になるだけの才能がある達人だから司馬家の八達。分かったかしら、春蘭。」

「おおー、ならその八人が仕官してくれば大助かりですね華琳様！」

「アンタって本当に馬鹿ね。」

「なっ、桂花貴様！」

「仕官させれるんなら華琳様はとっくに仕官させてるわよ。」

「？」

「皆死んでいるのよ。」

「なんですとー！」

「ある者は乱の鎮圧途中に、ある者は疫病が蔓延する村を救いに行き。そうやって民の為に奔走して一人、また一人と死んでいき、最後に残った次女で兄妹の中で一番優秀だと言われた司馬懿が数年前に行方不明になり、司馬家は歴史から姿を消した。」

「ならその司馬懿とやらだけでも仕官させなければいけませんね、華琳様！」

「そうね、出来ることなら。」

「?」

「かなり歳をとっているのよ。」

「なっ!」

「まあ、いいわよ。桂花、司馬懿に参内するように遣いを出して。」

「はい、畏まりました。」

略陽郊外

荒れた屋敷の中、初老に入ったばかりの女性が呟く。

「良い入れ物が手に入ったわね。」

側には二人の少女が寝かされている。

「師、昭、もうすぐよ。」

その初老の女性が屋敷に訪れてから数日後、近くに住む妙齡の女性が失踪する事件が多発した。

さらに後日、ミイラになった女性の死体が数十体も見つかり都を騒がせた。

魏国軍議の間

「このような老骨にいったい何の御用でしょうか？」

「単刀直入に言うわね、私の為にその才を使いなさい。」

「…ッフ。」

「貴様、何がおかしい！」

「止めなさい、春蘭！」

「華琳様へ。」

「魏侯様もお分かりでしょうに。この老体は最早政務等には耐えられません。」

「しかし貴女の才をこのまま潰してしまうのは余りにも惜しいわね。」

「そこで、私では最早国のために奉公出来ませぬ故に娘を奉公に出したいと思っておりました。」

「貴女の娘？」

「はい、実はもう連れて来ているのですが…」

「仕事が早い事。まあ良いでしょう。連れて来なさい。」

「畏まりました。師、昭、入りなさい。」

「はい。」

「ハイ！」

入って来たのは二人の少女。一人は美しい黒髪を床すれすれまで伸ばし、黒と紫を基本とした着物。

もう一人は同じ黒髪を肩程で切り揃えて赤と白を基本としたなんともめでたそうな着物を着ていた。

「髪の毛の長い方が姉の師、短い方が妹の昭でございます。二人共半人前ですから二人でやっと一人前。私の代わりに何とぞこの二人を使ってやって下さい。」

「お母さん、私あんな人達と一緒に仕事するなんて嫌！」

「こら、昭！」

「貴様、我々の何が気に食わないのだ！」

「気に入る分けないじゃない！袁紹ぶっ殺して河北四州制圧してから何もたついてんのよ！とっとと孫策と劉備殺しちゃいなさいよ！」

「貴様！」

「ならアンタなら今の現状を直ぐに改善出来るのかしら？」

「少なくともどっかの変態発情猫軍師よりかは巧くやって……」

「パン！！」

「！！」

「いい加減にしなさい、昭。」

「お…お姉ちゃん…。」

「皆様も不快な思いをさせてしまい申し訳ありません。」

司馬師はそう言うのと深々と頭を下げた。

「本当よ！アンタ達いったいどういう教育してんのよ！」

「全くだぞ！」

「そこまでにしなさい、桂花、春蘭。」

「「華琳様？」」

「それで、貴女に私はどう見えたのかしら、司馬師。」

「武、知略共に並び立つ者がいない。まさに覇者の名が相応し方
だと。」

「当たり前だ！華琳様以外にこの乱世を終わらす事が出来る方はおられん！」

「あら、初めてまともな事言ったじゃない、春蘭。」

「何だと桂花！」

「ええ、三人の王の一角を担うに相応しい方だと思います。」

「三人の王？」

「はい、江南の孫策に益州の劉備。そして河北の曹操様で三人の王です。まあ、孫策と劉備は王を名乗っていませんが名乗るのは時間の問題でしょう。」

「貴様！華琳様の前でよくも他の者を王等と！」

「良いではありませんか。別に皇帝を名乗っている訳ではないのですから。」

その場に居合わせた全員が息を呑んだ。今司馬師は謀ることもせず

に皇帝という言葉を口にしたのだ。

いくら漢帝国が形だけの物になったにせよ、余りにも不謹慎な言葉である。

「不謹慎よ、司馬師。」

たまらず稟が咎めるが…

「あら、漢帝国の臣だなんて思ってもいない人に咎められたくありませんね。」

「あら、なら貴女は漢帝国の臣なのかしら？」

「それは勿論。ですから私が忠誠を誓うのは漢皇帝陛下ただ一人です。」

「先程から貴様はいい加減にしろ！これ以上の華琳様への狼藉、許さんぞ！」

「良いわ、春蘭。」

「華琳様？」

「良いでしょう。ただし覚えておいて。私はいずれこの国を一つに纏めるつもりよ。」

「……。」

魏国で、確かに何かが動き始めた。

陽州

「はあゝ、疲れたゝ冥琳ゝ。」

「兵が見ている、少しはしゃんとしろ。」

「だって。」

ケイ州、陽州にあった袁家の敵討ちの気運は合肥要塞で魏軍と少し小競り合いをしたら落ち着きを見せ始めた。

周瑜達、軍師面子はこの気に民政を整えようと怒濤の勢いで仕事をこなし、孫策はその余波をもろに受けたのだ。

しかも何時もならさぼって酒でも飲んでいるのだが今自分が脱け出せば国政が滞る。

「早く蓮華に仕事を譲っちゃおうかしら？」

「馬鹿な事を言う暇があるなら手を動かせ、雪蓮。」

「……………」

「雪蓮？」

「劉備と同盟を組みましょう。」

「いきなりどうしたんだ？」

「同盟を組んで私達は徐州、劉備達は擁州と涼州をとるの。」

「合肥要塞はどうするんだ？」

「そんなの徐州を取れば勝手に孤立するでしょ。」

「……。」

「私達が同時に攻めれば曹操は軍を二つに別けなきゃいけない。武将もね。そして私は全力じゃない曹操に負ける気なんかしない。」

「いったい急にどうしたんだ、雪蓮。」

周瑜は驚愕していた。今まで戦略的な話には口を出さなかった雪蓮がいきなり、しかも自分が考えていた策を言ってきたのだ。

アホ面を晒すところだった。

「…袁姫ならどうするかって考えてたの。」

無言で次を促す。

「袁姫ならこれぐらい考え付くでしょ？」

「そうかもしれないな。」

「なら話は早いわね！」

ガバツと勢いよく立ち上がる。

「ちよっくら益州に行ってくるわね！」

「仕事はどうするんだ！」

「えー、冥琳お願い！」

「馬鹿者、今の我々に王が席を空けていられるほどの余裕があるか！」

「じゃあどうするのよ！」

（「十」）ニヤリ

「なによ？」

「実は私もお前と同じ事を考えていたんだ。だからな……」

懐から一通の書状を取り出した。

「益州に書状を出した。数日後には向こうから使者が来る手筈になっている。」

「仕事が早いわね。」

「伊達や酔狂でお前の軍師はやっていないんでな。」

今日も孫家は平和で、孫策の仕事は大量だった。

益州

「皆、もう知ってると思うけど孫策から同盟の申請が来た。」

「内容は相互不可侵に軍事作戦を展開するとき相互の連絡の義務化、等です。」

「孫策の狙いは何でしょうか？」

「多分、曹操さんに一国で挑むのは無謀だと考えたのではないでしょう、か、愛沙さん。」

「悪くないわね。今の曹操は強大すぎるもの。いくら内部に問題を抱えていても、ね。」

「だが共闘するにしても我々は乾坤一擲の戦いになる。そう簡単に相手に合わせた戦は出来ぬのではない、か、軍師殿？」

「それは大丈夫だと思います。乾坤一擲の戦いになるのは孫策さんも一緒でしょうから。」

「なるほど。」

「この作戦は孫策さんとの連携が大切です。戦は当分先になるでしょうから、今のうちに出来る事を精一杯頑張りましょう。」

「」「応!」「」

魏国

魏では国内を落ち着かせた後に来る孫策、劉備達との戦いについて議論が行われていた。

「孫策、劉備が同盟を組み、我々に挑んでくるのは火を見るより明らか。ならば今のうちに各個撃破してしまうのが得策です！」

軍議では今すぐ軍を動かすべきとする稟、春蘭と今は相手の出方を見るべきと主張する桂花、秋蘭が意見を争わせていた。

珍しく夏侯姉妹が論争をしていた。

「何故分からんのだ秋蘭！今、孫策か劉備を叩いてしまえば民政はいくらでも整える事が出来る。残り一国にしまえば奴らは我々に手も足も出ず降伏するしかなくなるではないか！」

「姉者こそ何も分かっておらん！今こんな時に兵を徴兵してみろ、民の反発はより大きくなる。後ろに不安を抱えたまま戦など出来るか！」

「そうよ、少しは考えなさいよ！第一兵糧はどうすんのよ！」

「今年は稀に見る豊作ではなかったか！」

「そんなもん袁家との戦いで半壊した軍を建て直すのに使って無いわよ！」

「はあ、双方の意見は分かった。そうね…風、貴女の意見はどのようなかしら？」

「グウ。」

「寝るな！」

「おおっ！議論が長すぎて寝てしまいました。」

「それで、貴女の意見はどのようなかしら？」

「そうですねえ、私は桂花ちゃんの意見に賛成ですかね。」

「なっ、風！」

「その理由を聞かせて。」

「はい、秋蘭さんが言ったように後ろに不安があるのに戦をするのは得策ではありません。それに国内を落ち着かせた時、私達と他の二国には埋めようの無い国力の差ができてはまずです。」

「だから今は戦うべきではないと？」

「はい。」

「司馬昭、貴女の意見を聞かせて。」

「加護萌です。」

「あら、真名を預けてくれるのかしら？」

「はい、私が仕えるに値する方だと認めて差し上げますよ。」

「それは光栄ね、加護萌。」

「ただし、中途半端な事はしないでくださいね。」

「したらどうするのかしら？」

曹操の覇者としての威厳とカリスマ性に溢れた笑みに一同が見惚れる。

そして……。

「私が貴女を国ごと食べちゃいますよ。」

曹魏の方針は司馬師と司馬昭が攻勢をかける案に賛成を投げた為、
軍の再編がすみ次第に攻勢に出ることが決まった。

某所

「曹操さんは来年にも攻勢をかけるようですね。」

「其についての対策もしてあるのだろう、諸葛亮。」

「はい、周瑜さん。」

ここには益州の劉備軍参謀長兼総理大臣を合わせたような仕事をしている大軍師諸葛亮と揚州の孫策軍大都督である周瑜が雁首を揃えて話し合っていた。

「曹操はどちらを攻めると読んでいる？」

「多分孫策さん達かと。」

「ほう…」

「正直益州は漢中に軍を展開されると河北に出られませんから。」

「なら、そこそこの兵を漢中に展開させてお前達の頭を抑えてしまい、その間に私達を叩いてしまうと。」

「国内が不安を抱えているとはいえ曹操さんにはそれをやるだけの力があります。」

「ならばどうする気だ？」

「それは……。」

大軍師達の策謀は今動き出した。

曹操軍サイド

「華琳様、侵攻の準備は整いました!」

「加護萌、夏萌、貴女達には劉備達の抑えを命じるわね。」

「畏まりました。」

「なによ!仲間外れじゃない!」

「違うは、夏萌。私が志願したの。」

「御姉様が?」

「益州の劉備の動きが静かすぎるの。それに擁州と涼州で豪族が活発に動き出したの。桂花さんや稟さん達が華琳様に着いていくから私達ぐらいしかそれを治められる文官がいないのよ。」

「そっか、私は御姉様と一緒になら何処でも良いよ!」

「なら、兵はどれくらい必要かしら?」

「長安に十万程くだされば樂ができます。」

「桂花、稟、風。」

「そのぐらいが妥当かと。」

「長安は度重なる乱等でかなり荒廃しています。退役間近の兵も連れていき、この際改修に取り掛かってはどうでしょうか？」

「ぐうぐう。」

「寝るな！」

「おおっ！ダブルの突っ込みですか。」

「風、早く華琳様に意見を言いなさい！」

「桂花ちゃんはせっかちなのですよ。そうですねえ、兵は五万、あとは稟ちゃんと一緒に退役間近の兵を連れて行けば良いと思うのですよ。」

「あう！それは少なすぎで……。」

「五万、上等じゃない！御姉様ならそれくらいで十二分な仕事が出来るわよ！」

「ちよっ、夏萌ちゃん！」

「なら五万で決まりね。」

「曹操様まで酷い！」

「フフツ、華琳よ。」

「！…はい、華琳様。」

「長安付近での徴兵を許可するから必要なら兵は補充しなさい。」

「あと、華琳様。」

「何かしら？」

「もし戦に敗れるような事がありましたら…」

「貴様、出陣前になんということをし！」

「春蘭、黙りなさい。」

「うう、分かりました。」

「で、敗れるような事があつたら？」

「どんなに無様な形でもいい。必ず生きて都までお戻りください。」

「加護萌。」

「はい。」

「戦が終わったら寝台に來なさい。たっぷり可愛がつてあげる。」

「「華琳様！」」

「それは楽しみです。」

そして曹操と司馬師はお互いの戦場に出陣した。

第二十話（後書き）

赤壁とか美味しいんでしょうか？

第二十一話（前書き）

司馬昭の真名はナツメと読みます。

駄文ですがよろしく願います。

第二十一話

長安

「あゝもう！何なのよこの仕事の量！」

「城壁の修理の具合はどうなの、夏萌ちゃん？」

「ハイッ御姉様！七割程が修理を終了しました！」

「残りの部分の修理も急がせてね。」

「ハイッ！おいつ、誰かいらないの！城壁の修理の日程を見直すわよ！」

「こっ、これ以上の短縮は…」

「何か言った？」

「見直させていただきます！」

「働ける奴は片っ端から働かせなさい！御姉様の為にも！直ぐに！」

「はいいい。」

「司馬師様。」

「何かしら？」

「長安の修理を急ぐ理由を聞かせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「あんたたち下っぱは言われた事をやればいいのよ！」

「やめなさい、夏萌ちゃん。長安の修理を急ぐ理由はね、ここが戦略的にとても重要な場所だからよ。」

「そこまで重要な場所でしょうか？」

「まず西域、擁州や涼州のさらに先。五胡なんて呼ばれている連中に対しての一大拠点であり、交流の場でもある。益州の劉備への防衛拠点でもあるしね。むしろ今までろくに修理されてなかった方

が異常なのよ。華琳様が孫策を討伐に向かったから劉備達が仕掛けてくるかもしれない。なら少しでも早く長安は修理しなければいけないでしょ？」

「私の考えが浅はかでした。至急作業の日程を見直します。」

「あと長安に住み着いてる浮浪者達を作業員か兵として全て宿ってちょうだい。」

「それはいかな理由からですか？」

「まずは大量に動員しても害が無い。農民から動員すると生産力が落ちちゃうからね。しかも浮浪者が減れば治安も良くなる。兵役か何かの仕事に就かせて戸籍を与えれば僅でも税を納める。良いとこづくしでしょ。」

「近隣の街からも動員出来るように手配致します！」

「よろしく。」

「御姉様、後は私に任せて少しは休んでください。長安に来てから働きっぱなしじゃないですか！」

「今は少しでも力を蓄えておくべき時よ夏萌。」

「分かりました。でしたら少しでも休憩をとってください！」

「もう、分かったわよ。ただし夏萌ちゃん、貴女もお茶に付き合
ってね。」

「ハイッ！」

長安は少しずつ、その形を変えていった。

漢中

「長安が何やら騒がしいですなあ、紫苑殿。」

「そうね、御主人様が危惧されていた曹操軍の二方面作戦。向こうはやる気かしら？」

「いや、まだ分かりませんぞ。少なくとも今長安にいる兵は五万程。とてもではないが漢中を落とせる兵力ではない。」

「そうよね、たぶん朱里ちゃん達が言うように私達への最低限の抑えのはず…」

「しかしあの御主人様の取り乱しよう…少し異常でしたな。」

そして二人は軍議での出来事を思い出す。

成都

「曹操さんが大規模な徴兵を開始しました。たぶん来年の夏には孫策さんに対して攻勢を仕掛けるものと思われます。はわわっ、噛まずに言えました！」

「曹操は合肥から直接建業を狙うつもりか？」

「い、いえ曹操さんはハン城を拠点にケイ州北部から侵攻するようです。あわわ！私も噛まずに言えました！」

「何やってんのよ。曹操は私達と孫策の連絡を妨害する意味も込めてケイ州北部から侵攻してるのよ。分かってる、その二人！」

「ああ、分かってるって。だから主力は孫策と早めに合流させたんだろ。」

「う、うん。もちろん分かってるよ！」

「分かってるなら良いわよ。一応魏への牽制のために何人か残って……。」

「紫苑、焰耶、蒲公英、頼めるか？」

「ティ○コ御主人様？」

「おい！さりげなく御主人様に何を言っている、雷鰐！」

「ちょっと黙りなさい！」

「なに！」

「理由を聞かせなさい、御主人様？」

「紫苑には漢中全体の指揮をとってもらおう。二人はその補佐だ。」

「補佐なら他にも人がいると思うけど？」

「今漢中に必要なのは守りに強い布陣だろ？どんなに敵が隙を見せ
ても攻めちゃいけないんだ。主力がない今、占領地を維持するだ
けの力は今の俺達には無い。」

「それで？」

「紫苑は將軍としての力も凄いが政務の手腕も凄い。正直一緒に
ケイ州に来てほしいけど今漢中には紫苑が必要だ。」

「あらあら、そんなに誉められたら照れてしまいます、御主人様。」

「凄い笑顔だ。」

「焰耶と蒲公英を補佐につけるのは焰耶は兵を鼓舞するのが上手い。焰耶がいれば大丈夫って気持ちになるって兵達は言ってた。蒲公英は機転が利くし伏兵を指揮させたら多分この中で一番上手い。まさに漢中にぴったりだろ？」

「正直アンタがここまで考えてるなんて以外ね。」

「雷雛！お前は…」

「いいんだ、愛沙。」

「御主人様…」

「正直に言えば俺は今までただ流されるだけだった。桃香、愛沙、鈴々達の誓いを見て、桃香の願いを叶えたいと思った。でも、どこかで俺なんかに何ができるって思ってたんだ。政務は雷雛や朱里達に。戦争は愛沙達に任せればいいんだってね。」

「……。」

「それでも…その…桃香と結ばれて、劉禅が産まれて、一人の男として、禅がこれから生きていくこの国を少しでも良くしたい。そ

の為に俺が出来る事を全力でやりたいんだ！桃香や皆みたいにこの国の為っていう理由じゃない。自分の為の自分勝手な理由だけど…すまない、俺に力を貸してくれ！」

「はあ、アンタの覚悟は確かに受け取ったわよ！アンタ達、この戦必ず勝つわよ！」

「」「応！」」

「鈴々、翠、すぐに主力部隊に合流して徹底的にシバキあげなさい！精鋭なんかじゃない、最強にするの！」

「任せるのだ！」

「任せといってくれ！」

「愛沙、白蓮、恋、アンタ達は騎馬隊の訓練を頼むわよ。愛沙の武勇、白蓮の統率力、恋の突破力を持って張遼の騎馬隊なんかブツ飛ばしてやりなさい！」

「任されよ！桃香様と御主人様に勝利と栄光を捧げてみせます！」

「やっと…やっと普通じゃない評価をしてもらった（泣）」

「……………ん。」

「陳宮、貴女は三人の補佐を頼むわよ。白蓮以外政務のせの字も知らない奴等だから頼むわよ。」

「なっ、貴様！」

「……………？」

「私は政務もやらなくちゃいけないのか！」

「私に任せるのです！」

「桔梗、悪いけど貴女には成都に私と一緒に残ってもらうは。」

「何故だ雷雛！桔梗様は役に立たないと言うのか！」

「やめよ焰耶。軍師殿、出来れば理由をお聞かせ願えないか？」

平然を装っているが悔しさが見える。当たり前だろう、自分だけ居残りを言い渡されたのだ。

「これは曹操の迎撃に失敗した時の為の対応よ。」

「失敗など！」

「馬鹿なこと言わないで！国政を預かる身として常に最悪の場合を想定しない訳にはいかないじゃない！」

「はい、常に最悪の場合を想定し、進言するのも軍師の仕事です。」

「うっ…」

「まあそれは置いといて、成都にすぐに動ける戦力が欲しいの。ケイ州で敗れた時に主力部隊を援護して、漢中で攻勢があった時の後詰めになる部隊が。それは貴女のような経験豊富な武将に率いて欲しいの。」

「そこまで言われたらやらぬ訳にはいきませんな。その任確かに

拝命した。」

「ありがとう、桔梗。」

「ん？　そういえば星が呼ばれてないな。」

「ああ、星？　アンタは好きな方に行って良いわよ。」

「ずつ、随分私はおざなりですな、軍師殿。」

「別におざなりじゃないわよ。アンタは何処でも、どんな任務でも任せられるから自分で行きたい方に行って良いわよってこと。」

「ふむ。」

「あつ、あのね、雷雛ちゃん！」

「何よ、アンタは勿論成都で待機よ。」

「そんな！」

「あのねえ、赤ちゃん背負って戦場に出るの？」

「うっ…」

「第一戦争のあり方が変わって来てるの。」

「？」

「アンタは一国の王なの。国王はおいそれと国を空けるべきじゃないの。」

「でっ、でも皆だけ危ないところに行かせるなんて…」

「はぁ、危ないところに行くのが武将の仕事でしょうが！アンタは成都でドーンと座ってれば良いのよ。ケイ州に向かわなくてもケイ州で孫策が勝てば増援を出したアンタの勝利でもあるの。」

「でもさ、雷雛。」

「何よ、性別が雌なら何でもいい男。」

「…俺らだけで大丈夫か？桃香が行かないことで向こうに本気じゃないって思われたりしないか？」

「バカね、さっきも言ったでしょうが。王がやられたら国は終わりなの。それに国防を担う主力部隊に武将の半分以上を付けるのよ。文句言われたら帰って来なさい。」

「そっか。大丈夫ならいいんだ。」

「さて、今はこれで終わり。詳しい事は朱里と雛里と詰めてから連絡するわね。」

「よし、じゃあ解散だ!」

「○○○だけじゃなくて○○○でもいいけちゃう変態御主人様と桔梗、紫苑、星と朱里は残って。」

「もうお前がここの大軍師だな。」

愛沙と翠の顔が一気に赤くなる。

「なっ、何を言っているのだ雷雛!」

「パクパク。」

（ー十、）ニヤリ

乗るぜ雷雛！

「ああ、雷雛、君のピーは最高だったよ。」

「いゃん、恥ずかしいこと言わないでよ（＊＾―＾＊）」

ニヤニヤ。

あつ、他のやつらも。

「本当です、あの晩の激しさを思い出すと未だに体が疼きます。ねえ、桔梗？」

「わっはっは、そうじゃのう紫苑。御館様は顔に似合わず夜は恋以上の無双ぶりでしたのう。」

「蒲公英も初めてだったのにあんなに激しくされて……壊れちゃうと思ったんだから！（笑）」

「蒲公英…俺は君の初めてになれて本当に幸せ者だ。」

「こっ、このエロエロ魔人！人の従姉妹に何てことしてるんだ！」

「そっ、そうです御主人様！桃香様が居りながら何てことをしてるんですか！」

「えー、私の意思で抱いてもらったんだから二人には関係無いと思うな。」

「全くだ。御主人様からお呼びがかからなかったからと妬むでない、二人とも。」

「さて、冗談は終わりだ。皆、準備を始めてくれ！」

ドカッ！ガラガラ！

「何をコケている二人とも？」

「いや…もういいです。」

「…騎馬隊の訓練に行ってくる。」

二人ともふらふらになって出ていった。からかいがいのある二人だ。

「朱里、主力部隊の全権を預けるから頼むな。」

「ハッハヒッ！」

「紫苑、漢中の事頼む。あそこがぬかれたら俺達は終わりだ！」

「ハイ、お任せください。」

「桔梗と雷雛、桃香と劉禅の事宜しくな。」

「ハッ、お任せください。」

「任せときなさい。」

「で、星はどうすんだ？」

「私は漢中に参加したいと思います。」

「意外だな。てっきり派手な戦になるこっちだと思ってたのに。」

「なに、少し現状を離れた所から見たくなっただけですよ。」

数日後、主力部隊の最後の部隊が北郷と共にケイ州に向かった。

「長安は都と言うより要塞のようになりましたなあ。」

「これでいっそう北伐がむずかしくなる…」

「しかも治安は今の都よりよっぽど良いとか。」

「何人か畑作を送ったけど、連絡が取れないの。」

「あの司馬姉妹、かなりやりますな。」

長安

「あああああああああ！！」

「御姉様、しっかりして！」

長安では一大事件が起こっていた。

今まで長安を順調に治めていた司馬師が突然高熱を出し、意識を失

ったのだ。

「医者はなにしてんのよ！早く御姉様を治しなさいよ！」

「申し訳ございません、どの薬も、針も効かず。手の施しようが……」

チャキンッ！

「ひっ！」

首に刀を突き付けられる。

「黙れ！早く御姉様を治せって言ってるの！殺すぞこのヤブ医者
が！」

「ガアアアアアアアアア！………」

「御姉様！」

「………………。」

「御姉様、御姉様！」

司馬師はこの後二週間も意識を失っていた。

???

ここは何処だろう？私は、……で政務をしていたはず。

「人の体で随分と舐めた真似してくれますね？」

誰！

「誰はないでしょ、あんたの……の持ち主でしょうが。」

……の持ち主？ふざけないで！

「まあ、良いですよ今はね。でもその内死ぬほど後悔すると思いますよ？」

一体何に後悔すると言うの！

「おっと、時間ですね。でも……」

暗闇から出てきた手に顔つかまれる。

「少しの間、返してもらいますよ……さん。」

「御姉様！良かった。」

「筆と紙を持ってきなさい。」

「えっ？今は安静に……」

「いから早く持ってきなさいよ！」

「はっはい！」

スラスラと司馬師は何かを書き留める。

「これを至急華琳様にお渡しして。」

「畏まりました。」

ドサッ！

「御姉様！」

そして目覚めて直ぐに書簡を書き記し、また意識を失った。

意識を回復させたのは更に四日後であった。

書簡を書き記していた時、司馬師の片目が血のように紅かったそう
だ。

三國の歴史は歪な音をたてながら加速していく。

第二十一話（後書き）

赤壁の戦いなんて書けませんよ。……私文才がありませんから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7903u/>

真・恋姫無双～第二の人生は乙女だらけの三國志～

2011年10月10日13時26分発行